

川柳塔

昭和十六年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九二七号



百川協加盟

No. 927

同人特集「旅あれこれ」

八月号

川柳塔創刊80周年記念川柳大会 第10回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と き 10月10日(日) 午前10時-11時
 ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒
 (近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)
 議 事 平成15年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
 平成16年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
 ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛
 表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
 各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「大阪弁と大阪文化」—地域語を大切にする意味—

	『上方芸能』代表・立命館大学教授	木津川	計氏
兼 題	「ハ」	川柳塔社	山本義子選
	「教える」	川柳塔社	高橋岳水子選
	「神」	川柳塔社	松本文子選
	「ドレス」	川柳塔社	西出楓楽選
	「やさしい」	時の川柳社	小松原爽介選
	「手品」	ふあうすと川柳社	泉比呂史選
	「散歩」	番傘川柳本社	磯野いさむ選
(事前投句)	「塔」(9月10日締切)	川柳塔社	河内天笑選

◎各題1句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・披講午後2時45分(午後4時45分終了予定)

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日・同 所 午後5時30分-7時30分

会 費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

翌日観光 観劇・NGK「吉本新喜劇」3500円

- 事前投句および懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月10日(金)までに本社事務所宛お願いします。
- 懇親宴・宿泊・翌日観光のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。
- 記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

後 援 (社)全日本川柳協会

おとなのいい旅

— 城崎温泉 —

河内 天笑

リクルートが出している旅の雑誌「おとなのいい旅」(奇数月発行)の編集部から「夫婦で川柳されてるカッブルに」という事で日川協事務局長から、城崎行きのお話があった。次の土日という急なお話だったがよろこんでお引受けした。

大正二年八月、当時三十歳の志賀直哉が里見淳と散歩中に、山手線の電車にはねられて重傷を負い九死に一生を得た。同年十月に城崎へ養生に訪れ、滞在中の出来事や蜂、いもり等の小動物の死と、自らの生とを重ねあわせる事で書き上げた名作「城の崎にて」でも有名な、兵庫県北部の温泉である。

六月十九日朝九時にリクルートから

派遣された編集部員、カメラマン、そして私達は梅田の中央郵便局前で落ち合い一路城崎へ。この日最初に訪れたのが文芸館。有島武郎、島崎藤村、泉鏡花等々錚々たる文人墨客がこの地を訪れていることに感銘。その人達の写真や直筆を目の当りにすると、いい句を作ろうという気力が漲ってきた。次にケープルカーで訪れたのは道智上人が創建した古刹「温泉寺」。夕刻より小雨模様となり今日のお宿の「山本屋」へ。七軒の外湯が点在する温泉街の真ん中に位置する老舗旅館で、横には有名な「一の湯」がある。

二日目には夢二作品を常設展示している木造三階建ての「花兆庵」へ。広々とした和室には夢二作品がずらり。濃いお茶をいただいたあと地酒を購入して帰路についた。

この旅は「夫婦でぶらり城崎温泉歌あるき」という見出しで掲載されるので、行く先々で川柳を詠むこと二人で約三十句。編集部がどの句をとり上げ

るのかも興味津々である。作句した一部を紹介すると、

膝宥めながら温泉寺への坂

ロープウェイよ中途で止まるなよ

俗物の顔で仏に手を合わせ

お賽銭盗める位置に並んでる

心の眼曇ると仏の声聞けず

足湯でもひつついている若夫婦

旅の妻ホテルの浴衣着てはしやぎ

志賀直哉座った石へ腰を据え

ふれないで下さいとある夢二の絵

胸長のおんな大正ただよわす

モジリアニがだぶる夢二の描く女

—— 以上 天笑

台風の気配へほたる現われず

お借りした浴衣で蝶になりました

一の湯の辺りの歌碑にふり向いた

大正のロマンの部屋の白日夢

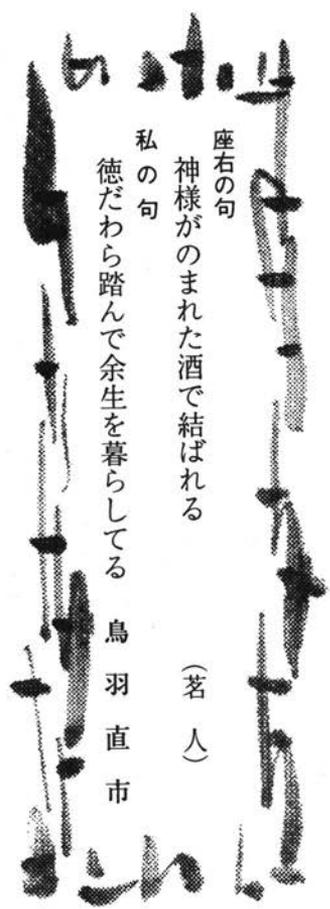
たましいが吸い込まれそう夢二の絵

宿の下駄土産屋さんへすべり込み

—— 以上 月子

A4版「おとなのいい旅」書店・

コンビニで七月中旬以降発売予定



座右の句

神様がのまれた酒で結ばれる

(茗人)

私の句

徳だわら踏んで余生を暮らしてる 鳥羽直市

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

- 巻頭言 おとなのいい旅―城崎温泉―……………河内天笑……………(1)
- 湯けむり川柳……………小林由多香……………(2)
- 川柳塔(同人吟)……………河内天笑選……………(4)
- 自選集……………板尾岳人選……………(55)
- 水煙抄……………波多野五楽庵選……………(80)
- 愛染帖…………………………(84)
- 特集 旅あれこれ……………

- 早川棲世・高橋 岳水・田中みね・前たもつ・小野句多留
 - 小川てるみ・瀧本きよし・松尾和香・藤田泰子・早川盛夫
 - 島ひかる・板山まみ子・恒松町紅・川本 畔・田中千莞子
 - 園山多賀子・出口セツ子・井上桂作・富田蘭水・新家完司
- 俳風柳多留二四篇研究 69……………(96)

湯けむり川柳

小林 由多香

鳥取県東部の岩井、鳥取、吉岡、浜村、鹿野と五つの温泉地で組織されている「いなば温泉郷協議会」で、折角恵まれた温泉、観光資源がありながら全国的に知名度がいまひとつということから、いろいろと協議をされた末に目を向けられたのが川柳であった。

誰もが気楽に参加できるよう温泉をテーマにした川柳を募ることになり、私に相談が持ちかけられ喜んで協力を約束した。

「湯けむり川柳」と名づけられて早速二〇〇一年に第一回の全国募集が行われ全国から四〇〇〇通の作品が集まった。一次選は私が担当し、賞を決める最終選考はいなば温泉郷協議会の役員会で行われた。その結果初めての「湯けむり大賞」には、東京都恩田英郎さんの

一泊じゃ湯けむり後ろ髪を引き
が選ばれて、鳥取温泉での表彰式で現金十万円が贈られた。

二〇〇二年の第二回には前年を少し上回る四五〇〇通の応募があった。前回と同じ手順での選考結果、大阪府の東節子さんの

茴香の花……………

藤田泰子選……………(98)

「微風」……………

竹治ちかし選……………(100)

一路集「泊」……………

春城年代選……………(100)

「吠える」……………

近藤春恵選……………(101)

初歩教室「冷蔵庫」……………

三宅保州……………(102)

秀句鑑賞「同人吟」……………

松原寿子……………(104)

水煙抄……………

高野宵草……………(112)

各賞選考規定……………

……………(106)

■七月本社句会……………

……………(108)

各地柳壇(佳句地十選/板山まみ子)……………

……………(114)

柳界展望……………

……………(129)

八月各地句会案内……………

……………(130)

■編集後記……………

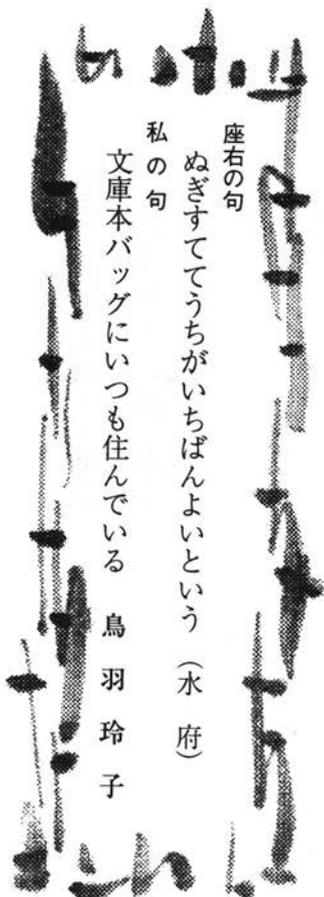
楓葉・朱夏……………(132)

座右の句

ぬぎすててうちがいちばんよいという(水府)

私の句

文庫本バッグにいつも住んでいる 鳥羽玲子



手遅れと夫が茶化す美人の湯

が「湯けむり大賞」に決まり、ご夫婦で出席された吉岡温泉からの表彰式で十万円を笑顔で受け取られた。

二〇〇三年度の第三回は協議会の行き届いたPRと、呼びかけにより、南は沖縄、そして北は北海道の全国各地から、なんと一万一六〇〇通もの作品が寄せられたのである。特に今回の応募には高校・中学・小学校で、授業やクラブ活動で川柳に取り組んでもらった学校が数校あり、大変嬉しく頼もしく感じられた。審査にも洩れや見落としのないようペテランの応援も頼んで、二次選考を終えた。最終選考も三回目ともなれば要領も良くすんなりと大賞、特別賞が決定された。

「湯けむり大賞」は山梨県浅川和多留さんお湯巡り賞味期限がまた伸びる

に、「特別賞」には兵庫県山本知佐子さんの露天の湯少し恥らうふりをする
が選ばれ、どちらも家族同伴で鹿野温泉から開かれた表彰式に出席して賞金をしっかりと手にされた。

いなば温泉郷協議会ではこの取り組みは続けて行きたいという方針である。

川柳がこんな形で歓迎されているのも大変うれしい。



河内天笑選

海南市 三宅保州

身に覚えあつて素知らぬ顔をする
何もかも背負い込んだら動けない

乗り越えた強さはほんまもんである

冒険を試してみなさいと言う他人

ビジネスでなければ土下座などしない

その人の評価を書いておく名刺

鳥取市 徳田ひろこ

ざわめきが起きだす八月の仏間

まだ十年翔り続ける新車購う

砂丘から拾う夕陽のきのう今日

かぐや姫ふるさと思つ月のほる

おつとつと友をうっかり踏みそろうな

背表紙にびたり張りつく蟬の声

河内長野市 山岡 富美子

青空のアテネを目指すキックオフ

米を研ぐことの幸せ八月忌

ライバルの癖を見抜いた突破口

烏龍茶で酔うのも仁義祝勝会

世の中の有り様を問う児等の闘

山梔子の香り慕情をかき立てる

鳥取市 近藤佳子

神様と思う主治医に今日会う日

故郷の山見えるとこまで切符買う

家屋敷処分してから持ち直し

そよ風へいい夢みてる葱坊主

派手なもの着るから皺が目立つてる

ねがいごとと神様ほけたふりなさる

鳥取市 岸本孝子

急ぐときどの信号も赤になる

Eメール赤いポストがあくびする

へそくりをときどき数えメモをする

電池切れ脳が点滅して困る

手遅れと思う顔にも金かける

正直に生きれば運も味方する

堺市神原文

年金のけりがつかぬと梅雨明けぬ
これからのもしもへ気持引きしめる
淋しくてあちこちへ本積みあげる
サンバイザー　ゴルフコースへ行きたがり
この犬が救うてくれた愛飢饉
恋文を燃やす勇氣はまだ湧かぬ

和歌山市　木本朱夏

泣いて笑って一生なんてシャボン玉
ロゼワイン五臓六腑を除菌する
無職には無職の美学などあつて
ギザギザのハートで愛に飢えている
氣遣つてくれる近くにいる他人
わたしより淋しい人が群れを出る

枚方市　海老池洋

青い空　翼の欲しくなる私
大ジョッキ私もなれる天下人
逃げ水のような幸せ追い続け
卒業証書成績のこと書いてない
選ばれて生を受けたをつい忘れ
一生に一度の主役鯨幕

堺市志田千代

平凡な一日だった大夕日
西瓜割り迷う形に割れにけり
蚊の殺生ばかりしている魂送り

葉をぬらすだけの水まきしてくれる
雑巾はいつも乾いたままである

ライバルと言われ大いに傷ついた

和歌山市　榎原公子

わたくしでなければならぬ時がある
目の中の孫が大きくなりすぎて
あじさいの笑い声して今日も雨
白魚の指を汚して旬を食む
薫風をサブリメントにする窓辺
前向きの乳房から出てこない愚口

鳥取市　春木圭一郎

いい事と気付いた事はやってみる
見栄捨てた時から友が増えてきた
人間の個性が光る自然体
自らを正したあとに思いやる
さりげなく心を物にして贈る
笑顔でのあいさつ距離を近くする

奈良県　渡辺富子

仲良しのチャットに潜む憎悪の芽
好奇心全開の妻今日も留守
人間が好きでストレスよく溜まる
オムレッツにふんわり包む今朝のうつ
徘徊の靴は一途に里めがす
病氣自慢着に男酌み交わす

広島市 森田文

一日がこんなに長い梅雨最中
気合入れて助走するしかない翼
名も知らぬひとで毎日会釈する
今日の鬱歩き疲れて消してやる
一編の詩をくり返す夏は来ぬ

竹原市 小島蘭幸

寝煙草の父はいい顔してたなあ
走り出したら止まらぬ父もわたくしも
酒飲むと父にひとつも似ていない
おふくろさんと父を語ったことがない
父の昭和と私の昭和重たいな

竹原市 森井菁居

皺くちやの母の綺麗な日本語
慌てずに順風待っているゆとり
悪行に報いはきつときつと来る
隠しごとばれて結局高くつき
瘦せぎすな妻で糖尿にはならぬ

竹原市 岩本笑子

四捨五入 私は何を捨てたのか
上り電車の中で駅弁二つ買う
秒針もピタリと合わせ昼にする
停電へ猫と遊んでつつがなし
雨に咲く虹色に咲く紫陽花か

竹原市 時広一路

命名書どう読むのやらおめでどう
白星は一つ横綱倒しても
禁煙は出来たぞ次は休肝日
竜宮城どこに潜むか凪いだ海
こせこせとするなと雲に言われそう

竹原市 正畑半覚

ひよっこりと出会った女を妻にする
回り道どこまで太くなる器
人の渦一人もぼくを見ていない
ふっ切れるまで泣くがいい夜の雨
愛すればすべて許せることばかり

竹原市 石原淑子

初めての海に歓喜の孫一歳
解禁の小イワシ料理に生ビール
恋占い花の命にする懺悔
出生率過去最低の深い意図
福祉とや老いの財布をしめあげる

広島県 藤解静風

やがておんなもおとこも匂いなくなつた
雲行きを読むネクタイを締めながら
溜息を吐いてローカル線発車
いい方へ想おう北へ流れ星
MRI輪切りの脳が他人めく

宇部市 平田実男

政治家が貧乏していたのは昔
檜山のガイドブックを子がくれる
アルバムへ整形前を剥いだ跡
自爆テロ昔むかしの日本かも
門限のマイナス面は考えず

美祿市 安平次弘道

九条があつて戦後を生きのびる
向かい風男の肩がはね上がり
口論は止そうシナリオ書きかえる
無農薬虫との死闘繰り返し
幸せになろうよ切符二枚買う

唐津市 久保正剣

東洋の美女がアテネへ行くバレ
倅せな朝だ雀の声がする
通院を終わりにしない開業医
長雨のニュースに続く土砂崩れ
携帯のエリア外して逢っている

唐津市 市丸晴翠

老い仕度シンプルライフから始め
悲しみを余所に相続揉めて来る
海の気を深呼吸して立ち直る
現役の漬物石に割烹着
さしのべた手にからみつく生きる欲

唐津市 山口高明

疑えば無間地獄の闇に落ち
被写体のドラマ求めて飢餓の国
宣伝のように貰えぬ保険金
誰の子か知っているのはおんなだけ
今もなお婦女子泣かせる基地の鳥

唐津市 樋口輝夫

日の丸に因果含めて派兵する
イラク病み微熱が続く永田町
サミットはお揃いの服着せる会
招待券ちゃんとソロバン弾いてる
叙位叙勲仏になつてエラくなり

唐津市 宗水笑

与太郎もケイタイデジカメ持っている
船中泊 庶民の汗の二等部屋
恋人を待つよう年金奇数月
大将と呼んで下さる縄のれん
スランプを抜けた投手の玉の汗

唐津市 井上勝視

報復に報復を言う恨み節
蓋あけて予算が狂う遺産分け
盲愛に子供とづくに親離れ
えくぼ見て勘違いする片想い
予定通りならばドラマは生れない

熊本市 永田俊子

美容案内電話でよかつた孕寿
きれいな花と監視カメラがある銀行
同情の線から誰も踏みこまぬ
相槌が上手で秘密ころげ出す
二兎を追う力不足のよろけ独楽

熊本県 岩切康子

千米の地下水とやらをギユギユギユと
十キ口を重いと思ふ歳となり
山椒摘み棘に抵抗されながら
アルコール入れば小言発す癖
時々はブレイキかけて振り返る

東かがわ市 池内かおり

一計を案じた嘘にさいなまれ
リハビリを励ますジョーク声高に
ねぎらいの言葉に疲れ吹っ飛んだ
ここだけよ言い出しつべの軽い口
長老にまず打ち明けるはかりごと

東かがわ市 川崎ひかり

大の字で寝れる我家のありがたさ
のみこんだ言葉小骨のある痛み
藤村もひばりもリンゴの花が好き
構いすぎ叱られながら孫を抱く
もたれ合う人が隣にいる安堵

東かがわ市 神保坊太郎

薬石の効ありまして今を生き
人も花も咲かせて大地無言なり
風蘭のあるやなしやの風に酔う
婦省子の両手にデパートぶら提げて
妻が美人に見える眼科にいこうかな

東かがわ市 清川玲子

ふるさとの水に心の垢おとす
甘い水飲ませたつけに泣かされる
望郷の涙しきりに夕茜
ひと踊りするとストレス消えている
友からの誘いに頭痛なおつてる

東かがわ市 原賢

母が逝き故郷の敷居が高くなる
核家族童話忘れた老夫婦
口と腹ときどき変わる影法師
忍の字をいつも背負つて生きた父
袱紗たたんで借りた一つの義理終える

東かがわ市 伊勢八重子

ほんのりと母の移り香衣更え
目に見えぬゴール目ざして流される
計画に無かつた素敵なめぐり逢い
口ばかり達者で病院梯子する
盗まれる物は無いけど鍵かける

松山市 丹下 美津子

愛媛県 中居 善信

ばたばたと来てばたばたとサヨウナラ
合併へ不協和音の消えぬ村
ふる里は自給自足の鶏を飼う
遺児二人室に寡婦として生きる
釣鐘のロマン哀しい道成寺

松山市 高橋 宏臣

もの言わぬ鬼が一番手強いぞ
闇に手を入れる度胸を持ってない
居眠りをじっと待つてる亀が居る
踏ん切りのつかぬ背中をボンと押す
役者ではないが鬼にも仏にも

松山市 古手川 光

ロポットよお前もお産しておくれ
水張った棚田へ丸いお月さん
預金利子はねて銀行さん黒字
今スグと急かす保険のコマーシャル
問い合せ てんやわんやの保険庁

松山市 宮尾 みのり

もしもしというスタンスで嫁姑
極楽鳥のような男で花を活け
物でない心が欲しい下り坂
点検の耳は確かで音拾う
戦場の記事と命を引き換えに

冗談じゃない俺は外野が似合ってる
薄笑い激しい気性持ちおとこ
二の腕のあたり眩しいのも二十歳
火の粉降るそこらに男もういない
ずけずけと野心を持たぬ男だよ

高知市 北川 竹萌

にこにここと心で笑うことに決め
朝顔の一つお庭に咲きはじめ
座りよく九十路詰める四畳半
紫の花が好きですじつと立つ
生きるまま感じるままにある命

高知市 小川 てるみ

ストレスを癒やす我が家の菖蒲風呂
無造作に見せてセンスの良さを知る
損得は言わぬ味方の手弁当
あじさいウオーク花を愛で友を愛で
真っ白いシートが燥く梅雨晴れ間

高知県 赤川 菊野

ハチキンに延命なんて似合わない
尊厳死そんな言葉が身をよぎる
生き甲斐がほしくて夢を追いつづけ
喪の窓をつめたくのぞく昼の月
モナリザの笑顔を真似てみたけれど

高知県 小澤 幸泉

結局は家族いつたい何だろう
夢でよい今も昔もこれからも
強引なあなたに私ほれました
つの笛を吹く老人のすずしい瞳
オカリナに聴く創造の神の声

青森県 小寺 花峯

老後にも隠されたシャッターチャンス
孫が泣き私は本を読んでもます
独り居の部屋にはケンカなどはない
戸籍簿を見たら一人の僕がいる
また今日も袖がほつれる孫が来る

黒石市 相馬 一花

セールの必殺技にしてやられ
指輪見て動悸の止まぬ薬指
老いらくの恋を支える若作り
日めくりにぎっしりと書く物忘れ
フェロモンの出ない女房に操られ

十和田市 阿部 進

大の字にのんびりと寝る里帰り
子宝湯ばあさん達で混んでいる
欲望を小さめにして生きる日々
どなたかと母に言われて驚く娘
ネクタイをはずせば肩のこりがとれ

弘前市 須郷 井蛙

パントマイム パパを充電してあげる
呑み助もジュースも同じ会費制
脳休日家族旅行の日もつくる
道の駅ひと味違う旬を売る
献立に不満ブツブツよく食べる

弘前市 高橋 岳水

お荷物にならぬ気概の万歩計
稜線で四季告げに来る岩木山
指先に祈りを込めて摘花する
追憶を美化してしまふ走馬灯
首のない木偶で混み合うパチンコ屋

弘前市 宮崎 ヒサ子

植物園緑の風と手を繋ぐ
指切りをした感触のいま昔
深呼吸して身の内の鬼払う
楽しい人と隣り合わせた日の和み
一抜けた後の大きな揺り戻し

弘前市 今 愁女

待つ人もなき たそがれの月見草
夜明けまで開きつづけて月見草
白花の妖しくもつれ烏瓜
眠る葉にはほのほの紅の合飲の花
ミスターと同じ病気と誇らしげ

弘前市 福士慕情

梅雨冷えの朝は布団を掛け直し

葱坊主雨に早に耐えている

風鈴も汗を掻いてる熱帯夜

炎天下北のまつりに灯が点る

生花を切らしたことの無い仏間

弘前市 岡本花匠

梅雨の慈悲草木いきいき人めげぬ

今日生きた証で参る宵祭

穂ばらみを急かす亡母だろ青田風

五線譜の中で躓き炎の汗に

津軽三味哭かぬ日はない嗚呼有情

弘前市 相馬銀波

風土記の中でいびつな休耕地

大豆屋の請負頼る休耕地

淋しくて雲呼ぶ僕へ雨になる

人の意を汲んで小さなボランテニア

壁のある対話煙草が離せない

弘前市 櫻庭順風

引き継ぎに頭抱えている生徒

長欠の訳要領を得ぬばかり

訳を知り頭髮よだつ思いする

おぞましい行為生徒にさせるとは

世間体悪くて帰宅せぬ親父

弘前市 高瀬霜石

会釈するハローワークで吉野屋で

楽しそう水族館のさかなたち

死んだふり上手い金魚が生きのびる

葬式でついつい欠伸してしまう

ふたりきり一番風呂と仕舞い風呂

砂川市 大橋政良

お喋りなインコの舌の空回り

水匂う風の匂いと夏が来る

転んだり起きたり一生くり返す

頑固さが少しゆるんだ紙おむつ

脳味噌に刺激をもらう唐がらし

さいたま市 八田敏

台風が梅雨追い越してやって来た

不況など見せずスーパーふえ続け

腰伸ばせ麻痺の妻から注意され

ウォーキング幼き日呼ぶ青田道

開店の安売り溜めて狭い家

東京都 岸野あやめ

一年の巡る早さよお盆月

バック旅熟女老女の親子です

母さんがあのねあのねと口ごもる

ドクターを査定している老患者

国保料少うし払いよく使い

東京都 後藤早智

あじさいを撫でほつとする梅雨の入り
菖蒲田が 一気に染まる天の水
添えられた花の名前を辿る庭
桜とは一味違う花比べ
おろおろと抱く初孫の人見知り

東京都 清原悦子

灯が点り意外と広い町と知り
人間に個性あるから絡み合う
涼み台猫に先取りされている
夢を追う終点のない切符買う
雨音がゆつくり耳に入り込む

佐倉市 岡井やすお

北風の寓話ブッシュに送りたい
目くそ鼻くそに逆襲未納劇
大相撲モンゴル合宿なんてどう
五輪年統々日本新記録
大病をして段々と毒気抜け

八王子市 播本充子

吹っきたリズムで米をといでいる
策を練るフライドポテト食べながら
ほんまほんまと先輩の無責任
アジサイについて長くなる立ち話
オバサンが寄ると身勝手倍加する

横浜市 菊地政勝

他人ごとでいられなくなる妻の風邪
測り合う血圧妻と医者談義
あじさいへいざ鎌倉と妻を連れ
悪者にされて回転ドア黙る
君のためだと去ってゆくずるい人

横浜市 小野句多留

近代化過疎の役場が見せる意地
ふく面を取れば市井の顔だった
ヨン様に大和女の上調子
ごきぶりの夜な夜ななにを語ろうぞ
団塊の世代を嘆く身だしなみ

滋賀県 中宗明

家中にリースばかりの機器を置き
悪ふざけ過ぎて自ら墓穴掘る
おだてられノーが言えないお人好し
老いてなお自分の知識磨く日々
蝉しぐれクーラーの音消す暑さ

京都市 都倉求芽

チヨコレートいまだに進駐軍の味がする(終戦記念)
駆りたてるものありギラギラ雲の峰
バカの壁崩す温泉探して
臍出す娘溢れて雷あかずさり
オレオレが来ればと暇が待ち構え

京都市 高島啓子

洗濯日和となりの寺はゴミを焼く
雨の日は街へ 晴れたら本を読む
お茶漬けがうまくて箸の良いリズム
まっ青な空遭難の忌が巡る
受けて立つ俎板にある傷の跡

亀岡市 井上森生

痛み合うページがネットにもあれば
徳を積むいくら積んでも積み過ぎぬ
我がままかどうか小声で言ってみる
争いの遺伝子は慈愛が眠らせる
戦争の論理は人を否定する

京都市 稲葉冬葉

待ち合わせ呼ぶより謗れ現れる
しゃあないね音痴と遊ぶ借りが出来
先頭が孫で座って居られない
五臓六腑そろそろ狂う歳になり
見かけではないあれでなかなか繊細や

京都市 丹後屋 肇

もやもやの晴れないままに梅雨の入り
落椿含んでは吐く鯉の口
握手ではもの足りなくて電車追う
鼻の下伸びる男の因果律
借景がかすむ枯山水驟雨

可児市 板山 まみ子

だらだらと暮らし今年も梅雨の頃
梅雨空に気合を入れる中華鍋
植える土地無くても欲しい花の苗
日曜も月曜もない御飯炊き
ゴーヤーの旨さわかつて夏が好き

静岡市 安本 晃 授

八十路越えまだまだ座る席がない
告白を聞いて茶柱浮き沈み
妥協する両手が愛を語りあう
貧乏神と打ち上げ花火見て暮らす
雑巾が乾き井戸端茶菓の会

富山市 島 ひかる

電文の一句にうかぶお人柄
満天の星に心を遊ばせる
振り向けば冬のソナタの愛がある
たつたふたりパントマイムでなど居れば
黒ユリが咲いて今年も逢いにゆく

富山市 舟渡 杏花

時おりは夫唱婦随をくつがえす
真心をおなじ温度で返さねば
半眼の仏に願うお目こぼし
不意に来た便りの中の雨あらし
自由とや背中合わせの狐をかこつ

愛知県 早川盛夫

怖いから株と女に手は出さぬ
人間に生まれしまったなと思う
遁げ足の速い万札ばかりなり
囲碁を打ち将棋を詰めてよき余生
昨日まで幸せだった事故車輛

大阪市 西出楓楽

疲れたら魁夷の森をウォーキング
神経の太さも芸のうちだろう
嫌な納豆毎日食べている自愛
イエスよりノー言う方が難しい
脳の血管どこか詰まった物忘れ

大阪市 前 ともつ

初めてのバージンロードやはり照れ
娘の式へ今宵一時禁酒解く
牧師さんサンキューアロハありがとう
椰子に寝てワイキキビーチ一人じめ
ワイキキへ水着持たずに慌て者

大阪市 鶴田遠野

募金して今日一日を自惚れる
したたかさ酌み交わしてる接待酒
言い訳は止め黙秘する二日酔い
年金が老後の時計狂わせる
逆境に強い女で火も掴み

大阪市 川端一步

帰って来い田草呼んでる自衛隊
つつましい年金暮らしが振るこぶし
ひまわりは時計のように陽を拝み
鉛筆を削り童女の顔になる
合掌を孫に教えて地蔵尊

大阪市 川原章久

想い出も入替ええます更衣
花いちもんめ月の世界へEメール
パンパースでおむつ洗わぬママばかり
縁切り坂厭な女を連れて降り
善意の傘皆出払って雨宿り

大阪市 神夏磯典子

美しい笑顔ビタミン足りてます
副作用小さな文字で書いてある
採算を考えぬから従ってくる
余生とはこんなに忙しいものなのか
土曜日のチラシに主婦がやめられぬ

大阪市 板東倫子

蛸壺に花活けてある釣の宿
さくらんぼ味と心の贈りもの
チンチン電車で行こう住吉太鼓橋
母と娘で貸し借りをするイヤリング
骨の無いさんまバクバク齧りつき

大阪市 町田 達子

菖蒲園ことしの花に逢いに行く
肥後系江戸系みんな競って咲いている
すいすいと燕返し鮮やかに
番蝶ふわふわ人に似ておかし
売店のアイスクリームがよく売れる

大阪市 本間 満津子

暑いなど言うまいこの日原爆忌
うたた寝の見るのは怖い夢ばかり
御馳走さま食事は三度食べてます
ぐずじゃないポチポチちゃんとやる仕事
小さな花にしたい朝顔ダイエツト

大阪市 川久保 睦子

イベントの後には軽い飢えがある
淋しくてうどんの旨い店に寄る
ピリやけど拍手一番多かった
結晶になるまで女咲かせます
逢いたくて逢いたくてまた下手な嘘

大阪市 小糸 昭子

絵葉書一枚で良しい別れ
母の声届けと唄う涙そうそう
半島へたった二時間何故遠い
ぎりぎりの命けずって待つ絆
政争で汚れ役等知りました

大阪市 津守 柳伸

初ガツオお造りタタキ大根炊き
餅米とニガリ少々豆ごはん
ウエハースとビスコで癒やす抜歯あと
見舞われるよりも見舞いに行ける幸
湯めぐりも海鮮丼の締めくくり

大阪市 松尾 柳右子

掃除あと夜中に歩くゴキブリよ
あだ花は無いが虫つくナスキュウリ
ナメクジも一緒に買ったキャベツなり
音しない隣の婆ちゃん気にかかる
カラオケの大声少し品が落ち

大阪市 津守 なぎさ

受話器からはれやかな声病明け
旅帰り母のうどんがまっている
金メダルねらう闘志の深呼吸
前に出たトップにかかるプレッシャー
ひと声で集う停退後仲間

大阪市 岩崎 公誠

博学のおんな仮面を外さない
悪趣味のネクタイだけが似合う顔
非常食水の差しかえよく忘れ
淋しさに高い買物ばかりする
日本人どこに行っても先ず土産

大阪市 渡部 さと美

さすが金星しずしず太陽通り抜け
公園を出るといきなり俗の世へ
ごきぶりに舐められ猫に無視をされ
こだわりはあなたにもあるくじ売場
歳とつて夜中に進まない時計

大阪市 清水 絹子

希う母の素足の百度石
無料パス薄いカードにある重み
天守閣さすが繁盛たこ焼き屋
人込みに埋もれバンクの行き帰り
このような色はロスです料理本

大阪市 中田 あい子

核家族ふえて御近所遠くなり
相談にとび込む御近所へるばかり
嫁さんの握る家計の堅いこと
名コンビ舞台おりと右左
名コンビ仕上げた陰の立役者

大阪市 津村 志華子

靖国の杜が奏でる鎮魂歌(関東紀行)
議事堂は天下を支配する重み
見上ぐれば都庁の高き昼の月
狸塚夢を拾いに証誠寺まで
SLの遠きを偲ぶ老いの旅

大阪市 安達 はじめ

亡き戦友とアルバムで会う終戦日
貧乏の中でいきいき妻の趣味
耳よりな話に欲がのせられる
亀となりゆつくり余生妻と行く
正論があやふやになる多数決

大阪市 榎本 日の出

好物の賞味期限は気にしない
お芝居が下手で許して上げた嘘
あの宿の思い出恋しイカづくし
もめ事の訳を他人は知りたがり
登り坂苦しい後の爽やかさ

大阪市 榎本 舞夢

朝食はパンと御飯の差向い
母さんに金借りてから弱い父
敵ながらあつぱれ女社長いる
ねじ一つ失くしただけで大惨事
恋しても夫婦になれるものでなし

大阪市 伊藤 博仁

気が重く夏着に替える旅支度
傷口に塩擦り込んで返り討ち
ブーメラン教えてくれた処世術
しゃくなげの花と映した水鏡
あじさいの引き立て役にはいチーズ

大阪市 熊代菜月

ひと粒の種でも夢を持って
思い出にみんなで踊る佐渡の夜
口だけはいつも元気なおばあちゃん
好きなこととしている時も春眠し
絵手紙で旬の野菜が届きます

大阪市 星野きらり

ローカル線若葉が匂う父母の里
草餅の色ふと亡母の懐かしく
音たてて湖を恋うてる蜆貝
へそ曲がり胡瓜買うてるへそ曲がり
三面鏡と会話ひと日のプロローグ

大阪市 西川更紗

一人旅もしもの時の保険証
わだかまり解けないままに友が逝き
肩書を信じて医者を選んでる
カレー炊き二日の旅に備えてる
朝の陽を部屋いっぱい漲らせ

大阪市 大川桃花

百円の傘を選ってるダイヤの手
解体の仏師に運慶のり移り
月末になると始まる胃けいれん
賽銭箱見える所にある社務所
青い目に大阪弁で道訊かれ

大阪市 中村叡子

幸せな今年の新茶老いふたり
年金をこつこつ掛けたは庶民だけ
あちこちが痛い一人で愚痴を言う
思い切り跳んだ昔もあつたのに
旅行社が大安売りのツアー揃え

大阪市 玉置英子

私より若く見えてる五歳上
梅雨のような五月が終り梅雨に入る
ポットの湯沸く音鉄瓶棚の奥
再放送はぐれ刑事の若いこと
オハヨウと雀が最初そして鳩

大阪市 小泉ひさ乃

セールの煽てに乗ったネックレス
咲き遅れの花に迷っている鏡
風向きを読めずに放つブーメラン
亡母蒔いた種が今年も咲いている
生真面目がマイナス思考抱く夜更け

大阪市 杉澤汀

十時間飛んで地球の裏の貌
地球の裏も日が沈むのは西だ
もう一杯で龍宮城へ行けるかも
追越したはずみに帽子風に舞う
父さんすまん母の日よりもやや軽い

大阪市 古今堂 蕉子

妻という砦の中で泣いた日よ

すきま風ガムテープで貼り夫婦

阪神チャチャ今年は終り

出してはる止められてはるパトカーに

赤いダイヤさくらんぼに寝ずの番

大阪市 清水利武

自信ある歩き方ですお医者さん

ミコシギヤル若さで担ぐ威勢よさ

日本の祭りは夏が占めている

宿題もほったらかして夏休み

台風が狙っています島の国

大阪市 奥村五月

遺産わけ妻の意気込み恐ろしい

ゆとりある顔で寄付ならお断り

三猿になってしまった倦怠期

車からタイヤの凶器飛んで来る

母でさえどうにもできぬ反抗期

大阪市 近藤正

やみくもに総理は兵を出したが

虐待が徐々にブッシュの首を絞め

BSEチャンス到来荒稼ぎ

初メール着いてますかと長電話

おしどりもほど良い間合いとっている

池田市 栗田久子

かくれんぼ見つけられたいのよわたし

カルテには老人性の文字がある

無駄づかいしそうヨドバシには寄らぬ

八月の仏にざんげ許し乞う

敗戦の記憶は消さぬ蟬時雨

池田市 岡本吉太郎

青葉若葉がさらさらとなり栗林

お見通し母は知ってる笑いの中

卒業で荒れ成人式でまた荒れて

ぬぎすてた上着をハンガーに吊るした

電車にてうつらうつらと時過ごす

和泉市 西岡洛醉

煩惱を捨て切れなくて二十四時

昼の月地球見下ろす冷たい目

疑いのまなこの奥に光るもの

履歴から男の過去が滲み出す

嘘ひとつたたら踏ませて駅を降り

和泉市 中川楓

紫陽花は命の限り明日に向き

食べ終えて皿は真白にさくらんぼ

恐山 賽の河原の風車

恐山 電に怯えて堂籠り

津軽線近くに泊り太宰の忌

泉佐野市 山本蛙城

武より仁モハマド君がVサイン
肘枕して夢見てる膝枕

暇ですね牛歩もみ合いつかみ合い

その気まだあるわい赤を着て歩く

中国特需風と桶屋と故紙高値

茨木市 藤井正雄

寝たきりの目がありがとう繰り返す

不景気で大樹の蔭も不況風

黙祷へ故人の笑顔出て困る

共感で念入りに見る投書欄

賑やかに親子で作る犬の小屋

大阪狭山市 矢野梓

思い出しゆっくり腹が立つてくる

心身が丈夫な内のクラス会

保険証入れて整う旅カバン

半額の魅力に負けた赤い服

最悪のケースも話し合う二人

柏原市 永浜加津子

梅雨の入り熱いお蕎麦を啜ってる

老境へまさかの坂をやつとこさ

せめぎ合い病と薬果てし無い

どん底を見て来た者の強さあり

年重ね七癖とみに強くなる

交野市 森本弘風

チャットでは心の隙間埋まらない

雁首を並べリコール言えなんだ

吊り橋が呼ぶから朝の山歩き

妻の愚痴苦くゆっくり効いてくる

母の日も父の日も来た宅急便

交野市 山川日出子

愛子さま御所のお庭の蝶が友

風の中自由楽しむおにやんま

青い目が姑に巻寿司習ってる

鶯に口笛合わす七十歳

モナリザになったつもりでポーズ真似

交野市 田岡九好

空に雲男はいつも夢の中

復唱をしながら物を取りに行く

人つなく絆が細くなっている

職業はなしと書くのに慣れてくる

節約も飽きたあきたと物を買う

河内長野市 加島由一

一発のパンチに沈む一目惚れ

日曜日妻の手にある花名刺

背景も敬具もいらぬラブレター

骨抜きにされたと母は泣いている

声に出して読む日本語の美しさ

河内長野市 植村喜代

ふと思ふ戦火に消えた刺しゅう台
何もかも足りて足らなくなつた心
父の手が大きく見えたおでこの熱(小四の頃)
細かいことより地球どうなること
この世には鬼もいますし神もいる

河内長野市 井上喜醉

妻はしゃぎ夫むつつり旅の宿
嘘ついて気晴らしをする悪い癖
笑われて育つ大ボラ縄のれん
重い尻ばかりに足を引っぱられ
根気抜け脳の回転がぶくなる

河内長野市 水谷正子

サングラス外せば唯のお兄さん
なぜあんな美人がと思うお連れ合い
私かて蹴りたい背中ふたつみつ
リアクションにぶくてレジに睨まれる
惜別の人皆帰る盆がくる

河内長野市 村上直樹

冷や汗も寝汗もかかず肥り気味
うっかりも中ぐらいならご愛敬
なぜ人を撃つのか神は許すのか
反骨がまだまだもかく六十路坂
うっとり冬ソナタで若返る

岸和田市 長谷川 呂 万

一度だけ孫に勝ちたいオセロ盤
端午の日 日本男子取り戻す
コンサート無理した切符持て余す
願わくば座席指定で極楽へ
宿題にお膳出してた日は遠く

岸和田市 岩佐 ダン吉

笑つたり泣いたり母さんの顔だ
ケータイも食卓囲む中にいる
万歳につられて軽い僕になる
出しつくした汗です天にまかせよう
八卦見に身の上話聞かされる

岸和田市 井伊 東 吉

剪定のミスかあじさい花芽無し
プランターいちごゆつくり賞味する
疲労かな緊張欠けるタイガース
ゴルフにも冷茶持参の時季となる
女子チーム男子尻目にアテネ行く

岸和田市 原 さよ子

子育ても膝にまつわる頃がよい
目的へ汗が流れる共稼ぎ
いると邪魔いないと淋し夫婦仲
茄子胡瓜漬けてばあちゃん満ち足りる
あいそない機械の音で田植えすみ

岸和田市 雪本 珠子

岸和田市 中島 寿海

なんとなく人恋しくて街に出る
物忘れ歳の所為にはしたくない

日課です花の命の水をやる

背伸びせず自分らしさを大切に

絵手紙のひまわり菊の花に見え

岸和田市 木村 正剛

はくの趣味なんで通販知ってんの

弱点を晒してこわいものがない

酒の味焼酎以外みな同じ

ポックリ寺はくより賽銭はずむ子等

わたしから頑固削ると無味無臭

岸和田市 亀井 皎月

二度の職畑作りには誠はない

スーパ一の社長女房に頭下げ

湯に入るアルキメデスが浮いている

不具合が出来レントゲン見る恐さ

素裸群水浴び少女小川の涼

岸和田市 土橋 房枝

燕の巢のぞいて見れば大家族

ハンディを負う子に母は強くなり

許されて許して生きる夫婦愛

倦怠期互いの欠点棚に上げ

思ったより気むずかしいなマウス君

隠しごとばれたら滅法高くつく

肉集め焼いて儲けた五十億

買ひ物の何パーセントがごみかしら

バスツアー殆んど昔のお嬢さん

新人と紹介される老人会

堺市 山本 半銭

けやきの芽夏に向かつて伸びに伸び

見るだけのカタログ涼し夏模様

目刺し食うプラス思考をモットーに

こっそりとハートをたたくメールです

胃弱とは聞いていたのにあの酒量

堺市 村上 玄也

官僚にはくの年金かじられる

孫ほどの医者にべこべこしてる母

屁理屈を言うて医者には行かぬ父

キヨとペタ高給取りのワークシエア

呆けが出てきたが勘定間違えず

堺市 和田 つづや

夫婦なら解ける方程式がある

夏冬を問わずほこほこして居たし

世の中も綺麗すぎては無味になる

無意識の保身の陰に妻子あり

六十五歳の自覚はしたくない

堺市宮本かりん

幼な子を見つめて心純になり

マイペース先の見えない曲がり角

飯の世で七十年がわつと過ぎ

久々に父母の夢みて朝寝坊

丁寧な言葉で妻は荒れ模様

堺市矢倉五月

ゴクゴクと水を飲み干す若い音

故里が水の名前で売れている

友達はみんな味方と想うてた

立ち飲みもおしゃれになつたガード下

お人好し絞り切れない守備範囲

堺市齋藤さくら

さくらいろから藤いろへ季は移り

嫁ぐまで優しい母で居るつもり

まだ青いトマトに話しかけている

子育ての卒業証書欲しくなり

ダイエットする気ないのに二キロ痩せ

堺市源田八千代

検査づけ結果を聞いて拍子抜け(検査入院体験 5句)

繰り返す辛い検査は何だった

廊下風呂 馴染みが増える病仲間

禁煙に聞き耳持たず咳しきり

つくづくと贅沢病と見える群れ

堺市柿花和夫

月下美人無言で集合令を掛け

花筏別れの笑顔振り撒いて

おつかれさん今年は妻にお中元

入浴剤で温泉巡り乙なもの

自爆テロあちら側では人柱

堺市石堂潤子

立つ鳥の美学スパッと髪を切る

丹精の花もいっしょにお引越し

十一階 空と握手が出来そうだ

梅雨しとど遺句集最後から開く

ボチボチですねん私の物忘れ

堺市國見蘭香

滑りゆく風に押されてペダル踏む

のどけさや神さまの道杖の音

心の音皆聞き惚れる名吟調

見ない振りして擦れ違う急いた朝

柔らかいふとんイラクの夜を思う

四條畷市 吉岡 修

ほのほのとした文だった虹を見た

縦軸へのびず横這い続く運

ひと押ししのチャンスにいつも金がない

踏み外す一步手前に妻の声

左遷地で充分甲羅干している

吹田市 山本 希久子

病院の匂い染みつく母の髪
新聞たたむ許されぬことばかり
こんなはずでなかった夫婦旅つづく
階段をいつきに上りふっ切れる
適温に個人差があり冷房車

吹田市 早川 棲世

夜の闇へ釣師と遍路たち下船(遍路道追補)
なぜ遍路なのか美貌が笠の下
善根宿子のない幸を論される
遍路ツアー先達笑わせ上手なり
結願へ妻と土産で折り合わず

吹田市 太田 昭

毒舌も今は恋しき通夜の席
見せかけの善意が大手振ってゆく
背く子に心の隙間空けておく
白黒をつけに一升下げて行く
一円の転がる音に振り向かず

吹田市 穴吹 尚士

鮎パンを半分こして仲直り
大望が叶うと刷ってある御籤
カルチャーのヌードを描く手がお留守
憂国の志士が息巻く縄のれん
晩酌の終りを告げに来た茶碗

吹田市 瀬戸 まさよ

霊園の墓にも値踏みする世間
よたよたと声だけ元気同窓会
患者から指示する医師の処方箋
年重ね歌舞伎文楽愛おしい
純愛に女性は弱し冬ソナタ

吹田市 野下 之男

嵐山何はともあれ深緑
新婚の記念植樹に見下ろされ
サングラス取れば俄に優男
水掛けに諦めている不動さん
運命に飽きもしないで水車

吹田市 須磨 活恵

本心が分らぬままに雨期に入る
小糠雨ぬれて紫陽花透き通る
後悔と未練絡めて陽が沈む
裁ち切れど切れぬ深さの業と欲
道草をたつぷり楽しむ日々々生

吹田市 岩屋 美明

網棚の帽子気楽なひとり旅
朝顔も早起きしてる花の数
子供より大人の目立つ地藏盆
ゆつくりと自分の部屋で読む手紙
S席の切符で心視かれる

吹田市 大谷 篤子

気がつけば気弱のままで生きている
よもやまに弱い女のひとりごと
言いわけを重ねて小さな嘘ひとつ
両の手で掴みたいもの残ってる
自分史の余白に疼く秘密書く

大東市 児玉 蛙

いい事がありそう今朝の茶が美味い
子離れが済んで足腰軽くなる
一病を抱いて上手に暮らし居り
いい目覚めふる里の母たずねよう
支え合う夫婦ほほ笑み合って生き

大東市 南原 正和

おれおれの電話撃退姉自慢
身ぐるみを脱げと洗濯好きな妻
誘いつつ棘刺す君はバラの花
沢庵をさわやかに噛む茶漬け膳
スパーでメモ持つ亭主うろうろし

高石市 浅野 房子

緊張がゆるむと歳が顔に出る
殻に閉じこもりたい時本を読む
気の弱い鬼がジョークで息をつく
もうちよっと心残りを生きている
適当にとぼける術も知っている

高槻市 生田 義一

孫ゼロ歳じいちゃんお守りでくったくた
喜寿なんてまだまだ若い頑張らにゃ
お迎えは未だ早いぞえ閻魔さん
リストラカ机が一人主待つ
赤いバラ二輪で部屋はパッと映え

高槻市 江原 秀夫

平和の声じわじわ地から湧いてくる
平成にまださむらいがいる会社
心根のやさしさへ夢汲んでやる
友の死の思い出さつきの乱れ咲き
四十年の手塩愛おし花の芸

高槻市 井上 照子

ほほ笑んだ時は誤解もとけていた
梅雨晴れ間心の中も干している
シャボン玉こわれて消えるそれでいい
窮すれば姑の膝借る非常口
知恵袋底が破れている誤算

高槻市 乙倉 武史

年金で揺らぐ少子化長寿国
逆境で人の値打ちは試される
曖昧に濁す返事にある打算
同期会冥土の方が多くなる
老人が急ぐと碌な事がない

高槻市 左右田 泰雄

高槻市 田中 千莞子

小説を地でゆくような半世紀
無雑作に本物包む古新聞

ハードよりソフトで稼ぐ情報化

土の香を嗅ぐこともない団地の子

雰囲気が悪いと客は逃げてゆく

高槻市 瀧本 きよし

豊中市 安藤 寿美子

年賀状暑中見舞のお付き合ひ

雰囲気をいつもあいつがぶち毀す

青空の下に訴訟のある暮らし

肩書きを自慢安売りする名刺

なじみ店灯りがまたも消えました

高槻市 西谷 治三郎

豊中市 吉田 あずき

煙草やめ酒やめ余生葉飲む

見直して狂う老後の設計図

いつの間にかこんな歳にと貼り薬

日本語が乱れていますアナウンサー

不器用と器用が暮らし五十年

高槻市 傍島 克治

豊中市 樫谷 郁子

労りのはずが説教じみてくる

玉音放送聞きし校庭芋畑

試行錯誤だけで一生終りそう

高齢化喜寿まで祝いせぬと言う

親馬鹿を息子にうまく利用され

不機嫌になつてもしゃあない独り者

つまずいた石は路傍へ除けておこ

二次会を控えすらすら済む会議

出雲でもコンピュターが縁結び

回診のプロフェッサーは王様だ

豊中市 安藤 寿美子

人をゆるし心機一転月仰ぐ

賞はゼロ罰なら少しある人生

もの忘れ謝る事も忘れてる

何かまだ忘れてそうなの晩ごはん

もう無理はしたらあかんよ八十歳

豊中市 吉田 あずき

一見に如かずの譬えチャット友

自問自答私を裁く甘いムチ

言い訳も時間が経てば笑い草

いやな事あと回しする弱い意志

コードレス何の根拠もない噂

豊中市 樫谷 郁子

中東の地図は火薬の臭いする

図太さも時にはほしい国のため

晩学は真面目の文字を糧とする

囲炉裏端 真面目に聞いて夜が更ける

居候伸びきっている皆留守

豊中市 江見見清

植木市孫に記念の樹をさがす
序の口も幕内もいて大相撲
清らかな水流れても過疎の村
下見らないうけど見えるか
水くさく妻は土産にありがとう

豊中市 岸田知香子

いつの間に疎遠になった深い溝
兄弟会互いに元氣たしかめる
リストラにせめて故郷にUターン
親切がすぎて世話焼きお節介
欲得を捨てて流れに沿う傘寿

豊中市 山門タミ

引き潮の浜に貝掘る親子連れ
日の出待つアツという間の芸術よ
再会に今日限りかも手を握り
わがままが出来る実力あつた父
山川海すべてパノラマよか唐津

豊中市 水野黒兎

しんがりを遅れず歩く役もある
大空にケチな噂は吸い取らす
重力を忘れくらげと泳ぐ海
レントゲン心の影は写さない
鉛筆を尖らせて書く鬱の文字

富田林市 藤田泰子

顔の無いメールが届く午後三時
視野みどりくよくよするのう止めた
雨だけど行かねばならぬ所がある
夢十彩 雨を待つてる花もある
きのうから誰とも話していない

富田林市 大橋鐘造

鮮やかにピンチを抜ける二枚舌
二枚目と金が邪魔してまだ独り
リストラへ妻にエプロン渡される
好き嫌いなくて淋しい舌音痴
人情の欠片を探す都市砂漠

富田林市 片岡智恵子

七癖と八癖溶けあう老いふたり
率直な意見にも矢が飛んでくる
胸のすく話題へ急に減るお腹
試着室あきらめましたニューモード
五年後は未知の領域ジャムを煮る

富田林市 中井アキ

筋通す私が負ける涙雨
ひらがなのメールが届く里便り
スランプに挑む真赤なジャンプ傘
またあした逢う約束をしたまんま
あじさいが重なり合った深い闇

寝屋川市 江口 度

円周の無限に木馬あざむかれ
ダンブカー降りるとまさに女なり
糸ノコを見事あやつる太い指
クレーン車 都会は変貌くり返す
もし煙草止めたらきつと死ぬだろう

寝屋川市 平松 かすみ

ルーベにてあなたの顔をみています
描きたいが小さい花の自己主張
自転車は無事で痛んだ下半身
救急車おことわりして歩けます
棚田から聞こえて来そう田植唄

寝屋川市 森 茜

ハミンクのあちらも朝のウォーキング
背を越した孫につき添いして貰う
待つ人は来ず紫外線攻めてくる
爆音のへりにひっこむ昼の月
盗まれた傘が階段降りてくる

寝屋川市 籠 島 恵 子

菖蒲園カメラに道をふさがれる
菖蒲園人に名前があるように
花菖蒲 業平とあり美しい
車椅子拒む小径の菖蒲園
菖蒲園おたまじゃくしに上がる声

寝屋川市 太田 とし子

腰を病む三途の川が渡れない
右脳も左の脳も梅雨模様
耳鳴りが踊り狂って夜が更ける
拉致してと頼み込みたい仏様
ひばりの唄元氣と涙出して寝る

寝屋川市 坂上 高栄

鯉幟五月の空が淋しがり
声のない蛍お尻で身を焦がす
新緑のドライブ植田水澄めり
五月晴満艦飾の物干し場
私にもコンビが欲しい地藏様

寝屋川市 富山 ルイ子

独り暮らし性に合ってるかもしれぬ
今朝もまたとれとれ胡瓜皆にあげ
夢の中すべて望みが叶えられ
母の死の涙乾かぬ間に叔母も
価値観が違う娘でとぶ磔

羽曳野市 吉川 寿美

再生紙過去はすっぱり捨てました
世渡りへ人を逸らさぬ笑顔もつ
新聞紙にくるんで真心を戴く
明け渡す城の見ごとな花菖蒲
逆転はあると信じる亀の足

羽曳野市 酒井一壺

東大阪市 谷口義

新しい風を求めてひとり旅
ためらわず行けと背を押す妻がいる
虫の世もつまりは雌が支配する
キリギリス餌を残して死んでいる
神かけた契りをホゴに浮気する

羽曳野市 徳山みつこ

カッターナイフ私の胸も切り刻む
肉声がいいねおはようさようなら
パソコンの得意な孫をまた案じ
校正ミス眼スルリと通り抜け
八月の空に消えない黒い雨

羽曳野市 三好専平

日本も迷彩服をひけらかし
団塊の世代が山を練り歩き
戦争に飽きて虜囚がいたぶられ
インディアンも殺戮をした超大国
刺青の美人朝湯で頬を染め

羽曳野市 安芸田泰子

おばあさんなんて呼ぶから振り向かん
考えて考え抜いて諦める
七回忌姉さん女房になりました
青田風が運ぶ蛙のラブコール
老犬の体調案じ旅仕度

伊右衛門を飲んで刀はさしてない
初恋の人に保険を勧められ
箸並べながら作戦立て直す
遊園地一つずつ消え夏が来る
石段を登れば雨が降ってくる

東大阪市 北村賢子

平凡でいい平凡がいい今気づく
とりたてていい事ないが元気です
追伸へ一番言いたいことを書く
思いつきり咲いてひかえめ花しようぶ
ごく普通の子供の胸の深い闇

東大阪市 安永春

風邪の熱無理はしませんが梅雨最中
お天気になればあれこれ動かねば
人の事すらすら言える無責任
底意地の悪いのがよく解かり出し
なんでやるレディーに甘い仮免許

東大阪市 指宿千枝子

梅雨のうつ晴らしてくれる枇杷の黄
婆さまが孫と同じ帽子買う
老女房笑顔になれば皺も花
買いそうな客にウインクするバッグ
見ちゃったよ眼鏡美人のその素顔

東大阪市 笠井欣子

枚方市 宮川珠笑

S.Lに乗れば貴婦人めいてくる
親を見ず子に見てもらおう果報者
治療院百歩で行ける有難さ

けしかけておいて仲裁買うて出る
若者に優先席でにらまれる

三世代親子が貰うカーネーション
茶を点てて今朝も夫婦で恙なし

圧死する夢で覚めれば妻の脚
何にでも礼言うじいちゃん変つてる
肝臓で死んだ墓前にワンカップ

東大阪市 中岡 妙

枚方市 二宮山久

緑陰で昔を語る友と居る

六月の雨に打たれてなと思う

泥つきの野菜に情も添えて出す

ほろ酔いで電話してみる孫の声

長電話私の愚痴も交せておく

老い二人旅の夜空の露天風呂

まっ直ぐな真理に若さ溢れてる

いいことがありそな今朝の空の青

考えておくと返事はせぬつもり

六十歳趣味が生きてるコンクール

枚方市 安達忠央

枚方市 森本節子

コンタクトレンズのときと眼鏡の日

近江路のなんじゃもんじゃの花やさし(抄沙實神社)

伊達眼鏡茶髪ジーンズ隣の子

日牟禮八幡 小雨の中を三三五五

老眼鏡忍者のように姿消し

玉青さんのふすま絵を見る歴史館(守口)

メガネ拭きタバコを吸うてじらした日

百一寿 力のこもった翁の筆

端正に伸びた小杉の列淨し

水無月とくず桜買う梅雨に入る

枚方市 鈴木政子

藤井寺市 高田美代子

毎日拭くピアノわが家の飾りもの

すこしずつ育ちの違う顔である

ゴコチなくホーホキョキョと鶯の初鳴き(五月十日)

一メートルも掘れば土偶に会う河内

アンバランスの夫婦案外仲がよい

とある日のわたしに付ける正誤表

川埋めて八百八橋が消えて行く

リコールをされたか梅の実がポトリ

金持も注文通りの子育たず

魂が腐らぬように本を読む

藤井寺市 太田 扶美代

わたしにも恋につながる花がある
遊んだか働いたのかわからぬ日
コーヒールンバ踊った人と共白髪
終章が透けていそうな夕焼よ
真心と真心ときどきケンカする

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

姿見に我が身をうつすしたたかさ
よい話ビールの口をあけさせる
去年より歌える曲がマイウエイ
隠し事出来てうつ向く母の前
風鈴を吊す七夕近きころ

藤井寺市 中島 志洋

淑やかに西瓜食べてるおちよほ口
無人駅客を迎える蝉時雨
もう父に裸は見せぬお下げ髪
口下手がビール二杯でよく喋り
夏の恋幸せ祈るいわし雲

藤井寺市 楠 昭子

時々本屋へ知恵を借りに行く
余るほど金があっても不幸せ
下むいて歩くお喋り下手だから
告白をしてから白い目で見られ
挨拶が同じパターンで眠くなる

松原市 小池 しげお

すぐ風に変る雨には気を許す
爪を切りながら事情を聞いている
デジタルのカメラに嘘が写らない
貯金箱うれしい合図してくれる
これ以上何も言わない砂時計

箕面市 岩津 ようじ

惚け防止に浮気してていうてはる
年金のこれじゃあ分らない理屈
医局員とにかくゴマ化したい誤診
梅雨冷えのストープ探してる焼き場
大臣だけ景気回復いうてはる

箕面市 出口 セツ子

マジックも言葉も裏は見ず生きる
生きている実感雑事追われてる
口下手で嘘がつけないから困る
チャットより笑顔に弾んでいる会話
赤電話も情も消えてく都市砂漠

守口市 結城 君子

水あびをさせて紫陽花見つめられ
三面記事日本を憂う老女あり
影は影 君の意見は通らない
二時間を蘭の魅力で観てしまう
入院の報せに力ためされる

守口市 井上 桂作

好奇心旺盛なのもほどほどに
素直にはなれぬ我が身が恥ずかしい
考え過ぎノイローゼなどならぬよう
前向きになお生きる人たのもしい
年金は政治家には不要です

八尾市 宮崎 シマ子

無呼吸の夫気になる午前二時
愛の手はすばやく出した方が勝ち
年金の多い夫を大事がる
指きれいと言われ思わず手をかくす
錯覚だったからグウの音も出ない

八尾市 内海 幸生

親も親だから子も子と他人の口
地のままで生きると決めたよ肩の荷よ
妻の忌に合わせて白い百合が咲く
ふくらんだ蕾に水のやりやすし
ほろくそに言った口から自己弁護

八尾市 宮西 弥生

何もかも修行スリッパ揃えとく
どの顔もUVカットの熟女たち
ええ夢を見ている顔で光っている
丘の上 太郎と花子いた神話
納得がいくまで泣ける城がある

八尾市 高杉 千歩

お言葉をお可愛想と聞く傘寿
私より長生きします炊飯器
ひとひらの情けに弱いおじぎ草
釣銭を貯めた余裕のあった頃
玉子さえまともに割れぬ歳となる

八尾市 長谷川 春蘭

花冷えの日もあるべしと旅支度
乗り降りに小さなドラマ春の旅
春愁や調子狂いし月曜日
苗木買う棒の如きを二三本
春一番ガラス戸なぐり戸をなぐり

八尾市 吉村 一風

初夏の風目礼交わす散歩道
父の日にあまり飲むなと子の小言
虎勝てばご機嫌のよい酒となり
謎追っているから今日も生きられる
幸せな笑顔猫にも見せておく

八尾市 村上 ミツ子

しっかりと希望を抱いて生きていく
野暮なこと言うて自分を追いつめる
逆境に耐えてきれいな虹をみる
あり余る金に追いかける夢
常識の壁 意地悪な通せんぼ

八尾市 生 嶋 ますみ

Eメール親の知らない顔を持ち
マニキュアを落すと指が寂しがり
咲きつづけ疲れましたと言う造花
天敵にいつも油断を狙われる
卒業も合格もない主婦の家事

八尾市 山 本 宏 至

つつましく生きてても妻は頑丈だ
魚住み流れる水は生きている
バツイチの門出後ろはもう見ない
調子よく言った言葉が命とり
蛙の声梅雨を呼びこむ黒い雲

八尾市 神 原 まさと

脳ふけて切符買うのに手間かかり
湯上がりの汗が引かない梅雨の入り
家までの道缶ビール呑みながら
親の癖子が真似ている参観日
子育てのつばめウイルス捨うなよ

八尾市 井 尻 民

運命というひと言で片付ける
リストラの素足で砂丘踏みしめる
望みまだ捨て切れぬまま運を待つ
五十年しこりも謎も抱いたまま
道連れと決めてでこぼこ五十年

大阪府 粉 山 隆 盛

どしゃ降りや慈雨と合掌してる人
酒とろり天下を取った父になる
純愛へ水を潤らさず花ことは
知らんぶり月が覗いた愛の部屋
爽やかさマナーとマナー ドライバー

大阪府 米 澤 俣 子

胸のうち強気と弱気せめぎ合う
ここだけは譲れぬ自負の意地がある
こぼれ種咲いて忘れぬ花ごよみ
百態の雲にイメージふくらます
陽やけたしたシャッポの帰り待つビール

大阪府 澤 田 和 重

失ったものの多さが酒にあり
近頃の子供童話に飢えている
父の日はネクタイよりも辞書贈る
感動の涙男は素手で拭く
見破って嘘を真顔で聞いてやる

大阪府 桑 田 ゆきの

鞆杖にほととぎす聞く耳膨れ
ブリクラも値上げ不況の街の中
エアコンを嫌がる介護窓を開け
サンングラス掛けて吠えてる反抗期
プランコを本気で漕いで親となり

大阪府 野田栄呼

楽しみを増やして明日へ生きる欲
死にたいと言つてる口は生きたいの
それぞれの想いが揺れる聖火リレー
この一年ダダッと増えた皺たるみ
寝たきりに近くなる脳呼び起こす

大阪府 前田ゆい

創意なお失せず体力ままならず
不信心聖地争いなぜ斯くも
泣き落とし戦略にのるお人好し
弱そうにカモフラージュをして生きる
ペアルック八十路になれば着るつもり

相生市 中塚礎石

欲一つ重荷になつて橋が揺れ
電話では元気な声の口達者
車椅子いろんな過去を乗せている
銀めしのうまさは今の米にない
聞き役は涙流しただけのこと

芦屋市 黒田能子

凜として森の大樹は風に立つ
同じ目線同じ痛みを分かち合う
本当を隠してしまふサングラス
木のとっぺんで見通しを立てている
人生の卒業式は少し後

伊丹市 山崎君子

同窓会七夕星よ彼と逢う
娘のすねをせめて五年はかじりたい
牛歩乱闘お粗末劇の後始末
欠陥隠し人命軽し社名は重し
今更に吐くに吐かれぬゴミギョーザ

伊丹市 小熊江美

悩み事洗いたいよな胸の内
奥の手はそつと忍ばす袖の下
ゆるやかな坂が息切れする始末
無垢過ぎて適齢期の娘案じてる
一杯のビールでころり気が変わる

尼崎市 軸丸勝巳

スーパリーの舟がお膳に妻の留守
喜んで剥けば上げ底ビワの種
無免許でローラーシューズ子が飛ばす
年金を知っているのは数学者
ロボットの仕草僕より柔らかい

尼崎市 林昭三

つばめ来るバリアフリーに雛が五羽
久し振り聞けば退院したばかり
ありがたい近くの他人想いやり
両親も逝き故郷が遠くなる
発表会主役の子より母目立つ

尼崎市 山田 耕治

チャンスよと言つてゐるような酔い加減

人生の九回裏の守備につく

言訳は隠すつもりがさらけ出し

抜け時のチャンススカラオケのつてゐる

世の中よ閉店セール人の波

尼崎市 内田 美也子

慈しみ励まし合つて雨遍路

癌を病む友と遍路の命乞い

天を指す杉へ邪心が消えてゆく

一寺ごと煩惱除く遍路旅

十年を区切りに亡父が遠ざかり

尼崎市 田辺 鹿太

童謡が歌いたくなる夕まぐれ

はいはいと答える妻は癒やし系

実感はないが背骨が曲つてる

夏帽子シミが怖いという八十路

金満の巨人が負けてうまい酒

尼崎市 春城 年代

入梅を告げられてから慌てだす

冷房を入れると夏が胡坐かく

あつという間に賞味期限は済んでいた

老い衰し出来れば挨拶したくない

通り雨済むまで軒を借りてゐる

尼崎市 春城 武庫坊

誰がための戦か不明まだ続く

春の水辺に育つた命飛びたてり

梅雨前の青空心洗われる

汗をかく仕事すまして飯うまい

爪楊枝もう一度来たくなる味だ

尼崎市 長浜 美籠

居心地に難あり女性専用車

暗い話断ち切るようにワイン抜く

成るように成る気休めに引くお札

心病む日には夫の墓洗う

もう一度やる気にさせた苺ジャム

三田市 北野 哲男

這う孫に大学までの金のこと

満中陰明けていよいよ一人なり

逆縁の痛手宥めに遍路杖

鯉のぼり早や夏物もバーゲンに

缶ビール七三で足る差し向い

三田市 久保田 千代

人相を見る犬がいて遠回り

一日の始まり冷えた水を飲む

飼主に似てむだ吠えの多い犬

原点にもどる素直さ持ち合わせ

風のいろ見たくて歩く田舎道

川西市 西内朋月

寿命など分らないから眠られる
宴会の料理はいつも余している
分別がややこしいゴミ収集日
コンピニのおでんのネタは変わらない
うとうとと髭を剃られて聞くうわさ

川西市 米原雪子

一斉に税込み値札威圧する
長雨のトンネル抜けて緑仰び
ソーマンに載せた胡瓜の鮮やかさ
宅便洗濯物が詰まってる
思うこと言葉にならぬじれったさ

神戸市 池田善守

再訪朝むなしくひびく再調査
物忘れ時々あつてまるくいく
幸せの目の中にいて気がつかず
一瞬の妻の笑顔にいやされる
定年十年本当の妻が見えてきた

神戸市 伊勢田毅

襟正す言葉は死語の永田町
乾杯でナンパツターの面子たて
主審への野次届かない外野席
炎天下遊びを知らぬ蟻の列
支持率低下総理が次の秘策練る

神戸市 木村貴代子

子の心誰も知らない闇に満ち
責めるだけ責めて援助の手は出さぬ
殺し合うビデオに罪はないものか
被害者も加害者もいつの日かの吾子
子の育つ環境でない子は産めぬ

神戸市 山口光久

あるがまま生き抜くことの難しさ
亡父の声近頃じわり効いてくる
中流の中身で並の酒を飲む
平凡に欲がちよこちよこ顔を出す
十字路に何方へ行くか試される

神戸市 山口美穂

腹八分やっぱりあとでもう少し
いかなごにつづいて忙しく梅ラツキヨ
腹のうちすつかり犬に見られてた
お世辞だと知りつつ頬が弛んでき
年はとし鏡は騙せないと知る

西宮市 井上松煙

楠千年傘寿の弱気叱咤する
木の温み日曜大工包み込む
人の不幸見過ぎて眼鏡換えてみる
アイディアが眼鏡拭いても出てこない
老いた足家路の坂に耐える日

西宮市 菊池 トミエ

離れ鳥純真無垢な人ばかり
野仏の頬もほころぶ春かすみ
我が身をば五体満足感謝する
身のほどをわきままえ背伸びしないこと
須磨の海西日傾く夕涼み

西宮市 坪井孝一

ブーメランやつと僕まで辿りつく
朝昼晩妻はタクトを使い分け
センチな歌聞くと矛先鈍くなる
おやじの掌数え切れない仕事した
息子には酒席のおきて箇条書き

西宮市 緒方美津子

父の日の花屋普通に定休日
疲れたら老いという蓑被つとく
一日雨整理整頓冷蔵庫
色メガネいわれようともタイガース
忘れもの歳相応と勞られ

西宮市 亀岡哲子

懸命に咲く花だからみんな好き
頼まれてひととき満つる針仕事
屋根修理タンポン梅雨に急かされる
とび込んで燕の軒を借る驟雨
縮まぬよう身体も脳もストレッチ

西宮市 牧 潤 富喜子

何気ないひとことで咲く花がある
目に青葉つらい話が多過ぎる
台風接近まだ五月だと言っておく
イラクから吹いて来たのか樹が揺れる
夜が明けるあわてふためく月に会う

西宮市 秋元てる

頼まれた漫画切抜き孫を待つ
無事らしい旅先からの絵の便り
亡母ならばこつちだろうと藍にする
愛蔵の壺を突然くれた姉
半世紀未だ身につかぬ関西弁

西宮市 門谷 たず子

倅せの昔が匂う小引出し
雨しとど孤独を癒やすひとり言
悟りには遠くひたすら経を読む
父母も夫も静かに眠れ終の墓
沖の夕陽にプラス志向の帆を上げる

西宮市 山本義子

尾瀬ヶ原歩けたころの足恋し
雄大なねぶた観た日よ芸術よ
立山の峰 雪の壁なる造形美
潮岬地球は丸いままるい
上高地なら頑張ればまた行ける

西宮市 西口 いわゑ

一言がじわりビタミン剤になる
どしゃ降りへあの郵便はどのあたり
紫陽花が雨のメールのように揺れ
自信過剰何も見えなくなっている
封印の恋をそろりと開けてみる

姫路市 古川 奮 水

薩摩弁うなずく上野西郷どん
米寿の日叔母を励ます感謝の日
美辞麗句くどくて食べぬ披露宴
不器用な癖に何でも引受ける
梅雨入りに龍暴れだし虎逃げる

兵庫県 大谷 幸次郎

見栄や欲絡みもつれる赤い糸
傷ついた破れ太鼓をまだ叩く
気兼ねなく休みなさいと雨の音
落ちる陽の真つ赤にジョッキ傾ける
久闊を叙してビールの栓を抜く

奈良市 米田 恭 昌

初恋はただときめいただけのこと
柳の下の激ヤセ美人コンクール
脇差の封印切った二度の職
娘よを父絶句して歌えない(カラオケ 2句)
コッペパン思い出させた神田川

奈良市 天正 千梢

国宝と言われる芸にのほりつめ
エネルギー総身に受けて登る山
自己責任 何と重い言葉だろ
羅漢寺の苔青あおと降りやまず
尼僧持つ箒の彼方落椿

生駒市 飛 永 ふりこ

麗しきフルート奏者音の冴え
血の通う絆深まるボランティア
裏表あつて人間好きになる
かわいげがあつてすんなり手助けし
四方八方隙を見せずに激んでる

香芝市 大内 朝子

母の歳 母の思いがようわかる
赤っ恥またかきましたお馬鹿さん
仕返しを思う心が干からびる
わがままと自由ときどき間違える
人生に悔いは無いのかおい朝子

橿原市 安土 理 恵

悪女になる黒いバラソル買いました
ここまでは迷うことなく添うて来た
画布のひまわりいつか炎になるだろう
朝刊を添えてコーヒーもレトロ
酸素ボンベ提げてたまには夜の街

檀原市 居谷 真理子

電子辞書へえーを連発して遊ぶ
湯治場の客に傷なき者はなし
温室の茄子で品よく無表情
壺に百合 祥月命日降りやまず
恋はまだうぶで林の中の道

大和郡山市 坊農 柳弘

怠慢を叱るもう一人のわたし
ピードロの風鈴熱帯夜に拗ねる
祇園囃子 山鉦巡行みかん水
人許す愛の起伏の水芭蕉
夫唱婦随賞味期限のプレーオフ

和歌山県 中後 清史

棟上げのローンが重い酒の味
孫を抱くときは手洗いさせられる
叱つてもあつけらかんとしてる孫
白髪染めするかしないか悩む歳
あくせくと日を送るのは止めにする

和歌山市 牛尾 緑良

決定権どうやら妻に負けている
匂という味がわかってきた老後
絶筆と知った便りを読み返す
子守唄うたつてるのは母のため
ゆつくりと歩くと見える野辺の花

和歌山市 桜井 千秀

午前二時目覚めそれから長い夜
揺らめいた戸惑いそつと始末する
あつけらかんが取り柄佳い面悪い面
行きずりの里の訛りに後ろ髪
もたれ合い傷つけ合ってお友達

和歌山市 福本 英子

弾まない心ひとりを持て余す
やきもちを焼いた昔に戻れたら
すぐ歳に逃げ込みたがる怠け癖
じわじわと私を責める臍の水
何がきても受けるのれんで張りが無い

和歌山市 松原 寿子

心に決めひとつ返事で跳ね返す
夏色とデュエツト波とたわむれる
愛ひとつ乾いた風に浮いている
踏み切って苦勞の種を買っている
ぶらり来て孤独を捌く喫茶店

和歌山市 川上 大輪

正座していますテレビに夢中です
歳を取る私と取らぬままの亡妻
うたた寝をするのに丁度良い机
詐欺師からたまに督促状が来る
直線の上に現在過去未来

和歌山市 西山 幸

平凡なシナリオだから恐くなる
あやふやな毎日がある万歩計
錠剤をどっさり溜めて梅雨に入る
青空がいちばん好きな夏帽子
門はずして入れて日が暮れる

和歌山市 細川 稚代

ふくよかな笑顔で客を一人じめ
セクシーに汗をぬぐってお立台
挑戦はよそうあの人超ビキニ
にこにこと急所をついて来る名医
今日もまた痛みわけ合う長電話

和歌山市 田中 みね

アジサイよよくぞここまで咲いてくれ
ご近所へ隈無く配る七変化
どうされておいでなのかと雅子さま
悪口が皆無の人でおもろくない
不愉快です言っていないこと言わないで

和歌山市 古久保 和子

ペットボトルのお茶に日本が沈みそう
人の波に押し流されて顔がない
魚屋の午後は魚も昼寝する
ティータイム珈琲嫌いの友も居て
手引書の厚さ小馬鹿にされながら

和歌山市 堀畑 靖子

おだまりと塞いでみたい口がある
忙しいそれが勲章だった頃
挫折して知った私の泣きどころ
孫が来てはじきとばしてくれたウツ
赤点の目立つ私の半生記

和歌山市 山口 三千子

期待だけ持たせて何時も四捨にする
心の糸切れてた事に気が付かず
負け犬になって波風立てず退く
様々なコント残した通過点
耐えた日々やつと心に楔打つ

和歌山市 楠見 章子

紫陽花の額から滴こぼれそう
六月は頭痛肩凝りともだちに
節目ごと小さな夢に彩足して
イヤリングそうかそうかと揺れている
しゃぼん玉乗せるやさしい風を待つ

和歌山市 武本 碧

手抜きなどした覚えのない子が背く
おもしろい話へ横槍入れる野暮
団欒へ百歳の腰伸びてくる
残照へ挑戦したい彩がある
逃げ水を明日も信じて恙ない

和歌山市 上地 登美代

子や孫へ歛振る母の荒れた指

とっさの返事下手で足踏みばかりする

美人でもおまけをしないバーコード

不正もまた文化だろうか世の乱れ

お静かに打ち明けましょう猫の恋

和歌山市 松尾和香

子とメール母は優しい顔になる

親離れ気楽人生自炊する

傘の雫紫陽花寺に良く似合う

雨音に自転車の孫思い遣り

花散つて来年咲かす土作り

和歌山市 宮本三喜夫

自慢した回転ドアも姿消す

事故隠しボロが次々出てきます

年金の未納騒ぎで失職す

嫌ですな芋ヅル式にほるを出す

世の中は解からんことが多すぎる

和歌山市 木村初子

深呼吸 今日もたしかに生きている

九死に一生まだまだ句読点打たぬ

病室の窓より拝す紀三井寺

花活けて少し華やく病床に

空の青今日の命に活を入れ

海南市 谷口義男

人生の裏面を抉る一行詩

欲少し捨てて世間を広く住む

グルメ旅よりも老いには妻の味

貸農園で花作りする老いの余暇

高齢者増えて子供の減る日本

海南市 堂上泰女

娘へと伝えたい事孫に言う

顔見えぬ分だけ本音吐くメール

絵日傘で若作りする初夏の街

プライドがちよこつと生きる邪魔をする

虹色の服を買います欲張り

鳥取市 西村黙光

楢山へ孫は無断で先に逝き

十二歳余りに早い黄泉の旅

学友の涙儀場へ満ち溢れ

メモ帳をばりばり破る通夜の席

在りし日のお河童頭いい笑顔

鳥取市 美田旋風

少子化が進み廃校また増える

定位置で春を誇示する庭の花

赤提灯不況の風にまだ揺れる

老人介護たらい回しをする施設

どの花にしようか蝶が庭に舞う

鳥取市 杉本孝男

青春の爆発太鼓乱れ打ち

記念樹の蔭にドラマが埋めてある

記者冥利足で稼いだトップ記事

嘘つかぬ土恋人にして生きる

頑固さで通るまでには恥も掻き

鳥取市 岸本宏章

今ここに私が生きている不思議

人生に手遅れはなし捻子を巻く

ライバルの出世へ苦い酒も飲み

サーカスを見ているような屋根工事

お節介涙の訳を聞きたがる

鳥取市 夏目一粹

蛍舞う纏れた糸が解けるよう

貧しさがほろりとさせることもある

雨雲をめぐればきつと青い空

スコップでストレスを掘る地球から

さびしさも幸せのうちかも知れぬ

鳥取市 植田一京

わが庭の青葉の下でティータイム

取り敢えず鏡に笑顔して出掛け

ローカルの旅にしつとり青葉雨

ほろ酔いをにっこり月に笑われる

十六夜の月がほんとはまん丸い

鳥取市 倉益一瑠

規格から外れてみるとおもしろい

夕暮れのあせり根気がついてこぬ

汗をかく明日へ充電しておこう

孫の守り癒されていたのはわたし

困ったら逆立ちをする癖がある

鳥取市 録沢風花

長雨も慈雨から憎い雨になる

まな板の音もそれぞれ三世代

綱引きをしながら風を読んでいる

にんまりと納得をした試着室

年金の未納に蟹も泡をふく

鳥取市 福田登美

予期もせぬ入院となるわが不覚

明日のこと解らぬままに爪を切る

夏帽子深目に被る蝉しぐれ

介護するわが身が少し軋みだす

うろろうと落ち着かぬまま喜寿が過ぎ

鳥取市 山本益子

バーゲンセール女のドラマ凄まじい

忘れんぞ八月の空原子雲

シンボルの太陽の塔顔が好き

女房役決して楽な位置でない

ピアノ弾く老いの十指は踊り出す

鳥取市 加藤 茶人

愛情が憎悪に変わる妻の愚痴

犬の世話出来るが介護嫌な顔

ボケ封じ折り紙折ってボケている

今という空間に吹き込む命

家裁から見上げる屋根に鳩が二羽

鳥取市 中村 金祥

山津波 山は平らになりたがる

未加入も未納も悪と決めつける

議員バツジ国民からのリースだよ

好きなことあつて楽しい老春期

まさか核とちつて発射するまいぞ

鳥取市 武田 帆雀

父の顔妖怪にした子供の絵

井戸端が消えて菜園会議する

菊を挿す今日一日は門を閉め

双方が遣り手本論には触れず

話し出したら長い人そつと避け

鳥取市 富山 檳榔樹

煩惱を捨てよと叫ぶ座禅草

小さな愛軽く後押す車椅子

浮草の根っ子の怖さご存じか

なんやかんや纏れる元は姑さま

盾突いた後は佯びしい庭掃除

鳥取市 永原 昌鼓

賞味期限切れても女翔びたがり

艶やかな髪が若さを主張する

錯覚を認めたくない老いの意地

リースした命いずれば返さねば

悪あがきすれば墓穴を深くする

鳥取市 山宮 愛恵

とらえ方の違いに波が荒くなる

ロマンスグレー髭に個性をのぞかせる

声出して単行本を読んでいる

ジャラジャラと一円さがすマーケット

堂々と自分のミスを認めてる

鳥取市 宮脇 道子

スタスタと歩ける靴を買いにゆく

足許の段差怖くて踏みきれぬ

幸福を土産にもつて次の世に

猫夢中蝶を追っかけ無心です

千人針知らぬ世代に馬鹿にされ

鳥取市 有沢 せつ子

園児らは青空が好き土が好き

わいわいとプール掃除が弾んでる

無職でも日曜日にははっとする

満期日あと十年と励まされ

黙祷へ旧いラジオは鳴りつづく

鳥取県 林 露 杖

紫陽花の藍を深めて五月雨る
オハヨウツと登校の児らの声弾け
迸るほどの意欲を懐かしむ
カップ麵啜りつ見てるとつちシヨー
現し世に長生き肩身狭くなり

鳥取県 乾 喜与志

父逝つて七人の子に母つよし
戦争に負け小児だけ戻つたり
白雲もいつしか青い天になる
百寿までとどけと歌を張り上げる
家に戻ると仏前のナマンダブ

鳥取県 西 原 艶 子

猫がいて話し相手をしてくれる
整えて掃いて虚しい広い部屋
裏山のうぐいす変ホ調で鳴き
生かされていることだけで素晴らしい
合掌の中から拾う明日の糧

鳥取県 谷 口 次 男

ケイタイを片手に鱧の当たり待ち
悪政に日本中が恐山
何回もあの看護師が見た誤診
死が怖いだから私は生きている
鶏が健康診断受けに行く

鳥取県 石 谷 美 恵 子

いい友ばかり私の宝だと思ふ
半分は遊びで回るお霊場
ターミナル一人ひとりにある行方
手に負えぬ一度曲がつた夫と釘
ハイハイハイ不満が廊下歩く音

鳥取県 上 田 俊 路

勝ち負けは問わず根気よさを誉め
川柳と生きた白寿の花悼む
エアコンの中の八月十五日
エアコンが罪に問われる夏の風邪
エアコンが留守ではないと唸つてる

鳥取県 奥 田 保 子

愚痴よそう自分惨めになるばかり
饒舌な女が集う雨降る日
失敗を恐れて前へ進めない
休みなく伸びる草には負けました
恨むより許した方が楽になる

鳥取県 鳥 羽 玲 子

ひとり居ることのたのしい自分見る
三日三晩悔いてる内にあきらめる
大切かゴミかと迷いながら捨て
あいさつに始まる作法教えられ
二人展気恥ずかしさも飾られる

鳥取県 鳥羽直市

やりくりをしながら夢をふくらます

蟹すきを囲み家族の輪を結ぶ

夏まつり下駄の鼻緒が指をかむ

戦争を知らぬこどもだ米食わぬ

メモをとる今日と明日とを繋いでる

鳥取県 平尾菜美

トップの灯みつめて舟を漕いでいる

窓際の花明るくて救われる

向日葵へ真っ直ぐ雨が降っている

最果ての駅でやさしい花に会う

明日にはきつと花咲く寒稽古

鳥取県 盛田夢路

家移りに愛着断てぬゴミの山

ラブゲーム今ならうまく蝶に舞う

閉じ込めたところ久しく竿に干す

逢いたくて逢えば傷跡深くなる

雨あがり山もわたしも萌えている

鳥取県 細田裕花

守備範囲広い男のあらい息

不満など言ってもらえない青い空

戦争の中でも美談生まれてる

百合薫る背すじ伸ばして歩いてる

カラカラの心にやさし雨の音

鳥取県 西川和子

見よう見まねで覚えた腕が鳴っている

だらだらと一日過ごす定休日

また草が生えたと土のご忠告

ストレスを癒やしてくれる庭の土

元気な顔が揃って旨い生ビール

鳥取県 太田幸枝

土重ね土の匂いが好きになる

留守電がピーと応えて味気無い

托鉢の僧もたたけば出る埃

趣味の会歳の差忘れ輪の中に

平凡な生活が出来てありがたい

鳥取県 蔵本悦子

親友は僕の弱点だけを誉め

涙には鬼おとなしくなる不思議

美女の酌でビールが倍旨くなる

信じ合ひ友とのレール長くする

破れてもその分バネに夢造る

鳥取県 澤裕子

割り勘の時はたっぷり飲んでる

迷う顔泣く顔母は子に見せぬ

郵便に人のおいが付いてくる

不器用な人だがこころ温かい

プレッシャーの中で力を試される

鳥取県 佐伯やえ

ことしも夏を運んでくれた金魚屋さん
うだるよな暑さにうまい井戸の水
限りなき愛手作りのかしわ餅

前代未聞一本の木にウメ一斗
亡母のよなやさしい人にまだ逢えぬ

鳥取県 土橋 はるお

好きと言う時は気まぐれでは駄目だ

深呼吸してからビールいっ気飲み

金魚が泳ぐ浴衣いちばん涼しいな

クラクシヨ私にどけと響かせる

大勢で聞くと太鼓も良く響く

鳥取県 土橋 睦子

部屋中に香りただようビタミンC

行く先の見えぬ鈍行ひとり旅

こぼれ出た秘密を拾うペンがある

旅好きでパソコンたよる老いの坂

イラクへと戦を知らぬボランティア

鳥取県 岩崎 みさ江

はまゆうの健気なほどの棘を持ち

暖冬に害虫たちの揃い踏み

船頭も行方を知らぬ日本丸

闘いに散るため産んだはずでなし

百歳の笑顔に美女もかなわない

鳥取県 近藤 春恵

少しくらいよろめいたって信じてる

悶々と眠れず時計ばかり見る

変人と頑固者とは同類か

嫁ぎ行く孫の言葉にほろりする

子守唄聞いて赤鬼ほろりする

鳥取県 新家 完司

焼きたてのパン買いに行く梅雨晴れ間

銭のため下げる頭に汗が出る

悪友の一人ひっそりホスピスへ

老人になると思いもしなかった

祭りから帰って暗い灯を点す

鳥取県 山下 節子

オレオレにすぐに乗つかのるのも悪い

いいえとはなかなか言えぬ義理がある

気まぐれに行方定めぬ旅もよし

ライバルがどんだん先を走ってる

思い切り遊びも出来ず塾通い

鳥取県 田村 きみ子

おろおろの顔は見せないかすみ草

馬鹿になる本読んでるが寝てしまふ

蝶々が舞ってる気持好きさそうに

しばらくは夜の鏡と話し合う

赤い服着るのが好きで満ちている

鳥取県 山本 正光

梅雨晴れ間花回廊が賑やか
くたびれた靴だがとても履きやすい
せつかちものんびりしても日は暮れる
忙しい日本に牛歩ある政治
親切のしすぎか肩が凝りだした

鳥取県 奥谷 彩子

6Bで句箋を埋める自己主張
愛語めてほっこり母のにぎりめし
匂い立つ花も娘も七分咲き
亡夫に似た面影に会う日暮れどき
人一杯死んで蛩は乱舞する

鳥取県 平井 栄翁

無人駅指切りするに都合よい
訪朝の総理いじめる民の声
枝振りを誉めて本音を話さず
白牡丹咲いて賑やか狭い庭
京菓子と玉露に貰う八十の明日

鳥取県 下田 茂登子

曾我さんをみると私も頑張れる
あれこれと薬を飲んでまだ迷う
哀しみをバナに生きよう古希の坂
戻ること待って事態は進まない
玉葱を毎日食べて元気です

鳥取県 吉田 孔美子

パートのはしごに持った万歩計
娘の部屋に日がな音なしデートなし
洩れ聞いた秘策に雲を歩くよう
何もなかったよとふるさとの瀬音
自然界こんな良い友他にない

鳥取県 前坂 なお美

笑いたくないから笑わないでおく
針の穴なかなか糸が通らない
鐘の音だれが打っても同じおと
私にも秘め事ほんの二つ三つ
月曜日次の休みが待ち遠しい

鳥取県 国森 武子

田植すみ雨音を聞き日記書く
明日からは一寸安心してくらす
合羽着ぬ田植よかつたと一人言
七十を過ぎると田植きつくなり
田植すみみんながねてる日曜日

米子市 林 瑞枝

ぱつと開く十指の中にある気力
市議会の女性パワーにする拍手
此処も極楽トンボ群がる野で遊ぶ
よくお似合いと鏡に言わず試着室
樹のてっぺん鳶は森の哲学者

米子市 木村 富美子

雑草くさむしる花にごめんな言いながら
気取らない路傍の花にある誇り
花を見る花の心を読むように
弾まないボールが一つ手に残る
こっそりと小さな親切置いて来る

米子市 野坂 なみ

中三の快挙カンヌの男優賞
浄土かも夜明けの池に蓮ひらく
あなたとの川逢いにゆく橋がない
その日には蛍の通う窓あけて
赤とんぼ今度は老母を眠らせる

米子市 澤田 千春

ストレスも山の魅力に癒される
さわやかな魅力をおいて去った人
魅せられて触れたらばらが刺してきた
ふところに今もくじけぬ歌をもつ
愛唱歌と峠を越えて水を飲む

米子市 青戸 田鶴

幸いは自分の足でまだ歩く
六月の薔薇のとりこになっている
光りもの着たので今日は落ちつかぬ
約束はモカコーヒーをのみながら
祭から近所の壁がなくなつた

米子市 白根 ふみ

花菖蒲ほんとに梅雨が好きなんだ
わたしには苦手紫陽花雨がすき
旧姓で呼ばれタイムスリップす
再会を誓ういのちある限り
地だんだはもう踏まないであるがまま

米子市 木村 春枝

朝の歌うたって犬と二人連れ
スランプに貴方の笑みが救世主
高僧のお話耳に心地よく
待合室若い人には出会わない
夢を抱く海の魅力は抜け出せぬ

米子市 中井 ゆき

田楽を食べに行こうか伊賀上野
仏さん私の魅力なんでした
ラブソング大きな空が受けたつた
恋歌も入れよう丸いポストなら
三毛猫ものっそり歩く梅雨晴れ間

米子市 永井 三津子

恋かしら仕事仕事と娘が遅い
口実をあれこれ作り逢いに行く
温泉へ行く夢話す病む母に
親しみの肩ポンさえもセクハラか
ぼろ家でも我が家一番安らげる

約束をきちんと守り暮す日々

童謡をうたうと心洗われる

書き方が苦手なまんま歳を取り

太陽と契つて花は咲きほこる

とれとれの茄子の艶には脱帽だ

米子市 門 脇 晶 子

たそがれて歩け歩けは苦手で

約束があつて呆けてる閑がない

最近の歌は手拍子も打てない

ナツメロのテレビ私をよんでいる

墓まいり母の挽歌をききに行く

米子市 本 吉 宗 光

拡大鏡磨いて辞書をもう一度

改憲してイラクで武器を使うのか

例会でさすらいの鶉歌おうか

米二合四回食の二十年

ユーモア八十歳ノイエス

倉吉市 牧 野 芳 光

捨てたつもりの古里が顔を出す

夫婦して楽しい皺を刻んでいる

三つほど忘れてひとつ思い出す

深呼吸陳腐な詩を裏返す

天気よし誰かを笑わせに行こう

薫る風呂浴びてジョギング遠回り

貪欲に目から耳から食べている

糠味噌が馴染み嫁女も落ち着いた

ハイテクの知恵孫からの賜りもの

こつそりとばーちゃんがする泥パック

倉吉市 最 上 和 枝

土と虫食べておしゃべりするつばめ

七変化紫陽花さえも揺れている

強がってみてもうっかりミスばかり

陶工の腕を離れぬ火の匂い

何にでも首横に振る臍曲がり

倉吉市 松 本 よしえ

図書館に蛍の図鑑見に行つた

幸せな蛍 城趾の濠に住む

雨の日は赤ちゃんの機嫌が悪い

雨上がり陽は燦々とプチトマト

投げ返す子の直球に覇気がある

倉吉市 米 田 幸 子

長生きはしたくないけど薬飲む

地獄の釜はセンサーつけてないらしい

触るなど書いてあるから触りたい

針の穴のぞくと青い空がある

笹舟を流した川が消えていた

倉吉市 森 川 あらた

叶わない夢などないと信じよう
性格は地味だが下着派手である
怖い夢見た日は家に閉じこもる
苦手な人の前で涙は流さない
おしゃべりで脂肪燃烧さしている

倉吉市 山 本 玲 子

新緑のむらむら萌えて山動く
五月晴れ探す四つ葉のクローバー
伝統行事御輿を担ぐ人集め
マネキンのようにならぬと無茶な客
大きな声で言えぬといって噂撒く

倉吉市 淡 路 ゆり子

空缶を拾うことから子に教え
八十路まで一途に生きた振り向かぬ
生きるとはしんどい事だもう寝よう
名水の湧く故郷に老母をおく
向き合って惚けた同士の行く末を

倉吉市 山 中 康 子

サタニユーム今が旬です紅く炎え
かど張らず柳友に明かした泣き笑い
高齢者意見も愚痴もみなおなじ
益になるテレビ会話の毒になり
これからは口にねじ巻く長電話

倉吉市 猪 川 由美子

千両役者の北の対応苦勞する
エネルギーの浪費だ立腹やゝめた
雨降ると土の言葉が聞こえくる
拉致帰国途端に隣の人となり
他人の失脚ある日突然タナばたに

松江市 三 島 崧 丘

趣味嗜好あ忙しい面白い
普段着のままを見せます裏表
至福とはこんなものだよ妻の酌
玩具屋に並ぶ仮面に邪気はない
茶柱を添えて出てくる十割蕎麦

松江市 津 川 紫 晃

くずかごへきちんと罪を捨ててきた
いつか開く大きな傘を持っている
花畑春の音譜がころげ出る
放される訳は知らない鮎の稚魚
止まってはならぬ夫婦のやじろべえ

松江市 銭 山 昌 枝

指切りもひとりよがりのまま終る
ときどきはわたしの色を消して見る
引き出しの奥へ仕舞ったままの罪
原形になるまで垢をすっている
わたくしの音色で最後まで踊る

松江市 川本 畔

色黒のムカゴなかなか手恐いぞ

このままが一番いいと干大根

わたくしを解き放してはくれぬ鍋

五十段登り小躍りするお城

片方の草履謀反を企てる

松江市 安食 友子

この一句あえいでいます狭間から

生き生きと発色しよううぶな芽よ

軽い口盗聴器からくわばらだ

利那的ティールームでの指ざわり

天花粉ひ孫にすすめ笑われた

松江市 小川 注湖

幸せは夫婦喧嘩をまだしてる

高層ビル社名新旧ドラマあり

芥川賞二十歳の娘書く世界

蹴ったつてびくともしない広い背な

健康管理俵のくれた器具寝てる

松江市 松本 知恵子

迷いなく胡瓜のつるが天を向く

輪の中で女の声が高くなる

わたくしの指からこぼれ易き幸

迷い事思いながらの草むしり

電話口こえが仮面をかぶってる

松江市 佐野木 みえ

思慕一つ引出しの奥にしまっておく

仙台の青葉に染まる母と娘と

やまびこ号こけしの里へ一直線

アイリスの近寄り易い古代紫

絵手紙の花菖蒲から露一つ

出雲市 竹治 ちかし

泣き二人笑って二人老い二人

フルムーン妻の作ったスケジュール

孫の顔見れば長生きしたくなり

サーピスの品物只の味がする

人間もカラスも生きるのは辛い

出雲市 園山 多賀子

菜の花が絨毯になる過疎の贅

黙認で済まぬいずれば煙立つ

二次元で踊る素足の土踏まず

詩心盾に人間続けます

篩から何時も私は落ちています

出雲市 吉岡 きみえ

父の恩母の恩山が越えられぬ

空無限何にも思うことはない

かるい罪かるい目まいに懺悔する

脇役で耐えてばかりのかすみ草

俎板にのせたリズムにどじょう跳ね

出雲市 板垣夢醉

線香のかおり父母への盆帰省
鳴き砂に手足がそろふ盆踊り
花とちよう会話させてる初夏の風
消す灯すネオンのようなほたるのひ
ビール瓶の音が会議を早めさす

出雲市 岸 桂子

人の死を数えた指に夏が来る
ファックスが一人で出来るようになる
めずらしく約束事のない土曜
二度聞いて二度とも花の名を忘れ
犬連れて行くには丁度よいポスト

出雲市 富田蘭水

幸せは今夜も酒がうまいこと
まだ出来る溝の掃除に感謝する
梅雨の入り右脳に徴がこぬように
勿体ない私一人の露天風呂
余命まだ烏の知恵に負けはせぬ

出雲市 城 多喜

どのように寝ても痛みのやわらはず
言う事をきかぬ身体をもてあます
ばつざりと切ったが未練残る花
美しく咲いても所詮野の花よ
来い来いと米を播いたが来ぬ雀

出雲市 伊藤玲子

粽蒸す笹のかおりに亡母が居る
へたばった耳がトンチンカン言わす
さりげない言葉の端に切れました
紫が好きで茄子の苗植える
ときどきは母を病気にして休む

出雲市 小白金 房子

青い海我欲ひとつを捨ててくる
千木高く新緑匂う大やしろ
過去は過去触れてはならぬ思いやり
大げさな話は聞かぬ耳の穴
一人居を見舞うて過疎の長い道

出雲市 久谷 まこと

ひとり言うもう馴れっここの合返事
後手に閉めたドアに悔い残る
難聴を訪う人の手話ませて
思い出をそれぞれ秘める皺の数
四季の花今朝も待つてる無人駅

出雲市 岡 あきら

わだかまりないさポケット裏返す
眠れない枕が語るその続き
振り向いてから足早に行くせがれ
全勝のつもり裂かれた帰行道
孫ならと思うと胸が張り裂ける

出雲市 小玉 満江

友達をつなぐ言葉はありがとう

くたばってなるかと意地の見せどころ

山の道うぐいす達のピーアール

さよならへ灯がにじむ春の雨

年金があるので一寸我を通す

出雲市 石倉 芙佐子

隊列を乱したことの無い桜

雲低く山川草木唄も無し

ああ戦友一人二人と抜けていく

この胸に還して欲しい点と線

さよならのただ一言も言いもせず

出雲市 多久和 敬子

正直な三面鏡がいやになる

旅先の心の温さ持ち帰る

父さんを今夜も酒が眠らせる

父の日の墓前に供えるワンカット

いい主婦を演じくたばる六十路坂

出雲市 青山 久子

大声で泣く悲しみに負けぬよう

まる描いてにつこりさせた胸の中

艶ばなしとても元気になってきた

澄むまでは灰汁を掬っていくつもり

つるつるり何も考えないうどん

島根県 多々納 テル子

春うらら名もない草を見て歩く

一周忌亡兄は浄土へめぐす旅

文字のない絵本にしばし夢をみる

だんだんと無駄を省いて弾んでる

カラオケの音痴の歌で座が和む

島根県 持田 多輝子

冗談が通ぜぬ人にさからえぬ

我が余命電子カルテが知っている

どうせなら笑って生きる花暦

年金はどうなろうとも自衛策

歩の悪い話あくびでごまかされ

島根県 森 茂美

空っぽになるまで喋るクラス会

傷ついた指の痛さもバラ手入れ

遠がすみ三瓶の山を見る車窓

平凡な家庭で子供二人居る

ゆっくりと過去を忘れる歳となり

島根県 伊藤 寿美

わたしより悲しい人が居た寺院

立ち食いそば女独りも旅馴れる

わらび ぜんまい レンビを添えた無人市

飽食のわたしも大根も鬆が入る

十一歳の箱を怖々覗き込む

岡山市 井上 柳五郎

世のゆがみ人の心を鬼畜にす
宵寝して深夜ラジオに耳澄ます
健康の大事なことを病んで知り
冷やかな他人の目もつわが身知る
大陸へ雄飛の夢で関釜船

倉敷市 小野 克枝

領海の区切りを知らぬ魚がはね
やと拾った運を上座にすわらせる
過去の傷埋めて未来を織り上げる
生存者一名と言うそのひとり
忍耐でゆるむ絆を引きしめる

倉敷市 井上 富子

ばんこつでも愛しい人と水入らず
借金取りを振り切ったのは霊柩車
方向音痴の車で旅をした疲れ
雑魚には雑魚の背丈に合った設計図
常識を盛って摩擦のない生活

岡山県 小林 妻子

性懲りもなく贅沢を居座らせ
米の飯そろそろ棘の刺さるころ
田植機と独り田植をしています
休肝日すぐに忘れた事にする
年寄という名でいつも上座です

岡山県 山本 玉恵

半分は嘘で埋めて置くページ
貧しさを知らぬ若さの臍出しルック
時どきは妬いてやかれて夫婦とは
風みどり夢追い人は山が好き
荷崩れもあつたと母の物語

岡山県 大石 あすなろ

おしゃべりな口が躓きやすくなる
身辺整理荷くずればかりくり返す
都合よく時どき惚けて困らせる
くやしいが少し感度にズレがくる
気にさわる話に貸さぬ耳の穴

岡山県 福原 悦子

ほんのりと匂う老女のうす化粧
叱られた拳の痛み亡父偲ぶ
汲む水の井戸に聞えるわらべ唄
覗かねばよかった夫婦の倦怠期
目覚めると心の中に鬼が居る

岡山県 国米 きくゑ

あなたとの絆待ち針打ってます
無になってこれから先を考える
少しずつ肩の荷置いてゆく旅路
お祈りが通じましたと炎ゆれ
平凡に生きて一人で泣いている

平成16年度相生市文化祭
第12回相生市もみじまつり

日時 10月17日(日) 開場10時30分
開会13時 出句締切11時40分
会場 相生市総合福祉会館4F
電話 0791-22-7125

参加費 1000円
お話し 「日本文学ユーモア散見」村上氷筆氏
宿題と選者 各題2句 欠席投句拝辞
「目標」 恩塚 治子選
「計算」 西口いわゑ選
「圧力」 長野 峰明選
「荷物」 吐田 公一選
「磨く」 福島 直球選
「自由吟」 小松原爽介選

主催 相生市・相生市教育委員会・相生市文化協会
後援 相生市観光協会・兵庫県川柳協会
問い合わせ先 〒678-0005 相生市大石町4-1
真殿舎句里 (電話 0791-22-1754)

見て聞いて言わなきやこの世の意味がない
さりげなくほめて孫嫁との距離を埋め
百歳のお通夜に笑い声がみち
来客へ一時停戦した笑顔
言葉では言いつくせない人の恩
ゆつたりと秘訣などない白寿越す
おだてられ登った梯子降りられず
日の丸と揃えて揚げる鯉幟
蛸舞う一寸おいでと母電話
コスモスの道アイサーピスのバスが行く

岡山県 富坂志重
岡山県 福嶋智恵子



(つづき)

晴天に日照りの稲も微笑んで
真夜中の夢を楽しむ冬ソナタ
初夏の風ほろ酔いままに眠気出る
前向きに生きて余生がいそがしい
紫陽花をうらめしそうな雨のばら
害虫に耐えて玉葱よく肥り
日が経って傷の痛さはもう忘れ
手抜きする事も教えて嫁に出し
四面楚歌神よイラクへ春の風
牛の啼く牛舎が好きで散歩する
五欲から一ツ二ツが飛んでいき
吠えられてうれしくもあり戌の歳

出雲市 荒木英子
岡山県 菅田かつ子
岡山県 福間博利
岡山県 武島ちよえ

自選集

橘 高 薫 風

何を聞いてもにやんにやんにやんにやんと暮らす日

一日のために十年準備の日

傘寿にも序破急のあり面白し

百均で買う一斤のパン

紫が似合う貧乏人ながら

藤 村 女

夢ひとつ朝は始動の深呼吸

山緑遠い記憶を連れて来る

時にわびし時にさわやか風の音

露天風呂女楽しい小半時

あの女の噂を風に聞く未練

芳 地 狸 村

空港の通路埋めてるハイビスカス(那覇空港 2句)

空港をぐるりとつつむ青い海

平良港さらばフェリー春の海(宮古島 2句)

おだやかな水路たのしい船の旅

屋根付きの墓が立派な伊良部島

宮 口 笛 生

八十は昔も今も年寄りだ

八十は八十腰が痛み出す

休憩ばかりして八十路の畑仕事

好きな酒で八十路に活を入れて

ナス キュウリ ピーマン採れて来た畑

森 下 愛 論

余命表右往左往の死の行方

ふっ切れた相剋捨ててレモン噛む

罪ひとつ汚れた石を積む川原

明日あるぞしつかり夢を追い駆ける

早起きの雀と語る青い空

八 木 千 代

ルス電は苦手 相手は闇の中

慌てると指まで止めるホッチキス

ケータイもダメ行方不明も素敵でしょ

自動改札は好きよビックリ箱みたい

エスカレーターは良い行く末を見て乗れる

八 十 田 洞 庵

思い切り甘えて恋のプロローグ

制服の父に自由な歌が無い

舐めるなど無理な登山を叱りつけ

明日帰郷別れを惜しむ西銀座

あれほどの恋に別れの序曲聞く

両川 洋々

ピカドンを憎み憎んでカンナ咲く
九条が総理そんなに邪魔ですか

三流のドラマが僕の人生だ

喝采はいらぬ札束なら貰う

スピードアップせねば余生も先が見え

阿萬 萬的

一步ゆずりやつぱり歳かなと思ひ
僕の過去つつ抜けだから道譲る

言い勝つて後味悪い曇り空

早とちりつまらぬことにけつまずき

脇役に徹しきれない愚痴一つ

石川 侃流洞

將軍様と同じジュースを飲む平和

美辞麗句並べ讃える褒め殺し

独り暮らしすつかり飽きた店屋もの

塩壺を譲り目につく嫁の家事

耕耘機の後追う鷺が群れ平和

板尾 岳人

土砂降りの雨でたつぷり恋をする

雨に濡れ腕を離さぬ影法師

恋をするチャンスだ赤い服を着る

森の中拾った恋は大切に

冷奴 恋のはなしはせぬように

奥田 みつ子

怒った顔 鏡でじつと見ています
胸の底 炎を秘めていて閑か

亡くなった人に甘えてばかりいる

おいしかった 食べさせてあげたかったな

生きてきた証 句集に名を遺す(合同句集完成)

河井 庸佑

何事もなかったように海は風
腹心に背かれてから不整脈

どん底で知った苦勞は無駄にせず

宿敵にせめて一矢と意地を見せ

流されるままに任せて今日も暮れ

川島 諷云児

自信あるから真ん中を歩いている

運鈍根とかく人生むずかしい

心ない噂に揺れる枯尾花

世界一周 空想だけにしておこう

無器用さしみじみ思う針の穴

木村 あきら

泥沼に堕ちた昭和の敗戦記

新高山登ったばかり大怪我だ

八月十五日 日の丸の旗地に落ちる

四千軒ソロモンからの生き残り(海軍に従軍)

常夏で三年過ぎしボケが来る

笛太鼓豊作祈る夏祭り

神風も吹かずじまいの敗戦忌

雲が湧く猫も不安な顔をする

栄転の子に下積みの父が居る

幽谷の岩には角が多すぎる

眠るだけ眠り長寿の猫の髭

昆虫の働きものに負けちゃうよ

煙草屋に美人の娘居た昔

じゃが芋をいっばい蒸した子沢山

村はずれさよならを言う女もなし

伸びる根を止めたい句読点を打つ

マイカーと別自転車を使い道

燃えたぎる愛を封印して別れ

針の穴から洩れてきたのは神の声

公園のドラマをベンチ知っていた

来るといふ台風止める術もなし

台風を迎えるテレビ見つつける

台風を臨時休校して避ける

すぐばれる嘘が口から出てしまい

使っても使えない切れない知恵もある

工藤吟笑

黒川紫香

小西雄々

小林由多香

分校の瞳澄んでるいい空気

千枚の青田に千の逆さ岩木山

転作の村菜の花と潮風と

田を植える子は皆泥んこが好きで

少年の種子だ大地を持ち上げる

椰子を切ったらすぐに敵機がやって来た

ラバウルからよくも帰れた広島へ

命はとうに日本国に捧げてる

魚雷発見の声は何度もきいたけど

防空壕は何度替えても当たらない

東大にも悪事 赤門映される

大マンション 抜け道を知る婆に従き

転々と越した玄関撮ってない

全集を買わされ題は児も憶え

宛名書く筆親しめぬ人にされ

生きているからやって来る誕生日

八十二 合成すれば 全となる

すこやかに生を全うする全寿

失ってはじめて分かる価値がある

限りある命を生きて今日も暮れ

斉藤 焔

田口虹汀

竹内紫鏑

田中正坊

玉置重人

力釘押さえどころを心得る
頼りない翼で助け合っている
起きて寝て寝て起き流れゆく時間
セコムより亡夫の表札効いている
ありがとうエレベーターがついた駅

恒松町紅

お節介だとは承知で靴を履く
筆をもつ時は忘れている痛み
老骨もまだ相談に乗っている
回転がスローになつて書く日記
弱いとこ見られたくない電子辞書

遠山可住

泥くさい掌だ温かい血が匂う
気がかりへ漢方薬を煎じかけ
老い二人どつちも誕生日を忘れ
ばあちゃんの根気に負けた庭の草
エアコンを抜けて一と汗かきに出る

土橋螢

孟蘭盆に特攻の碑の前に立つ
この道を行つて仏に逢うつもり
友だちが大きく見える眼鏡かけ
信心の答えはひとつありがとう
照らされているとは知らぬ影法師

西田柳宏子

生きている限り弱肉強食か
人間も動物弱肉強食す
弱虫は暗い隅っこ住み馴れる
運不運三人前で売切れる
青葉風お陽様ご機嫌いいみたい

西村早苗

絵にしたい風景がある窓の外
藤の花雨後の小径を明るくし
そこはそこ旨い話に揃う顔
泣かされて泣いて互いに酒をつぐ
いらっしやい笑顔はじける美しさ

仁部四郎

屋上の稲荷に詣る課長会
合併に吞まれてならぬ招魂社
護国社の前で汗拭くヤツがいる
愛されて村の鎮守の埒守る
権力へ神社が測る車間距離

野村太茂津

老兵跋扈左腎の癌も三度目に
膀胱の癌も二度目で仲が良く
来年は卒寿名医に感謝して
癌と仲良く命拾うて癒されて
合掌の笑顔涙は滂沱とめどなし

波多野 五楽庵

水中花人の別れはつらきもの
レモン汁入れて女を忘れよう
激論が沸騰点になりたがり
老残や螺子の緩みが耐えがたい
人情の希薄な町の月見草

河内 天笑

かるらの炎浴びても煩惱は去らず
俗物になり切つて聞くお説法
ありがたい話へお賽銭忘れ
もう来んでよろしと病院に振られ
八年で四回心臓カテーター

第13回 井笠川柳会笠岡誌上大会
蕨 ひこばえ

課題 (各題2句・3名共選)
「月」 河内 天笑) 共選
前川 千津子)
小野 真備雄)
「踊る」 小林 由多香) 共選
中田 たつお)
中澤 恵生)

応募料 1000円 (定額小為替) 発表誌送付
応募要領 B5大用紙1枚に各題2句(計4句)列記
郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社

締切 8月20日(金)
投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会 宛
TEL0865-63-5858 FAX0865-63-6131

お問い合わせは 戸田さだお迄
賞品 1位に石碑贈呈(2名)
(本人希望句・1年以内建立)
3才に粗品呈(句碑建立者を除く)

会員募集 新会員募集しています
年会費2000円(年4回あすなろ発行)

第14回「太平記の里」

全国川柳大会開催要項

主催 太田市・太田市行政管理公社・同市川柳協会
後援 太田市教育委員会・(社)全日本川柳協会ほか
日時 11月21日(日) 9時30分から 締切11時30分
会場 太田市福祉会館(TEL0276-4518291)
東武鉄道伊勢崎線太田駅南口下車徒歩10分

第一部(当日参加者)

課題及び選者・各題2句詠とし表現方法自由(但し新作)

「掃る」今川 乱魚・「まっすぐ」川俣 喜猿

「実る」竹本瓢太郎・「のんき」荻原 柳絮

「嘘」成田 孤舟・「真ん中」田中寿々夢

「花一切」太田紀伊子・「伝説」てじま晩秋

特別課題「ふるさと」羽田桐柳

参加費 3000円(昼食・記念品・発表誌共)

第二部(郵送での参加者)

宿題「嬉しい」

選者 齋藤 大雄(北海道) 大野風柳(新潟)

西来 みわ(東京) 橘高薫風(大阪)

磯野いさむ(大阪) 山本翠公(大阪)

小松原爽介(兵庫) 吉岡龍城(熊本)

応募方法 2句詠・参加費1000円を添えて郵送。

第一部、第二部の特選句中、最優秀句の句碑建立。

前夜祭(5000円)出席・宿泊の方はお申込み下さい。

締切 9月30日(木) 当日消印有効

投句・申込・問合せ 〒373-0851群馬県太田市飯田町818

「太平記の里」川柳大会係(TEL0276-4518291)



板尾岳人選

出雲市 小豆沢 歌子

高知県 桑名 孝雄

マイペース他人の歩幅計らない
今日の鬱泡の中へと消す茶筌
不器用で嘘がぼっかり浮いている
嬉しくてグラスに揺れるロゼワイン
キッチンの事を忘れたローヒール

藤井寺市 若松 雅枝

重箱の隅をつついてる日本
なでしこの叱咤を浴びているおのこ
日本の開祖は女だったよね
酒好きの主治医がくれた処方箋
久闊を叙して女の話など

尼崎市 河津 正治

愛一ぱい詰めた鞆を持っている
母さんの歴史を刻む塩の壺
勝った日の花はとりわけ美しい
へこたれずまだまだチャンス狙います
まだまだと米寿の父が辞書を繰る

島根県 毛利 幸

間違いと言えず内気が眼鏡拭く
日本語が手抜きのように変わりゆく
淑女にも魔女にもなって子を育て
聞くまいと思えどゆれる隙間風
大袈裟に振った尻尾で伸を断ち

今治市 塩路 よしみ

楽しさを袋に入れて持ち歩く
世渡りが下手で岸まで泳げない
少年の頃に泳いだ川がない
爽やかな空間私の桃源郷
どうしても妻の箱から出られない

赤いバラ恋は哀しいものですね
恋蛩 本気で炎える胸の芯
夢だけに酔うて淋しい挫折感
渺渺の海愛とは死とは生きるとは
まごころの手話が咲かせた愛の花

北九州市 岡田幸生

大阪市 伏見雅明

赴任地の一つ覚えに河内節
八月の声にケロイド疼きだす
樹木医が聴く老木の嘆き声
定年の父が見ていた蜃気楼
どこがどう好きだったのか倦怠期

愛媛県 花岡順子

池田市 上村隆

頭なら朝からぼうとしています
雨の音ドレミの歌を奏で出す
実らせるまでは単なる思いつき
腕白の宝はゴミにしか見えず
心の内にずっと抱いてるのが宝

横浜市 川島良子

焦るほど見失ってく現在地
押すよりも引いて平和な日の暮し
好奇心はまだまだ老いていられない
ママになる欲び満ちて母子手帳
いい時間人も空気もあたたかい

長岡京市 山田葉子

岸和田市 森元ふみよ

いつからかほどよい距離ができている
縮まらぬ距離の向こうにいる相手
笑ってるお面の下にある素顔
分れ道手のなる方に母の地図
糸車昔話を語り出す

せがまれて飼った仔犬に骨抜かれ
相談に行き難題を持ち帰る
寝そびれて羊の群れを追いかける
嫁がせて父の威厳をとり戻す
催促をされて善意がつむじ曲げ

浮かぶ瀬もあると信じて夢を追う
恋ひとつ いつも若さを保つてる
にっこりと笑ってピシヤリ断られ
意に添わぬ妥協もあつて世を渡る
ほほえみの奥に本音は隠してる

休耕田ふてくされてる鳥おどし
人生をすったもんだでかけ抜ける
ひよつとしてひよつと会うたらどないしょ
九十三俺も同んなじ枯れすすき
予報官傘を年中持ち歩く

巻紙にさらり書きたい恋のふみ
銀行の利息ミクロの世界です
褒められて膝を崩せずしびれ増す
方針を聞かせと凄む総会屋
献立表巻紙に書く老舗庵

吹田市 木下 敏子

母の日も父の日もありありがとう
忙しい右手ゆつくり筆を持つ
残照のページを埋める彩を溶く
雑草が好きでのびのび子を育て
いつまでも仲良くしたい濡れ落葉

羽曳野市 森 下一知

ポケットの拳が握る発火点
已むを得ぬ嘘に我が身が縛られる
みそ汁の味が塩っぱい日曜日
足早に知恵の在庫が切れてゆく
年金で痩せぬ程度に食べられる

羽曳野市 福田 悦子

一人居に捨てねばならぬ過去があり
恋という字から離れぬ老いの坂
牛の胃を借りに行こうか食べ放題
コンピューター命の重さ教えない
外は雨テレビ一台あればいい

神戸市 山田 婦美子

蓼を食う虫もそれなり自己主張
好奇心持ったばかりに大火傷
床の間の花に安堵の礼を言う
ストレスをいつばいかかえている五月
出すことの出来ぬ悲鳴が飲むお酒

篠山市 谷田 多美子

亡夫と買った金の成る木がうなだれる
くわがたを見せに来た児の仲間入り
それぞれに気心合わずお付き合い
腹八分どのあたりでしょう豌豆御飯
浅漬けの胡瓜が弾む総入歯

奈良市 乾 春雄

ふるりの森がささやく子守唄
人生の流れを変えた句読点
価値観が違う渡れぬ橋がある
憧れの椅子に坐れば敵が増え
窓際でホコリをかぶる生き字引

和歌山市 坂部 かずみ

休肝日以外しつかり飲むお酒
グチ一つ百合の耳にも入れておく
時々街の空気も吸いに行く
街の灯のおもしろそうな不公平
吠えてみる独り善がりか主義主張

和歌山市 柏原 夕胡

常識は人それぞれに違います
時々外れてみたい妻の位置
忍耐と我慢わたしの辞書にない
男女同権されども威張りたくない男
背負うもの多き男にある魅力

府中市 馬場 利子

宇部市 高山 清子

水澄んで風の笑いが欲しくなる
脳重い時計の針が動かない
箱庭も夏のドラマに変わり出す
風鈴が昔の夢をたぐりよせ

旅立ちの背をそっと押す母の愛
もう逢わぬ決意でそっと置く受話器
笑つて目から毒矢が飛んでいる
弁解のたびに男の彩褪せる

府中市 岩本 雅代

串間市 高畑 滝

母の日に亡母のうどんが欲しくなる
不況風年金策に意が揺れる
通り雨思わぬ友に巡り合い
半世紀つづく夫婦のいろは坂

軒かく父母が来るらし狭い部屋
頑張らず幸せ求めて呑むビール
梅ちぎる一年の計はこの日より
雨どいの点検促す走り梅雨

倉敷市 撰 喜子

唐津市 坂本 兵八郎

酒一合素顔にもどり出る本音
誘われてノーと言えずに日々多忙
台本になかった同居三世代
もしお金あれば夫婦の月旅行

徳利が黙って聞いている本音
まあまあと本音を注ぎ込む酒杯
背伸びした脚止り木に休ませる
発酵をした私が馬鹿ですか

岡山県 矢谷 富士野

唐津市 岩崎 實

のぞきたい気になる医師の紹介状
岩木山亡き人を恋う津軽三味
お隣は裸のつき合い風邪もひく
道を説く祖父と孫との車間距離

靖国を拝す首相へ法の網
昇段に筆の運びがのびのびと
うぐいすの峠の風へ押ししてゆく
地虫鳴きホタルの闇の中歩く

岡山県 土居 ひでの

東かがわ市 向山 治延

心まで読み取る老母の眼鏡越し
亡父の樹を育てて森のシンフォニー
束の間の命を詩う蟬しぐれ
海からの情けと思うおぼろ昆布

セミの声聞けば芭蕉の句を思い
甲子園の土は汗やら涙やら
外人も手を高だかと阿波踊り
人生は重荷を背負い長の旅

今治市 野村 清美

深爪にまでも痛さに耐えている
再起する昨日の事は忘れよう
欲ばりのポケット穴が開いている
すぐ夢中三日坊主の日記帳

今治市 渡邊 伊津志

スタイルの良さで誤解が始まれり
迷惑を掛けぬ幸せ見付け出し
睨まれた財布に罪な銭がある
成り行きで心と違う言葉吐く

西予市 黒田 茂代

澄んだ瞳の奥から鈴の音がする
トリックがいつばい詰ってる政治
悲しみに溺れて雨が降り止まぬ
マリオネットだったわたしの過去がある

愛媛県 山之内 八重美

入社式背広が光る子の舟出
哀しみを置いて帰った春の風
解禁に用意周到鶏飼いの舟
喜怒哀楽夢中で過ぎた八十路坂

愛媛県 宮本 末子

生は夢死はさらに夢娑婆の音
似た顔を探せば妻の顔になる
朝市の鮮度で売れる旬の味
二番茶を親子で稼ぐ日の長さ

高知市 伊野部 和江

ぎっくり腰仲間入りして合う話
ローカル線乙女すっかり都会風
細やかな菜園からも今日の糧
梅雨晴れ間心も広げ竿に干し

高知県 百田 幸

雨でよし晴れてなおよしバスの旅
かすみ草あなたのように生きたいな
あなたには聞こえてほしいひとりごと
雨の日へ雨の仕事はおいてある

高知県 貞岡 佐紀子

温暖化微熱がやがて高熱に
青畳やはり緑の風が吹く
集団で雑草が私を攻めてくる
点滴に耐えて命の火が燃える

高知県 近森 功

名物を一つ買い足す旅土産
まだ八十恋のライバル茶飲み友
梅雨晴間どこへ急ぐかかたつむり
厄介な余生点滴レントゲン

札幌市 三浦 強一

遣伝子の正直過ぎる子の酒量
伝書鳩息抜きをする縄のれん
栄光も挫折も一緒影法師
敵に塩贈って一步リードする

日高市 根岸 方子

負け組も心の虹はより紅く
写経へと心を誘う蛇の目傘
献血で健康ですと保証され
開発の支持で隣に勤ぐられ

シドニー 三谷 たん吉

皇室のような悩みに出会う夢
散髪代目方でならば安あがり
梅雨時に晴れ間が出るとせわしない
低俗なマンガが事件引き起す

シドニー 坂上 のり子

よう喋るもててるつもりらしいけど
ほじくればそれなりの傷誰も持ち
何故だろうやたら誰彼夢で会う
袱紗など縁ないところで生きている

メルボルン 藤原 ポン吉

妻の愚痴はじまり急にボチの世話
メールして届いているか電話する
横槍を入れたつもりでとどめ刺す
少子化で気持ち複雑子沢山

秋田県 湊 修水

しみじみといのちの重さ考える
病んでみて親身の気遣い身にしてみる
年金の杖折れそんな老後策
さりげなく主役をたてるカスミ草

日立市 加藤 権悟

人間のモラルを叱る雷だ
盃へ酌めば優しい鬼になり
やりくりの妻は笑顔をたやさない
来た道を独り影法師と語る

草加市 飯土井 健翁

一時間足を鍛えて百の坂
FAXだけが頼りとなった耳
夢に見る妻はいつでも若々し
見ると観る心をこめた目が決める

東京都 井上 つよし

盆栽に親しむ年齢を愛おしみ
もう一本欲しい素振りに知らぬ顔
ウェーブの起こる快挙を心待ち
昔も今も連休明けの痩せ財布

東京都 やまぐち 珠美

ドーナツの輪へ詰めておく老婆心
なつかしむ過去で湿っていく邦画
引きずった裾からほつれだす会話
そらした眼ファウルチップは許さない

東京都 小川 賀世子

続編は息子と紡ぐバラの章
のほほんとお茶しています午後三時
病い癒えスローライフの白い午後
病んで知る感謝感謝の多い事

武蔵野市 亀井 円女

ああ言えばこう言う孫も数のうち
人は善笑顔に見えるその証し
わたしの周りみんな神様仏さま
尾瀬はるか夢で終るか車椅子

横浜市 石原 三郎

裸婦挿絵新聞小説読まされる
嫉妬心外に出す人出さぬ人
けろけろと朝の挨拶散歩道
生命線短いけれどはや米寿

横浜市 金森 徳三

判つてる自己責任で飲んでいる
庶民には値下がり感の無い物価
梅雨最中散歩の好きな神経痛
簡単に入れる保険死を誘う

横浜市 布山 嘉信

地球儀の随所砲火で焦げている
雷に先導されて梅雨が来る
セクハラの二三度あると見栄を張る
山里にソロで聞かせるホトトギス

横浜市 巖田 かず枝

今日もまた眉間にしわの寄るニュース
風呂上がりお疲れさんの湿布貼る
褒め上手その気にさせて乗せられて
褒め言葉肥料となつて大輪に

佐渡市 高野 不二

手数料取られ貯金を出して来る
消費税財布の中をのぞき込む
気の毒としか思えない雅子さま
余命表信じて今日の酒にする

岐阜市 平野 あずま

都市の隅ホームシックになる蜻蛉
鬼門など恐れぬ過密都市に住み
オクターブ上げて夫婦の二重奏
使い方覚えた頃に新製品

静岡市 中西 雅

ふり返る愛は他人にしゃべらない
このほくろしあわせを呼ぶあてはずれ
季節はずれ温室の花健忘症
親の手を離れて乗せた白い雲

犬山市 関本 かつ子

ゆつたりと着なれた人の帯の位置
百均へベントも同じ駐車場
冗談の中にチクリと入れておき
ためされているなと思うティーカップ

犬山市 金子 美千代

抜群の効果によぎる副作用
福を呼ぶ笑い袋を持ち歩く
疼きだすうまく躲したはずの刺
無作法を詫びて茶菓子に舌鼓

犬山市 吉田 幸子

おしゃべりな風が誘った旅プラン
爽快に渡った橋だ手綱しめ
梅雨空へ挿し木命がほとばしり
浮き草へおたまじゃくしもかくれんぼ

愛知県 河合 ますみ

新しいピンクのシャツにみな染まり
干し梅に傘さしかけるにわか雨
白鳥は敵も味方もなく渡り
天空の窓に登らん縄梯子

草津市 久保 和友

来世も女でと妻赤い爪
鬱の字の略字は知らず爪を剪る
宗教の本読んでます昼寝です
一匹のさんまの器量僕に似る

京都市 清水 英旺

やっと咲いたバラに希望と名付けよう
土に染む雨の匂いは梅雨の入り
考えのない一票のプーマラン
ひと気なき売り家に残る軒ツバメ

京都市 三宅 満子

自分史は多分無題になるだろう
本当の苦労は人に話さない
いさぎよく散ってやらねば子等のため
食べ放題飲み放題も他人事

大阪市 中村 れんげ

白ぼたん王者の如く咲き誇る
人生の知恵を絞って今生きる
人の世は偉人変人紙一重
神様も人の勝手に苦笑い

大阪市 平井 露芳

グランドにドルが落ちてる大リーゲ
顔だけがやせて変わらぬ太鼓腹
冬の間のプールの水で育つヤゴ
指定席決めて乗ってる無料バス

大阪市 中村 忠敬

同期会生きてる友はみんな老い
金と暇できた頃には寝たきりに
負け犬と気づいていない呑気者
歯が生えて強く噛むので授乳終え

大阪市 尾崎 黄紅

錆釘といえ大正は負けてない
井の中の小学生の頃の恋
表札と十五年を妻と生き
嫁がせてからも通帳減ってくる

大阪市 吉内 タカ子

紫陽花の丸く咲いてる仲の良さ
草までが色それぞれに競い咲き
ばあちゃんのホーム訪ねて癒される
辻褄の合わぬ話は壺に吐け

大阪市 井丸昌紀

下戸のくせ重宝される注ぎ上手
間違えて飲んだ胃薬風邪治す
どこまでもプラス思考で友はなし
宴のあと靴が一足残ってる

大阪市 吉田富美

鯨尺亡母の名があり竹の節
地球より青い色です額の花
桐の花亡母のたんすを開けて見る
あじさいの色定まりて梅雨に入る

大阪市 三浦千津子

言い勝った後で膨らむ副作用
マンネリの海で溺れている私
斜めからやんわりと衝く美人の瞳
すっぴんを映す鏡に媚びはせぬ

大阪市 池上清治

涌き水を高い値段で買わされる
命日に訪ねる僧を蘭が待つ
この不況寄りたい大樹見当たらず
ふと見ると親子四人がみな眼鏡

大阪市 木村青生

振り向けば笑顔笑顔のピアホール
ご無沙汰を詫び合いジョッキ傾ける
ままごとは折り目正しい父母ばかり
結論を急げとお茶を替えられる

社を思い内部告発する勇氣

大阪市 寺井弘子

ペット飼う家族の会話増えました
花見より噂話に花が咲き
打ち解けてリストラ同士交わす酒

大阪市 升成好

不器用で楷書の答えしか書けぬ
蚊をみつけスロービデオのように打つ
母さんの助言がぬくい失意の日
いい夢に埋もれそうな干し蒲団

大阪市 小谷集一

メンバーの共通点はお人好し
呆けてない証拠エンジンすぐかかる
エンジンをかけて行き場のない老後
構えては見たがほとんど空虚な日

池田市 多田契子

借金も勢いあつたバブル時
ハケ口無く医者者の追っかけしています
闇の中猫が知ってる二十五時
菖蒲には小雨とダンスさせてみる

和泉市 横山捷也

一回り小さくなって母米寿
ほどほどの幸せかみしめ畝作り
達筆だきつと美人に違いない
言い訳が軽くとび出す赤い舌

泉佐野市 稲葉 洋

江戸詰めサムライ道も地に落ちた
移り気な大衆に吹く風の向き
境遇と自力悟ってから気楽
あの夏を忘れないでと飛ぶ蜚

泉佐野市 備後 三代子

とことんと摺り子木の唄とろろ汁

耳寄りな話ビールのお相伴

病み上がり他力本願かざぐるま

安らぎの揺り椅子午後の雨模様

柏原市 伴 洋子

孫ほどのナースに全権にぎられる

背の痛み言葉も声もとがりだす

嫌な癖ばかり目につく倦怠期

娘と孫がオーバードラップするビデオ

河内長野市 内海 綾乃

フセインの拳銃自慢するブツシユ

年金を文句言いつつ払ってます

国民年金金ある人が未納する

何か言うとすぐはねかえる父のぐち

河内長野市 坂上 淳司

和服着た小柄な老女僕は好き

ひとり旅男枕へ妻想う

妹に席を譲るなハルウララ

耳遠い人に内緒の糸デソワ

河内長野市 木太久 正一

ウツの日は美味しい出前握り鮎
ベストセラーまだふみもみずバカの壁
骨惜しみするなと見せた母の背な
どくだみの花美しく装われ

岸和田市 坂口 英雄

肝っ玉母さん太めがよく似合う

貧乏と仲良くできた戦中派

親戚で一人は欲しい有名人

塾通い日焼けの子供見当らず

岸和田市 堤 植代

未納風吹いて議員は共倒れ

へそくりのたのしみもない一人もの

検診の前だけ食事ひかえめに

カラオケで唸り心をまぎらせる

堺市 奥 時雄

勤務地が終の棲家の里となる

同じ顔ホームに並ぶ朝の駅

危機迫りやと出てくる紋所

コップ酒溢れるまでは見届ける

堺市 荻野 像山

拾い物届け嫌ほど調べられ

満タンになるとおんなじ夢を見る

奥さんを借りて出かけるクラス会

実を食べた小鳥が種を撒きに来る

堺市 大久保 伸子

うらやまし蟬は必死でなければ
大笑いして暮らそうよ余生なら
のの字かくように揺れるよ萩の花
平成の家のあるじは妻でしょう

堺市 河盛 龍三

なあお前まあ急がずにこんな夜は
疼く歯は普段の感謝思い知る
もしも目が合ったら私どうしましょ
初めてのじゃが掘り起こし肉と食う

大阪狭山市 羽田野 洋介

控え目の顔に本音が見え隠れ
まあまだまだ磨き足りない夫婦仲
とりあえずポストに任せほつとする
二次会でやつと飲めます幹事役

吹田市 二宮 栄子

派手を着る度胸がほしい古稀の坂
誕生会輪の中心に据えられる
セールスマン エステと墓を売りに来る
新聞がちらしについてやって来る

高槻市 執行 稲子

宅急便まごころ抱いた届けもの
迫られて右往左往する答
北枕なぜか大好きよく眠る
不機嫌がわかるアルトの鈍い声

高槻市 安田 忠子

骨だけを魚の姿そのままに
華やかなダンス魚の跳ねるよう
カーテンが風に揺られてダンスする
団地の子明るいトイレ電気つけ

高槻市 大崎 侑子

父母いない故郷の洪水見るテレビ
医療ミス土下座したとて許されぬ
下戸夫婦甘味求めて旅プラン
下座から鋭い指摘座が締まる

豊中市 藤井 則彦

ライバルの箸がこちらを向いている
シャガールに見とれる妻の胸のうち
いつの間に妻とおんなじ細い箸
女房と二人で抱いてみたい月

豊中市 源田 けい生

子報士の顔曇らせる迷い梅雨
来客と思えば愛らし青蛙
年金がもう貰えない日の怖さ
帰っても異国のような親の郷

富田林市 古田 千華

慟哭をこらえて父が綴る愛
わたくしのトンネル出口見えはじめ
襖して多情多恨を流す朝
ほんものの男子がいない夏祭り

寝屋川市 岡本 勲

妻の掌で毎日踊らされている
口喧嘩たいてい妻に寄り切られ
職さがし今日も職安手弁当
万葉の歴史伝える石舞台

寝屋川市 中川 恵 香

紫陽花が絵になる庭に雨の音
紫陽花に化身お陽様ご乱行
針しゅうが添えて夏バテ封じ込む
紫陽花も人も色々雨に陽に

羽曳野市 仲谷 真 一

走り梅雨台風までも連れて来る
梅雨入りしまたも台風やって来る
参院選怒りの嵐吹きますか
保険料未納議員は皆仲間

羽曳野市 吉村 久仁雄

快復の半ばで騒ぐ酒の虫
生き方を探す生き様省みず
ネクタイを緩めなさいと窓の富士
なぜと聞く兎へはやっぱりコウノトリ

羽曳野市 永田 章 司

桜島噴煙元氣ハイポーズ
Eメール出来ぬ生活誇ってる
すんなりと話が済んで批判され
経済の指標バブルに迫るけど

東大阪市 今岡 貞人

四捨五入捨てた根っこに花が咲く
年寄りには年輪生かす知恵がある
溜息一つ今日の空気を抜いておく
年金がしあわせごっこしています

東大阪市 米田 水昇

高いもの銀座のコーヒ味も値も
宝くじ混んでる店はあたるかな
汗散らし鹿に負けてる人力車
長い傘杖とし歩む梅雨じめり

東大阪市 佐々木 満作

年金法牛歩むなしく押し切られ
少子化で年金負担のしかかる
致命的欠陥隠しのカーメーカー
優先席いつも若者占めている

枚方市 二宮 紫鳳

病む母へ祈りをたくすもみじの手
電池切れしたか足腰さしみ出す
かたつむり君の歩みに癒される
紫陽花が一雨ごとに艶を増し

枚方市 大昇 隆 広

初恋の場面に意気地なしの僕
取り返しつかない事を世も重ね
枕辺に木の香買い置き里の夢
またあした夕日に染まる瀬戸の島

枚方市 小川 良吉

年金もバカの壁だね穴だらけ

愚かさを友と付き合う老いの坂

安物にまた目が移る貧乏性

たおやかなスローな時がほしい老い

藤井寺市 西村 栄一

肩で風切った背広も色がハゲ

風船の子を青空にとられそう

風鈴の音色話を途切れさせ

しみじみと飲めばぬるめの爛でいい

藤井寺市 俣野 登志子

ペンが無いちよつといい句ができたのに

先約があると言えないかすみ草

好きなものの好きなお味で少しだけ

優先席腰を浮かせて掛けてます

藤井寺市 増井 ヨシ枝

いつからか一番風呂に入る羽目

目も耳も覆いたくなる事ばかり

紫陽花に溶けてしまった私色

散歩道昔懐かし遊び草

藤井寺市 鈴木 いさお

カナヅチのままじゃ三途も渡れない

老いかしらの頃腹も立ちません

どん底でやっつと見つけた生きる道

古いねと言われてみればさもあらん

藤井寺市 吉田 喜代子

無人駅おつかれさまと植木鉢

ぬか床が賑やかになる夏を待つ

ガーデニング今朝はゆっくり雨の音

ふる里の海は大きな父の背な

藤井寺市 伊藤 アヤ子

雨や風天地の恵み生きている

老いてなお愛の深さに泣けてくる

七十路今青春の真最中

あじさいが笑っているよ雨上り

箕面市 寺井 柳童

高松塚キトラと競う四神像

魔羅石の前に弁当ツーションット

二面石心のうちを覗かれる

古代人ヘルシー志向飛鳥鍋

箕面市 中山 春代

お日さまとたつぷり握手したシート

ほつべたの涙を見せに祖母のひざ

草むらに蛍数える久しぶり

ばあちゃんへ敬語の混じる十二歳

八尾市 鷺見 章

カレンダーめくれれば美女の絵に出合う

病むベッド思い出ばかり走馬灯

雨ふりに思うは兵の日の行動

亡き母を幼児のごとく涙して

八尾市 脇 俊子

自画像は夢の中では超美人
皴ひとつ歳相応の顔で生き
一日を上手に時を袋づめ
子が生まれ子から学んで親になる

八尾市 赤木 妙子

でも女恥ずかしいことたとある
脛撫でて親が息継ぐ縄のれん
幾歳月あなたわたし物語
履く靴に亡母の内股ぐせのあり

八尾市 田邊 浩三

定年後オイのトーンが弱くなり
少子化が家にもきたか孫抱けぬ
あっさりと許してくれた恋の風
大吉は二年経つても捨てられぬ

八尾市 田中 トシエ

雑草のような對話に花が咲き
方言の対話の中に嘘はない
ささやかな財産ドアーの鍵一つ
自己暗示プラス志向に舵をとる

八尾市 平川 幸枝

春惜しむ鳥が傾く潮干狩り
あっさりと以心伝心新茶汲む
一日の機嫌よろしき陽に和む
白い雲両手に抱いて湾めぐり

八尾市 中島 春江

おしゃべりは女の憩い缶ビール
逢いに行く気持の弾む老いてなお
アイステイー飲んで別れる雨の町
夏菜莢のあと味すぎし恋の味

八尾市 松葉 君江

大地踏む夢を抱いてる紙おむつ
一合の酒で浮く人沈む人
三つまで抱いてすりこむ親の愛
技術より土が命の茄子トマト

八尾市 笹倉 ひろし

百均で迫る地震へ備えする
青空に銀河へ続く白い路
高僧の論しを聞いてまた迷う
逃げ足が遅く病にタツチされ

八尾市 西川 義明

決めていくくせに相談だけしよる
あっさりとヘソクリ妻に召し捕られ
今チャンス一気呵成に走り出す
待望の初孫抱いた手の温み

八尾市 寺川 はじむ

食欲が若さ一緒に盛り付ける
九回のチャンス一打で甦る
謎謎が解けぬ人生だったのか
ジャンケンポン未だ終らない妻の愚痴

大阪府 畑中節子

動くとも見えず葉うらの蝸牛
忙しさ元気な証と当てにされ
お転婆の孫二人来て夏休み
夕闇に涼呼ぶ螢初夏の宴

大阪府 小栢 こそえ

しとしとと続けて降れば愚痴も出る
道ばたの名もない花に魅せられる
コーヒーを飲むと働く元気出る
へそ出して冷えないのかな衣替え

大阪府 高木道子

孫帰りハミングがでるおばあちゃん
梅雨晴れ間下着シャツも大はしやぎ
長電話熱帯魚に睨まれる
当たらないつもりじゃ買わぬ宝くじ

大阪府 神野 千恵子

だんだんと次のチャンスが遠くなる
天の川宇宙が急に近くなる
携帯の小さな窓しかない世界
何もないのが一番の贈り物

神戸市 両川 無限

不器用な男仕事の鬼だった
ノーと言う雑魚に注目しておこう
行く時も戻る時にもあった虹
青春っていい男の泣き笑い

神戸市 木村 忠義

老人の個性は生きてきた証し
悪者にされても言えぬことがある
健康という幸せを老いて知る
ウォーキング楽しくなつて雨の中

神戸市 田中 章子

丁シャツとジーパンで行くハネムーン
背のびした分だけ肩に荷がかかる
万年筆背中がぴんと伸びてくる
それからをうまくしゃべらす聞き上手

尼崎市 古川 正子

梅雨晴れ間南天の花天を指す
花菖蒲の押絵額吊り友想う
若き日の楽しい事を覚えてる
額紫陽花仏前に供え一人ごと

尼崎市 桑原 東園

厚顔も凶星を指され喘ぎだす
胸に描く進路外れて行く余生
射程距離けれども今日も射てくれぬ
お出迎え金魚のいない金魚鉢

伊丹市 延寿庵 野鶴

ほろ酔えば張つてた意地もすぐに消え
躓いてしつかり学ぶ処世術
うつむいて黙秘を通すロダン像
出土する埴輪が語る哀と愛

三田市 開子

さつき展花の向こうに苦勞みえ
へそくりを少しのくじで殖やそうと
サブリメント効果信じて飲んでいる
真珠婚うさぎと亀で持ちました

三田市 石原 歳子

脅しても逃げない鳩に馬鹿にされ
買物も回り道する万歩計
旅慣れず何度も切符みる不安
予想より速いテンポできたチャンス

三田市 堀 正和

ホテル見て何と鳴くのと尋ねられ
よく喋る男はいない相撲とり
言訳はしません僕は野武士です
年金でバブルのつげを埋めてます

西宮市 片山 忠

山登りここでも急ぐ人と会う
メーデーに出かけた事のない負目
愛されて夫は鎖に繋がれる
旅行先喧嘩の種を探すなよ

西脇市 七反田 順子

大阪は元気な街や足が向く
模倣地図今日も元気に歩いてる
未来へと夢を育む好奇心
満月にロマンをもらい旅仕度

兵庫県 安達 厚

風薫る妻の絵筆に口を出す
立上り膝をなだめて歩き出す
雨上り野菜が僕を待っている
友でいるために聞けないこともある

兵庫県 岩本 美緒子

指先の香り愛しむ山椒つみ
筆一本遊ばす空は梅雨の入り
通らねば進まぬ急所一つある
生き様の彩それなりに染めて老い

兵庫県 黒崎 美紗子

肩よせて観潮見事のぞきこむ
観劇の余韻が残るバスの中
雨うけて伸びる緑の元気よさ
家の中の関心やはり台所

奈良市 田中 賢治

年金で野党牛歩の劇を見せ
ワープロで打った真意の重きこと
平和ボケ国益守る根っこ減り
夏休み笑顔ふたりが里の駅

奈良市 矢野 良一

人生訓無言で語る祖父の皺
念のため妻にも保険掛けておく
御堂筋はじめて恋を知った街
ゼンマイはそつと巻いてと古時計

生駒市 小西 稔

特産を求めて寄つた道の駅

やり方にやつと気がつく日のあせり

何事も終りが大事子に示す

人生の終りに学ぶ人ごころ

橿原市 藤永 実千代

あれこれと批評しつつも断れず

後日談どんな批評も言い易し

晴天が続いた後の旅支度

最後には大辞典にてけりをつけ

奈良県 南海 美知夫

テレビ消し寝床へ孤独つれて入る

やせ我慢夏やせこれも長寿法

夏やせて老骨に鞭と胸を張る

一難が去って一難積んで生き

奈良県 江波 正純

あつさりと歳のせいだと医者と言ひ

わが子には大志抱けといいにくい

ボクに住む天邪鬼には逆らえぬ

お互いにヨイショしあつて生きている

和歌山市 根田 よしこ

嫁姑こころ読み合う難しさ

孫できてびつくりわたしお婆ちゃん

苦労性あしたの分も仕事する

暇できて明日の分まで寝てしまう

和歌山市 喜田 准一

すぐに下駄預ける癖が直らない

片付けの途中で思い出を拾う

固執する主張が視野を狭くする

芯のない意見左右にぶれて来る

和歌山市 失川 侃太

勝者なり露天風呂には僕一人

コーヒーが沸くのを待っている和解

手をつなぎ下校してたと密告者

たくあんがまた繋がっている不仲

和歌山県 森下 順子

苦い水飲まされたのにじき忘れ

不言実行思い通りに生きている

通過中です静かに妻の低気圧

似たところあつて笑えぬ人の癖

和歌山県 辻内 次根

酸欠が所々にある五体

本日の空晴れ渡り葱坊主

楽しみが浮かびどっこいしょと起きる

覗き穴他人のしぐさは見ないこと

和歌山県 村中 悦男

苦労して来たと楽しく語る妻

久しぶり選挙になれば来るおひと

梅雨晴れ間傘をいつしか杖にする

水田の月わたくしについて来る

鳥取市 山口 千代子

鳥取市 近藤 秋星

善人は悪人ほどに騒がれず
良い方に思い直して感謝する
フルムーン二番煎じも味がある
古傷を他人はわざと掘りたがる

鳥取市 西尾 敬之介

ハイポーズ言われがまんのかしやみ出る
バタバタとうちわあおいで魚焼く
泣きごとを精いっぱい俺が居る
死亡欄見て咽び泣く痴呆友

鳥取市 岡田 信恵

見栄張って祝儀はずんで火の車
足腰にもっと歩くと万歩計
老いてくる五体の油切れてくる
傷ついた心が痛む影法師

鳥取市 森 美智代

簡単に保険に入り吹っ切れぬ
寝る前の脳を静かに薄明かり
目の手術日本が見えるイラクの児
五輪聖火がだんだんアテネ近くする

鳥取市 谷岡 清子

あじさいが色そめ吾をなくさめる
風鈴も吊れぬマンション都市砂漠
生かされる年金あての今日の膳
逆境も神ぞ知る道喜寿の坂

カキツバタ故郷に名所一つ増え
小さい苗がやがて黄金の波を打つ
親が子の老後案じている年金
美人には違いないけど造花の美

鳥取市 横田 春名

思い出は螢火に似た火をともす
土日待ち長距離電話忙しい
ほどほどに思いはじめて歩も軽い
家族留守伸ばしたい羽根ひらかない

鳥取市 大坪 天涯

倅せになろう明日も良い天気
言葉などいらぬ絆が家にある
やっかいな意地で見栄張り捨て切れぬ
一本の傘には四人入れます

倉吉市 酒井 美美子

新婚のムードに壁が汗をかき
百名山本一冊で登りつめ
それでなあ あれでと言葉出て来ない
髪形を変えて気分がルンルンに

倉吉市 前田 喜美子

半額のチラシに腰が浮いてくる
半世紀嫁入り家具と友白髪
悪妻と呼ばれ続けて頼られて
五月晴れ心のボール弾み出す

境港市 中井虎尾

マジックが大風呂敷が口を出た
減量と食事を減らしつまま食い
地区のドン出るところ出ればまるで猫
荒波も絆で越える夫婦舟

米子市 小塩智加恵

医療費を使って今日も暮れました
作り所作深くかぶった夏帽子
明日の日に期待するから疲れ出す
初めての芋焼酎にもらう酔い

米子市 足立由美子

青空と孫にもらっている元氣
宇宙語の孫とただいま交信中
得手不得手みんな私の宝です
若さという魅力に勝てるものはない

米子市 猪森スミエ

議事堂の窓に光が届かない
何はともあれ約束通り来た燕
冬はいや夏は苦手と愚痴の種
剪定を終えた庭木の夏姿

米子市 池尾保子

周囲みな仏のような顔に見え
胃袋に富山のくすり効いてきた
雑草にまけじと今日も根くらべ
引き金をひいて私は一直線

鳥取県 山岡久枝

お月様覗いてくれる部屋に寝る
今のまま星の流れをかえないで
もんべはく土の匂いが染みたまま
両腕に感謝しながら鋏を持つ

鳥取県 平木公子

子の成長キャッチボールで教えられ
人並みに苦勞もして見えぬだけ
これからの事より今を良く生きる
これからも二人元氣のプラン練る

鳥取県 吉田弘子

四十年吐きたい本音まだ八分
ど忘れが約束破り後遺症
北の国秘密のベール透けて見え
全身を耳にしている情報マン

鳥取県 福西茶子

伽話笑話も少し混ぜて聞く(痴呆の母と)
二歩三歩引いて値踏みをされたらし
あの世まで胸にしまっていく埃
笑う日が来るから埃被つて

鳥取県 鈴木一弘

ストレスを掻きまぜているティータム
ストレスを缶コーヒーで冷やす午後
つつ走りついて来たのは風と影
隙間風ほほかむりして走り抜け

失敗も笑い話の旅日記

鳥取県 山岡 紀子

おばちゃん井戸端会議なんだろう

そわそわと五体が弾むいい天気

うれしいなあ今日も五体がよくしゃべる

鳥取県 毎田 信翁

百人が百様生きるあしからず

今はただ年金様に愛捧げ

薬にと頼る人生はかなくて

黒髪をさらりとといて青葉風

鳥取県 岡村 孝明

言葉では勝つても空し風が吹く

気がつけば傘寿の橋がすぐそこに

休耕を横目に伸びる稲嬉し

幾たびもビデオが旅を呼び戻す

鳥取県 竹信 照彦

五月雨のソナタに舞って梅雨の傘

軽すぎて使いすぎたか重い腕

勲章に死んでも縁のない男

まだともう使い行く日をいとおしむ

鳥取県 竹森 富久江

残暑からまだ噛み合わせ波がしら

嫁がせて静かに風いだ母の海

曳き合つて輝きだしてきた余生

頬杖と明日を静かに描写する

松江市 山根 邦代

ツバメ来るかわらぬ声をお土産に

花ひとつ咲けば話の輪も開く

満天の星が私を迷わせる

どう見ても丸い指先親ゆずり

松江市 松浦 登志子

メールではすらすら言える私です

美味しいね言葉嬉しい小梅漬け

このままで平穏なまま日が沈む

雨の日に引越しをした蝸牛

安来市 原 煩惱児

煩惱が納め切れない地蔵めぐり

几帳面で正直過ぎる男の値

ふと浮かぶ一句遊ばせ灯を点ける

人道と虐待お互い様ですな

出雲市 川島 和歌子

触れる手の堅い絆の盲導犬

空高く宇宙に伸びるホームラン

ほどほどの距離でつき合う好きな友

瞑想に蛙一入閤を裂く

出雲市 加藤 スズコ

難聴を支えて運ぶ絵の便り

雨しとど引き出し整理時忘れ

春雨に傘をさす人ささぬ人

耐えた日々越えて思い出読むゆとり

(荒木英子・菅田かつ子・福岡博利・武島ちよえの四氏は54頁に掲載)

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 西山 幸

束ね髪きょうも私とのいくさ
自画像よもつと背伸びをしてこらん
種のない葡萄も明日を考えろ

和歌山市 木本 朱夏

森は瘦せ母の便りを待ち侘びる
火の消えた螢を抱いて梅雨籠り

高槻市 田中千孝子

メビウスの帯で尻尾は掴ませぬ
酷評をくれてほんとの友になり

奈良県 渡辺 富子

血の匂う活字と朝のカフェオーレ
目減りしたプライドですがしかと持つ

弘前市 斉藤 荔

卵割る脱力感の真ん中で
葉桜の下で墓地購う話など

海南市 三宅 保州

殺し文句早く言わねば陽が沈む
心の底までは砕けぬシュレッダー

松原市 小池しげお

いさぎよい引き際だった桜の木
石の上三年以上経ちました

高橋 岳水

かばかりの生命を燃やす蟬の声
傷痕をさすると過去が疼き出す

富田林市 池 森子

豊かさを絞る千枚田の案山子
どこまでの未練か回廊がつづく

藤井寺市 太田扶美代

走り梅雨花もわたしも不安定
逆縁の庭です藤が狂い咲く

弘前市 高瀬 霜石

じゃんけんぼん あいこで介護するさるる
冬までは持たぬといわれた人の夏

東京都 やまぐち珠美

ガラスの知恵の輪解けぬほど煌めく
まぶたから滴らせて描いた砂絵

四條畷市 吉岡 修

オブラートに包んだ鞭が空をさるる
ヘッドホーンわわしい音が洩れてくる

藤井寺市 高田美代子

攫われたのは世間知らずのサクランボ
雨予報さよのわたしが湿つばい

西宮市 西口いわゑ

一族が集う同じ形の目鼻たち
封印をしたはずなのに騒がしい

尼崎市 春城武庫坊

寝屋川市 江口 度

花を盗んで花の心に近づけぬ
二度童子 母の乳房へ辿り着く

東京都 後藤 早智

蛙鳴くしばらく夢を見ていよう
さよならの泪の乾く風みどり

弘前市 相馬 銀波

芯丸くなるまで書けば済む事だ
季は回るかんかん照りの八月忌

西宮市 牧瀬富喜子

ホーホタル私の恋に火が点いた
泣いて勝つ愛を磨いているんです

愛媛県 中居 善信

念ずれば女人高野で子に会える
もう秋の絵を描きだした赤とんぼ

鳥取県 土橋 螢

八尾市 村上ミツ子

見えて来た出口無情な風が吹く
赤富士に思わず合掌する美空

和歌山市 桜井 千秀

虐待の虐という字の書きにくさ
道化師の疲れた仮面剥ぎ捨てる

米子市 林 瑞枝

やがてくるやがてを思う梅の種

松江市 三島 淞丘

弘前市 福士 慕情
閉店セール旗が寂しく立っている

大阪府 櫻庭 順風
寂寥迫り真昼とは思われず

大和高田市 鍛原 千里
人ひとり許してドラマ書き変える

和泉市 西岡 洛醉
終着の駅で拾った童歌

竹原市 正畑 半寛
手のひらの蛍と何を語ろうか

出雲市 園山多賀子
大猿の仲にもあった覗き窓

和歌山市 武本 碧
根回しと知らずに飲んだ甘い水

鳥取市 徳田ひろこ
胸の正面を射抜いてくる

鳥取県 西原 艶子
君恋し幾たび生まれ変わろうと

出雲市 石倉美佐子
言訳も聞かずに人形処刑され

鳥取市 夏目 一粋
亀の歩のように野心は遠ざかる

唐津市 井上 勝視
つつがなく暮れて何やら虚脱感

唐津市 市丸 晴翠
改革の中味をルビで読み替える

大和郡山市 坊農 柳弘
フィクションを重ね自分史を語る

大阪市 神夏磯典子
十人を絞った中に入ってる

鳥取市 録沢 風花
平凡なドラマを神へ感謝する

大阪市 小泉ひさ乃
再会へ過去の結び縫い合わせる

松江市 川本 畔
反応の早い母に叱られる

京都市 都倉 求芽
食べ終えて同じドラマの舟に乗る

豊中市 櫻谷 郁子
深追いをしたばつかりに傷だらけ

尼崎市 春城 年代
喜びも悲しみも一本道で知りつくす

倉吉市 米田 幸子
こけむした話ほそほそ掘り起こす

堺市 志田 千代
柿一本残し我が家の本籍地

鳥取県 佐伯 やえ
人情にふれてかある靴をはく

鳥取県 土橋 睦子
白黒をつけて苦手な役が来る

吹田市 岩屋 美明
脱皮する蝶を見ていた変声期

黒石市 相馬 一花
銀行でうっかり掛けたサンクラス

豊中市 水野 黒兎
沈黙の重さに負ける咳払い

高知県 桑名 孝雄
細切れの睡眠プラスして生きる

寝屋川市 平松かすみ
原点はみんな同じ母の児で

富田林市 中井 アキ
さよならの視野に延々貨車の列

高槻市 乙倉 武史
足腰の部品を売れば儲かるか

八王子市 播本 充子
ジャガイモのような男に賭けている

今治市 塩路よしみ
人それぞれ音色の違う笛を吹く

唐津市 山口 高明
お淡いの声のひとつに男あり

松江市 安食 友子
奇妙だなひいひい泣いているてらい

吹田市 太田 昭
一度だけ苦しい嘘を母につく

海南市 谷口 義男
一汁一菜だけの昔と段違い

鳥取市 田村 邦昭
感情を包む袋を置き忘れ

羽曳野市 酒井 一壺
正確に妻が覚えている誓詞

羽曳野市 森下 一知
長過ぎた春に合鍵冷めている

米子市 白根 ふみ
雑巾を堅くしほっている梅雨に

京都府 丹後屋 肇
酔うほどにDNAの泣き上戸

唐津市 久保 正剣
外された梯子を捜す午前五時

大阪市 三浦千津子
瀬戸際で本音と違う答出る

倉敷市 小野 克枝
童女になった母の手を引く月あかり

鳥取市 福田 登美
人生の逆転劇は望めない

枚方市 海老池 洋
寂しさに巢箱の欲しい私の木

東かがわ市 木村あきら
矢が尽きた事は内緒にして置こう

和歌山市 榎原 公子
本来の私に逢うと怖じ気づく

弘前市 宮崎ヒサ子
しろくろと離れた色の中にいる

榎原市 安土 理恵
何気なく触れただけとは言わせない

大阪府 初山 隆盛
夏帽子去年の染みが喋りだす

神戸市 山田婦美子
善人を演じて肩が凝ってくる

鳥取県 吉田孔美子
母乳止まるからリストラ秘めたまま

和歌山市 福本 英子
泡を吹く私に届くEメール

尼崎市 内田美也子
人を追い追いかけられて都市砂漠

米子市 青戸 田鶴
フィナーレを飾る光がまぶしくて

和歌山市 柏原 夕胡
マニキュアぐらいしたっていいじゃない女

鳥取県 岩崎みさ江
初めてのシルバー席に畏まる

日立市 加藤 権悟
八月を語る炎天下の墓標

八尾市 高杉 千歩
お浄土の人へ電話がよくかかる

松原市 玉置 重人
することがないとは怖い一日だ

寝屋川市 森 茜
体調のよい日は弾む毬になる

高知市 小川てるみ
戦争が男勝りにさせた罪

茨木市 藤井 正雄
分からないままに末席拍手する

大阪市 川原 章久
手抜きするほども仕事の無い老後

出雲市 伊藤 玲子
紫が好きで待っている茄子の花

西予市 黒田 茂代
指パチンと弾き陽気な男だよ

倉吉市 野口 節子
いそいそと出かける先はお寺さん

岡山市 井上柳五郎
駄目だとは悟っていても奇跡待ち

三田市 堀 正和
上からの命令ですという理由

和歌山市 田中 みね
夜な夜なの夢に出て来るのは貴方

倉吉市 牧野 芳光
仰向けば私だけの天がある

和泉市 横山 捷也
冗談が通じた妻の回復期

米子市 足立由美子
あれ以来山の虜になったまま

シドニー 坂上のり子
格蘭の香ほんのり愛にひたつた日

大阪市 古今立堂蕉子
ダイエツトしてる私の預金帳

泉佐野市 稲葉 洋
俺の名を敵は俺よりうまく書き

西宮市 坪井 孝一
僕だけのポケットひとつ持っている

東京都 清原 悦子
のり巻きに今日の幸せ巻いておく

三田市 北野 哲男
上々吉 遂に公営墓地当たる

鳥取市 岸本 宏章
やりくりをしても義理は欠かさない

鳥取県 上田 俊路
網の目を洩れる小者は見逃さう

富田林市 大橋 鐘造
も一人の私を探す冬の街

西宮市 門谷たず子
流されてわたしひとり海に出る

岸和田市 土橋 房枝
年金で生きる余生の冬ながし

八尾市 生嶋ますみ
預金はないが夢はいっぱい溜めている

大阪市 小谷 集一
マイペース後ろ指など気にしない

八尾市 吉村 一風
聞きながら黙って友のビール酌く

第16回兵庫のまつり・ふれあいの祭典

川柳祭

題と選者(4名共選・各題1句)

「菓 子」泉 比呂史・卜部 晴美

「守 る」小松原爽介・福島 直球

「城」平山 繁夫・赤井 花城

佐藤寿美子・長島 敏子

「城」平山 繁夫・赤井 花城

佐藤寿美子・長島 敏子

応募料 一〇〇〇円(小為替同封)

応募方法 所定の用紙、または400字詰原稿

用紙の右半分に〒、住所、氏名(ふりがな)、

性別・TEL・大会への出欠を明記

作品集 入選作品と各応募者の作品1句を

掲載して全員に配布

応募先 〒670-0021姫路市山野井町84

姫路文学館内

川柳祭姫路市実行委員会事務局

電話0792-1931-82228

応募締切 8月20日(金)

大会 12月5日 10時30分から

姫路市「あいめつせホール」

詳細は後日掲載します

第2回おかやま県民文化祭協賛・岡山県川柳協会結成記念
久米南町制施行50周年記念・麻生路郎句碑建立55周年記念

第56回 西日本川柳大会

と き 9月4日(土)・17時路郎句碑献盃 18時川柳祭
9月5日(日) 川柳大会 9:00開場 11:30投句締切 13:00開会

と ころ 岡山県久米郡久米南町下弓削 久米南町文化センター2F

第 1 部 投句締め切り 7月末日(当日消印有効)

「酒」橘高 薫風選(川柳塔社)

「羽ばたく」小松原爽介選(時の川柳社)

「年輪」梶川雄次郎選(番傘川柳本社)

○応募方法 各題毎に、はがき大の用紙に2句以内を明記し、氏名・雅号も裏面に
それぞれに記入のこと。会費1,000円(郵便小為替)を同封のこと。

○投句先 〒709-3614 岡山県久米郡久米南町下弓削
弓削川柳社 西日本川柳大会係 宛

第 2 部 大会当日11時30分締め切り

「一 つ」岡田 千茶選(県川協副会長・川柳塾)

「結 ぶ」土居 哲秋選(県川協副会長・津山番傘川柳会)

「主 張」多田あやこ選(県川協副会長・川柳石楠花会)

「曲 り 角」石部 明選(県川協研修部長・和気川柳社)

特別課題(当日発表) 恒弘 衛山選(県川協専務理事・弓削川柳社)

○参加費 2,000円(昼食・発表誌呈)

○表彰 1部・2部合点3位まで。1部総合5位まで、2部総合10位まで(合点入賞者を除く)

○川柳祭(前夜祭) 町内各団体の出店と出し物で、町民とともに楽しみ頂きます。

○宿泊 8月10日までに弓削川柳社宛

○主催 弓削川柳社

○後援 岡山県・岡山県議会・岡山県教育委員会・久米南町ほか

旅あれこれ



(順不同)

おれ流の旅を旅して半世紀

早川 棲世

本が好きで、本屋さんを見れば立ち寄りま
す。まったくの乱読、手あたり次第で、好み
とか目的とか系統といったものがありません。
旅も乱旅または濫旅、たとえばウイーンの
オペラ座にいた半月後に、ウランバートルで
旭鷲山と馬乳酒を飲み、さらにその一月半後
には紅葉の乳頭温泉にいたりしました。川柳
だって自己流ですが、旅と同じ。ともに通算
では五十年を越えますが、実力は華道の位で
やっと中伝、まだまだ奥伝には遠いのです。

国内の旅は、まず到着した空港でレンタカ

ーを借り、あらかじめ県事務所などで頂いた
イラスト入りの簡単な地図を手に、タツタカ
タツタカ時間があるだけ走り回ります。乱暴
な限りですが、それでも同好者があり、いく
つものグループができました。行先によって、
コースに選択肢が少ないときは、旅行社のツ
アーを利用します。安いからです。

召集令状がくる直前に戦争が終ったとい
う世代で、その頃は日本中が旅どころでなか
たのですが、それでも一生のうちには、白川
郷の合掌集落を見たいというのが夢でした。
旅行ブームの前から旅にこり始め、当時は日
曜だけが休みだったので、連休を待ちかね、
S Lの通路に新聞紙を敷いて寝るといった夜
行車で出かけていました。だから旅のアルバ
ムは二百数十冊、思い出話もいっぱいです。

今はさすがに回数も減りましたが、昨夏は
別府から九重、阿蘇、車の中にタオルをぶら
下げ、寒の地獄やずすめの湯、ラムネ温泉な
どなど、このあたりの多種多様な温泉を、一
日十湯近く、四日間もはしこして回りました。
続いて秋には、病氣回復した先輩の足慣らし
に、十津川、熊野を一つ走り三日。さらにこ
の年頭、福井の大学を退官する友人を訪問、
一緒に吹雪をついて飛騨、信州へ足を伸ばし、
雪の合掌村や幻想的な氷点下の森を訪ね、五
月は大山登山。その間にお遍路と唐津の記念
句会。これからも川柳を友に、旅から旅へ、
旅を旅する人生を続けたいと思っています。

パンダに会う旅

高橋 岳水

旅は、まだ見ぬ土地への憧憬だったり、心
の癒しだったり、明日へのカロリー源になる
といった色々な側面があり、おしなべて人は
旅に憧れる。

仕事にかまけて、何一つ父親らしい事をし
た記憶に乏しいのであるが、たった一度家族
旅行をしたことがある。たしか昭和48年の春

だったと思う。長男が3年生で、次男が幼稚園の年長組であった。私も、学芸会参加という大義名分のもと、貴重な休暇を貰ったの旅行であった。

前年、「列島改造論」を引っさげて登場した田中角栄首相が日中国交正常化を果たし、その記念として中国からジャイアントパンダ2頭が贈られた。一般公開の初日には一万余千人の見物客があったという。そのカンカンとランランに会うのが、今回の旅の大きな目的でもあった。長蛇の列に押されて、一瞥出来た自信の無い初対面であった。はとバスによる東京観光では、羽田空港で目の当たりにしたジャンボ機のエンジン音にびっくりする子等であった。

次の目的地京都へは東海道新幹線を利用した。妻と子等にとっては初体験であったし、速さと快適さに、お互い眼を見張りました。京都に住まいされている知人の歓待と案内により、思い出深い旅行となりました。経済的には不本意なものであったが、親子水入らずの旅が出来た充足感を抱き帰路につきました。

上野駅での乗車時刻に間があったので、コインロッカーに荷物を入れて、その辺を散策

して戻って見たところ、妻のボストンバッグが盗難にあっていたのである。合鍵のコピーによる犯罪らしかった。楽しかるべき旅が、なんとも悔しく虚しいものになったのです。雑踏の死角に潜み落とす穴 岳水

ハネムーンの思い出

田中みね

忘れもしないあはれは、昭和四十年一月三日結婚式を挙げたその日に、私たち夫婦は富士五湖を主としたハネムーンへ。心はまさにバラ色の第二の人生のスタートを切ったのだが。夫は相当見栄を張ったようで一番値段の高い「蓬莱コース」とやらを予約していた。第一日は富士吉田市に在るホテルの「マウント富士」に宿泊した。そこに今回の悲劇が待っていたようとは、誰が予測できたでありましょう。

着いて間もなく係りの人が見え、丁寧な挨拶を受けた後、「夜のお食事は洋食それとも和食のどちらになさいますか」の問い掛けに夫は間髪入れず「洋食」と答えた。二人の頭の中には当然ナイフ、フォークのみと思って

いたからである。

やがて待ちに待った食事の時間となりテーブルに案内された途端、私の目は点じとなった。何これは？得体の知れない小道具がずらり、こんなはずではなかったぞ……。一瞬にして不安に陥っている所へ、かつて見たことも食べたこともない豪華な料理が運ばれてきた。

しかし一体全体どれをどういう風に食べた方がいいのか、おろおろしているうちに「お下げしてよろしいですか？」とほとんど手付かずのままのご馳走を見送る辛さ。出てくるものは冷汗、脂汗、おまけにナイフを床に落として慌てて拾おうとしたものなら、ボーイさんが素つ飛んで来て笑顔で新しいものと取り替えてくれる。

もう頭の中はこの地獄のような所から一時も早く抜け出したい。それにしても田舎者と見抜いたのなら「よろしければ」とお箸の一つでも持って来てー私は心の中で叫んでいた。どれほどの時が経ったであろうか、係りの人が「以上でお料理の方は終わりでございます。後はデザートとなりますので」そのひと言が神の声に聞こえた。

最後のチャンスとはばかりに貪るようにデザートを平らげ自分たちの部屋に戻った。解放

された安堵感に浸るまもなく、急に二人は空
腹感に襲われ空しさがこみ上げて来た。ひも
じいとはこのことか……。このようにして記念
すべき夫婦の夜は更けていったのであります。

娘の結婚式

前 たもつ

娘の結婚式を兼ねて、ハワイへ初めての海
外旅行をした。

平成十六年五月十六日（日本時間十七日）
お昼前にホノルルに着く。

四泊するホテルはワイキキの浜を臨む「ハ
レクラニ」。ハワイ語で「天国にふさわしい
館」の意味らしい。ネーミングはまんざら外
れていないロビー、中庭の佇まいである。

三階のテラスに立つとワイキキの海が目前
に広がり、真下に蘭の花のモザイクをあしら
ったプールの青さはなんとも美しい。早速、
椅子にもたれて爽やかな空気を満喫する。

挙式は翌日の午後からリムジンに迎えら
れ、セントアンドリュース教会へ。娘が気に
入ったというステンドグラスの映える格調高
い構えである。

私にとつて旅行のメインであるバージンロ
ードはアベマリアの独唱が響く中、無事に終
えることができた。

結婚ラッシュで大忙しにもかかわらず、牧
師の心からの祝福を受ける。英語は解らない
が気持ち十分伝わってくる。式が終わわり牧
師の「サンキュー、アロハ、ありがとう」の
言葉はとても印象的であった。

結婚式の余韻そのまま、新婚夫婦の招きで
五つ星レストランのフランス料理をいただく。
夜のワイキキ浜、中庭のハワイアンの演
奏の光景がまだ残っている。

大役を終えおじゃま虫四人（花婿・花嫁の
双方の両親、ブーゲンビリア、ハイビスカス
などが年中咲くハワイで二日間羽根をのばす。
サンセットクルーズで太平洋に沈む夕陽、
宝石をちりばめたような夜景の美しさに酔
い、大きなロブスターを賞味したディナーは
忘れられない。

またダイヤモンドヘッドからの雄大な海
と、ヌアヌ・バリからのオアフ島東海岸の絶
景は言葉では言い尽くせない。

娘らにおんぶに抱っここの旅行であったが、
生涯忘れられない海外旅行となるであろう。
ワイキキへ水着持たずに慌て者 たもつ

外秩父七峰縦走記

小野 旬多留

ハイキング大会というから大した事はある
めいと思つたのが間違いだった。横浜の我が
家が一番電車で現地小川町駅集合。主催が鉄
道会社なので駅前には俄飲食店が並び派手な
お祭り気分を盛り上げていた。低学年の親子
連れ、会社ぐるみ、学生グループや、私如き
一人参加等々カラフルな出で立ちである。順
次第一関門の官の倉山へ向かった。

新緑の山々に囲まれ景色に見とれ、草花に
目をやりゆつくりべちゃべちゃ歩く楽しさを
味わう、これが理想かもしれぬ。しかし今度
は峰であり山である。私は眼が悪いから転ぶ
まいとひたすら足元を見て時折上を見てゼイ
ゼイ肩で息をしながらやと官の倉の中継地
にたどり着いた。割り印を押ししてもらい「ま
だこれからが本番」の係員の声はいささか酷
先を考えれば中継地のビールも先送り。とに
かく登り、下りねばならぬ。簡単に考えてい
た若者達の悲鳴、外人女性の愚痴……。誰もみ
んなハイキング感覚の落とし穴だ。

しかし彼等と違いが下りにあつた。登りでは疲労困憊している足で下りでは上体(肥満體)を支えなければならず。關節の痛さに耐え登りと同じゆつくりと後から来る者に道をどんどん譲り、やつとこゝさ平地に到着。

休んだ時に聞いたのは鶯の声かな。山々は緑だった。水筒の水もとうになくなり地元農家から貰ひ受けた井戸の水の美味しかったこと長い孤独な一日だった。

ウォーキング一年ごとに増す弱氣 句多留
二〇〇四年四月十八日(快晴)官の倉山五キロ。笠山十六、五キロ。完歩せり。

私の旅

小川 てるみ

年に一―二回、旅行することになっている。主婦業をしていると、時々息抜きがしたくない。旅先の歴史に触れて、古の佇まいに思いを馳せる。また美しい景色に心が和み、風の言葉にも耳を傾ける。色々旅の魅力は尽きないが、何んといつても女性には、上げ膳、据え膳は旅の醍醐味だろう。

退職した数年は、友達とよくツアーを楽しむ

んだ。それも年を経るごとに、孫の世話、老親の介護等に手を取られ、泊付きの旅行が難しくなつて来た。そこで夫を誘つての小旅行になる。幸い全国各地に、元勤めていた会社の保養所や、宿泊所があるのでよく利用をさせて貰う。宿泊料金が安い分、食事を張り込んで、一般よりずい分お安いようだ。年金生活者にとっては、大変ありがたい。

夫婦での旅は、ツアーより専らマイカーの方が多し。車は一応ツーリング仕様で、長距離に向いているが、カーナビが付いていない、九年目のセコハンである。そこで私が地図を片手に、カーナビの役目を担当する。ところが居眠りをしたり、間違えたりするから、さあ大変。名古屋では高速に乗り損い、ある時は北海道で左右反対になり、とうとう喧嘩になつてしまった。しかし、道は行き止りではない。多少のロスがあつても、目的地にちゃんと辿り着く、こういつたところは、人生の旅路と同じである。紆余曲折があつたにせよ、行き着く先は所詮同じである。

こんな事もあつた。数年前になるが、鳥取砂丘や大山、花回廊を巡り、最後に秀峰雪の大山をカメラに収めようと、シャッターを切るうとした瞬間、足をすべらし足首に激痛が

走つた。骨折である。こうなるとルンルンの旅が奈落の底へと一転する。

人生も一寸先は闇である。終りよければすべて良しと言うが、そうそううまく行かないのが世の常であらうか…。

未知の国ミャンマー

瀧本 きよし

バガン空港を出て間もなく、真つ青な空の下に聳え立つパゴダ群が目の前に現れる。平原には、大小様々なパゴダがシネラマ状に広がりが林立している。素朴な姿で自然の中に何百年も立ち続けたパゴダである。十一世紀から十三世紀にかけて栄えたバガン王国の都、世界三大仏教遺跡のひとつで、広大な大地に点在する二千余りのパゴダ群れ。その眺めは圧巻であり、驚きであり、感嘆そのものであつた。

マンダレーの東南、シャン高原のインレー湖は、南北に細長い。縦一列五人が前を向いて座る小船が矢のように進む。湖上に浮かぶ浮き畑には、野菜が育ちトマトが実をつけている。細長いカヌーの先端に片足で立ち、も

う片方の足で權を操る独特の漕法で魚を捕っている。こうすると両手が使えて、漁がし易いのだ。よくもあんな格好が出来るものだと感嘆する。浮き畑の近くには、インダー族が住む水上の家が点々と続いている。

サガインは、ミャンマーの古都マンダレーとイラワジ河を挟んだ対岸にある。日本人には忘れることが出来ない町である。

第二次大戦、ビルマで戦病死した日本軍人を弔うために「日本バゴダ」がサガインヒル山頂に建てられている。その壁面に、戦病死者の氏名が刻み込まれている。同行者がご親戚の方の名前を偶然に見、感慨一入の場に遭遇する。遠いビルマの地で、祖国のために命を捧げた方々に、改めてご冥福を祈った。

現在のミャンマーは、決して豊かな国とは言えない。子供たちは学校に行かず、みやげ物を買って、家計を助けている。人々の暮らしは豊かではないが、残されている遺跡や建物自然は、大変豊かで素晴らしいものが多い。すべての人々が豊かに暮らしやすい国にするため、政府は勢力争いを止めるべきである。逸早く教育に力を入れることを望むと共に、物心両面で豊かな国になるよう祈って、ヤングン空港を飛び立った。

川柳ひとり旅

松尾和香

旅好きの私にとって川柳の句会巡りは大変楽しみな旅になって参りました。毎月の柳誌を見ながら次はどこへ行こうかと、作句より先に行き先を選ぶことに生きがいを感じています。川柳を始めて間もない頃から北海道へは憧れていました。先輩の柳友に伺うと「北海道は作風も違う」と教えられました。私は川柳より旅を楽しむことに致しました。

稚内市で大会があると知り、事前投句をして申し込み致しました。関西から稚内まで直通便は一日一便だけとのこと、七月の夏休みに入る頃なので早目に確保致しておきました。一人稚内空港へ着いて出口の方へ行きかけますと、宗谷川柳社の旗を持って主幹の高津戸明氏が出迎えて下さいました。私は他の人達も一緒だと思つたのですが、なんと私一人でした。本当に親切に驚きました。

初対面のお方の車に乗せて頂きホテルへ、暮れなすむ北の果てへと走りました。車中、和歌山県新宮市の句会へお出でになられたことや、川上大輪先生に南紀を案内して頂いた

とのお話をされて、私も南紀出身なので受け答え出来ホツとしました。

前夜祭では道外からの参加者として山口県の五名の方と前へ呼ばれて、宗谷岬のシンボルの記念品を頂きました。このように句会前に心暖まる歓迎の雰囲気に出合いました。初めての句会の場もこのように楽しい旅になって夢が広がります。

川柳を学ぶこと、それは私にとって生きがいです。この先川柳と二人三脚で夢に向かつてひとり旅を続けます。柳友の皆様との出会いに感謝しています。

青春18切符の旅

藤田泰子

JRから春、夏、冬に「青春18切符」が売り出され、一日中、普通と快速を乗り回して二千三百円、何回も途中下車ができる。

私はこの切符を使つての日帰り旅行がとても気に入っている。海が好きで、海を見たくて仕方ない時、大阪駅から姫路行きの快速に乗り左側の座席に座る。須磨から舞子、明石大橋、水平線を車窓から楽しみ姫路へ。

在来線の山陽線に乗り換え、岡山からは高松行きのマリンライナー（特急だが快速として利用できる）で四国大橋を渡る。車窓から海を眺めながら瀬戸内海を渡り切ると坂出、車内アナウンスの乗り換え案内を聞く。琴平で降りて金毘羅歌舞伎を見てみたいなどと、阿波池田から大歩危小歩危のトロッコに乗ってみたいなあとか夢が膨らむ。

朝七時に家を出ると高松にはお昼前に着く。琵琶湖を一周した時に、岐阜から来たという青春切符仲間から教えてもらったうどん屋で昼食、駅の観光案内では歩いて栗林公園まではすぐ。だが二千三百円を目いっぱい利用、電車で栗林公園へ。

乗客の讃岐弁が耳に入ってくる。すっかり遠くへ来た感じ。父が観音寺の出身だったので、讃岐弁を聞くも毎年、夏休みに帰省、琴弾公園で遊んだ事を思い出す。栗林公園へも何度も連れてもらった。懐かしく散策、時計を見るとまだ二時半、もう一箇所何処かへ行けそう、そうだと前から一度行ってみたかった後楽園へ行ってみよう。岡山駅で帰りの電車の時刻表を見ると三時間ある。路線バスに乗り市内を観光しつつ後楽園へ、六十歳以上入園料無料、ラッキー。帰りは赤穂線に乗る。

海沿いを走る単線である。

日生駅の小豆島行きや松山行きの船の案内を横目に、気がつけばもう姫路。充実の春の一日であった。家に着いたのは九時三十分。「ああ、楽しかった。」私は終生青春18切符片手の旅でありたいと思っている。

川柳談義と温泉と

早川盛夫

川柳仲間が五人、桜の開花に誘われて旅心を掻き立てられ、一泊旅行へ出掛けることになった。五人は私の店の茶室に集まって川柳している「川柳茶はしら」のメンバー。全員が川柳塔への入会を決め、追々水煙抄への投句を約束した仲間である。

行き先は鳥取の名湯「三朝温泉」一泊ではちよつと遠い気がしないでもなかったが思い切って決行。天候も申し分のない晴天である。賑やかにバスに乗り込む。高速道路から眺める万博記念公園の桜の見事なこと。ドライブインでたこ焼きを買いふうふうして食べるのも旅の醍醐味。今宵の宿は民芸調で知られる

齊木別館。

宿に着くと早速かじか橋を渡って与謝野鉄幹、晶子の句碑をたずねる。散り急ぐ桜の花弁を背に三徳川のせせらぎを耳に恋谷橋まで温泉通りを一巡り。途中酒屋で地酒を試飲、旨い酒を手に入れ今宵の楽しみにする。とは言うものの実は主治医から酒を止められている身なのである。二か月ほど禁酒を守っていたがどうも我慢がなくなつて一口が二口とやつているうち、何時の間にかもとの酒量に戻つてしまったという訳である。酒を止めてまで長生きをしたくないと、利那的になつているのも事実である。

そんな訳で夜は蟹会席と地酒を堪能しながら川柳談義に花が咲いたのは言うまでもない。翌日は伯耆富士の名で知られる大山を車窓に眺めながら、米子市から境港を経て高麗人參と牡丹で知られる大根島へ、見事な由志園の回遊式庭園を楽しむ。途中園内で池を覗き込んでいて入れ歯を落としたと大騒ぎしている光景に出くわし、大笑いしたことであった。かくして二日間楽しい思い出と句材を胸に山陰を巡る桜の旅も無事終了、川柳仲間の絆を確かめ合うことと、自分の体調を再確認するためにもいい旅であった。

山登り是も旅なり

島 ひかる

昭和二十年小学校入学の年、大阪から富山の田舎に疎開した。私は四方を山に囲まれた土地で自由を育った。富山市内に就職、多感な青春時代を立山の雄姿を眺め、生きる糧にしていた。

生きて行く力となった山がある

平成元年、子育ても終り再び山に登り始めた。立山縦走、西穂高岳山頂では視界ゼロ！富士登山は満月が手に取れる位置に輝き、最後の鳥居を拍手で迎えられ通った時の達成感、日本一の山を実感した。

待望の薬師岳山開きに参加した時、山小屋で朱の大杯に岩魚の骨酒を回し飲みした美味しさ。明日の雪渓を登る力になった。

平成十二年、六十一歳。岩と雪の殿堂、剣岳への挑戦は緊張の連続！県外から夜行バスツアーで来て登って欲しくない山である。

平成十三年「アルプス交番勤務を命ずる」の著者、谷口凱夫（元富山県警察山岳警備隊長遭難救助三十年）の中老年登山教室に入り、

文部省登山研修所の岩登り三点確保の基本訓練、ロープの結び方、山の歩き方などを学び、テント泊で山登りから始まり、北アルプスの白馬、唐松岳縦走、南岳、中岳、大喰岳、槍ヶ岳、三千メートル以上の山を縦走。

槍の穂先で夕日の唄をしみじみと

二泊三日宇奈月樽平、下ノ廊下、黒四ダムを経て室堂、大日岳を縦走して、称名滝下へのルートはダイナミックだった。木曾駒、空木岳縦走、白峰三山縦走。さすが高山No.2の北岳は大きく手強かった。

白山も立山と同じ信仰の山、神神しさを感ずる。山で出合う高山植物や小鳥の囀り、肌に風を感じ雄大な景色が疲れた身も心も癒してくる。山小屋で夕食までの一時の団欒、山の話に余念がない。皆少年少女のように明日へ夢を追いながら。何時しか百高山を指す仲間入りをしている。

旅行雑感

板山 まみ子

4人の親をあちらの世界に送ってから、海外への旅行を楽しめるようになりました。ア

ルプス、ロッキーでトレッキングの醍醐味を味わい、ヒマラヤ行きを11月に控えていた9月11日、ニューヨークでの事件が発生してしまいました。ヒマラヤは方向がまるで違いますのに、このツアーは中止になってしまいました。

師走に入り、バスコン上で「パリ6日、4つ星ホテル朝食つき4泊、ホテル、空港送迎つき」勿論、日本、パリ往復航空券もついて10万円でおつりがくる超格安の物件を見つけてしまいました。大都会には興味がなかった私ですが、この物件を見逃すことができず、新年早々パリの空気を吸いに行ってみました。

ルーブル美術館ではアラブの陶器の陳列室で一時間以上も見とれるほど感銘を受けました。スルタンの食卓を飾ったかもしれない幾何学模様の大皿の美しさは、息をのむ思いでした。いつか中東に行ってみたい。こんな思っていた去年5月、ミラノ空港の免税店の前で、そばにいたアラブ人らしい身なりのいい一家の初老の紳士が、突如上着をぬいで床にひろげ、靴もぬいでイスラム教のお祈りを始めるではありませんか。びっくりして見とれること数分、お祈りがすんだ紳士はごく自然に身支度を整えると、また家族の輪に戻って

いきました。この事態に私の中東への興味はますます大きくなっていきました。そして去年12月イスタンブールへ陶器の専門家が同行するツアーで行くことになりました。出発の2週間まえテロリストがイスタンブールを標的にし、外務省が危険地域と判断して、またまたツアーは中止になってしまいました。

テロリストのために楽しみをしていた旅行が二度も中止になり、国際情勢と無関係でいられない私たちの現在の暮らしを痛感させられました。

鞆の数珠に守られて

恒松 町 紅

先日もJ.Rの団体旅行で、鹿児島市から指宿温泉一泊旅行に参加した。そして知覧の、特攻平和記念館を見学、特攻隊員やそれを見送る老母の銅像を見上げ、特攻隊員の遺書を読んだりして、同年兵時代を思い出して涙が止まらなかった。

旅行は川柳のお陰で川柳塔まつりの他にも、会員である郵政川柳の全国大会が毎年、各管内持ち回りで開催されるので、それに出席

席する事が多いし、加えて家内の素子の親戚が大津、名古屋や神奈川県あたりに居住しているの、何か事があれば出掛けねばならず、この四月にも神奈川県の伯母の一周忌で富士霊園まで旅をした。

郵政川柳の全国大会は、第10回目からは毎年のように参加して今年第46回で、北九州の門司で開催されるので、出席するつもりである。

今までも北は秋田の田沢湖、南は九州熊本、四国は松山あたりまで旅する機会があった。幸いに家内の方も車酔いする事もなく、また道中の無事を仏壇の仏に守ってもらおうと、旅行鞆の中には数珠を入れて出掛ける事になっている。お陰で今まで何事もなくて、無事に旅を終える事が出来ている。

あれはもうずいぶん前の事になるが、東京駅構内で、家内を待たせて置いて階段を降りてトイレに行き、用を済ませて階段を上がつたが、目印の柱を背にして待つていたはずの家内の姿が見えない。一瞬ドキッとしたが、何の事はない方向音痴で反対の階段を上がり目印の柱の裏側に出たのだった。

早く気付いて事なきを得たが、東京駅など雑踏の中ではぐれると大変な事になる。たと

えトイレでも入り口までは一緒に離れないことだと、つくづく感じて、今でも忘れられないニコマであった。

都忘れのやさしさに

川 本 晔

お座敷列車で一泊二日の姫路散策の旅をした。四号車は中年を過ぎた、つまり熟年女ばかり、カラオケと雑談に終始し酔いしれた。季節は若葉、車窓が美しかった。

姫路城へは登らず若葉の間から城の雄姿を拝見、割烹着のおば様のお抹茶と銘菓をいただきますながら、明るいおば様方の笑顔に触れ十分旅情に浸ることが出来た。楠の若葉風も嬉しかった。

この後ロープウェイ：深山の辛い山門への修行が待ち受けていた。「こんなことでへこたれてなるものか」と、痛む足に鞭打って夕暮れの山坂へ挑戦した。

青葉の香りが充満……いや若い生命の蒸し返るような匂いといつてよい。細かく分析すれば「カメ虫」の臭いもあった。

その昔、県立高校へ勤務した時、青春の体

奥にむせた日々が思い出された。久し振りの匂いであった。人も木も虫も自然界に生息するものの「生」の臭いなのだ。有り難いではないか。私は自分の「生」を確かに感じ、その風の中に身を委ねることにした。

おみくじを引き「中吉」にほくそ笑む。旅の宿はゆつくりと露天風呂に手足を伸ばす。四人一部屋の宿であったが、枕辺には心づくしのみやこわすれ一輪が「お疲れさま」のメモに添えられ、私たちを待っていた。

静かな山峡の旅の一夜であった。
旅まぐら都忘れのやさしさに 畔

中夕・セクシァリス

田中 千莞子

四十年前の十月十日、結婚式披露宴を終えた私たちは、駅まで見送ってくれた人々と一緒にぞろぞろとホームに向かっていました。

その階段の途中でアナウンスが聞こえ、発車のベルが鳴り響いて、花婿は「あれや」と言うなり、私の手を握って駆け出しました。ハイヒールの私はまるで引きずられるようについて走り、駅員が閉まりかけるドアを手で

押さえてくれて、どうにか乗ることは出来ました。

ところが、一斉に浴びる視線の中で、どこにも落ち着くべき席は無く、何故か夫もてきぱきとエスコートしてくれる気配がありません。車掌がやってきて、この新婚列車は全席予約制で満席とのこと。しかし乗ってしまったものは降ろすわけにもいかなかったのでしょう。車掌の粋な計らいで私たちは乗務員室に案内されました。箱のような空間に二応二人掛けの木の椅子がありました。

それまで戸惑っていた夫はほっとして「失敗がかえって良かった、個室や」と大いに機嫌でした。

ところが二つ目の失敗「お父さんのカメラですから絶対になくしてこないように、この子はなんでも忘れっぽい子ですから千枝子さんくれぐれも気をつけて下さいな」「はいわかりましたお母様」と、私がしつかり引き受けたその大事なカメラを、十国峠で三脚に載せたまま案の定置き忘れてしまったのです。その夜の宿で気がついてさすがに二人情気しました。幸いカメラはそのコースのバス会社に届いていて、次の旅館で無事に手元に戻りました。

熱海伊豆方面を巡る一週間のハネムーンが、楽しかったのかどうだったのか、多分何もかも一生懸命だったように思います。

慌てて一人で天国への階段を登ってしまった夫は「ちーごめん」と言いながら、私のために今度は間違いない特等席を取って待っていてくれると信じています。合掌

旅いろいろ

園山 多賀子

二十年前の昔に遡る。

主人と南九州を旅した。大東亜戦争の特攻隊の基地であった知覧を訪ねた。青春を国のために捧げて、若い命が飛び立った地だ。特攻隊員の遺品や関係資料が展示してある「知覧特攻平和会館」に入る。だが直ぐに、主人は顔を強張らせて出てしまった。外で待っていると言う。小柄だが図太い根性のある反面、感傷的でもある。戦禍の傷痕を見るに忍びなかったのだろう。私もころないまま、一巡して出た。桜は満開だった。桜の下で当時を追想する主人の姿に、私の胸も傷む。指宿へ回り、温泉で温まり、平常心を取り戻す。

そして、数年後。農協のツアーで、沖繩旅行が計画された。主人は知覚で懲りたのか、「お前だけ行ってこい」と言う。女連れが多いと聞いて、参加することにした。

空の旅だった。雲の上を翔ぶ爽快さもさることながら、着陸のために下降する時は恐怖心に駆られる。「ひめゆりの塔」では、青春を蔑ろにされた乙女を想い涙する。主人が沖繩を拒むのも分かるような気がした。だから、旅行から帰っても、ハイビスカスの赤、海の碧さをことさらに語るばかりだった。

気の滅入る旅ばかりではない。奈良の文化女子短大の夏期講座には、主人も十回以上参加した。私も二回ばかり、腰巾着として随行した。神社、仏閣、古墳、遺跡などをバスで回る。犬養教授の専門的で、かつユーモアを交えた説明が楽しかった。高市郡明日香村にある高松塚古墳、甘橙丘からの明日香の郷の展望は何回行っても、新しいファンタジーが湧いてくる。懐かしい思い出である。

旅が終わると、また次のそれを計画したのだが、主人は事前の予定もなしに、黄泉の旅に出たまま帰らない……。いま私には年一回、二泊の「川柳塔まつり」での趣味に生きる楽しい旅がある。

最後の旅行

出口 セツ子

幼い頃から旅行好きの父に連れられて、年に五、六回は温泉に行っていた。

結婚してからも義母を誘い、子供達の休みごとに旅行をした。結婚前は外国へ何カ月も一人旅を楽しんでいた主人が「昔やったら、そんな物見遊山な嫁はすぐ離婚やよ。母さんまで君の風習に染まっちゃった」と嘆く。

それが「留守番をしてないで、人生楽しんでなくっちゃ」と言う私に、義母もすっかり露天風呂好きになってしまった。普段は山に囲まれているので、海辺の旅館で船に乗るのが大好きである。高齢で歩くのが嫌な義母なので、いつも車で南は九州までだったが、飛行機で沖繩に行くことになった。

飛行機に乗る時エスカレーターに杖がひっかかり、長男が後ろで義母を支えたので義母は転ばなかったが、杖の持ち手の部分が折れてしまった。義母は杖がないと歩けないので、沖繩でレンタカーを借り、琉球村で杖を売っていないか一番に聞くと売ってないと言う。お店の人が「お困りでしょう」と杖を持ち

手の部分を何重にもビニールテープで巻いてくれその上をハンカチで包み、車椅子を観光に貸してくれ、長男と次男が交互に車椅子を押して見学をした。

各建物一般の入り口とは別に、どこでも車椅子用のスロープの入り口があり、義母と車椅子を押している息子だけ入り口で並んでいる人を横目に先に入り、職員用の部屋でお茶をご馳走になったり、守礼の門や各地で沖繩の人々の親切にすっかり感激していた。

翌年、義母が入院した時「沖繩は良かったな。もう一度行きたいな」と懐かしんでいたが、退院の決まった晩に容体が急変し帰らぬ人となった……。

お国訛を聞きながら

井上桂作

旅行けば駿河の道に茶の香り、偉大なるかな東海道……中略。当時最も人気のあった浪曲師広沢虎造の「清水次郎長伝」の一節です。これは相次ぐ戦争で旅行にもいけなかった母が、愛好していたレコードでした。

旅もできなかつた戦争も終わり、食料事情

もいくぶん好転した昭和二十八年、友人と二人で東京行きの「鈍行」に乗ったのが旅の始まりです。広辞苑では、旅とは住居を離れることで、必ずしも遠い土地に行くことに限らずと述べている。

当時大阪から東京の八重洲口まで十二時間かかりました。もちろん各駅停車でしたので駅毎に停まりましたが、駅の数はいくつあったのか忘れしました。早朝七時大阪駅を出発する。通勤・通学の時間帯を過ぎると、客足は次第に減ってきますが、替りにお年寄り子供連れのお客さんへ変わる。

大津を過ぎるころから客足は減り、ゆっくり外の景色を眺めながら座っていく。近江平野は、青い絨毯を敷いたような水田が続く。関ヶ原を過ぎると、すこし訛りのある「名古屋弁」のお客が入ってくる。「そうかなも」いくぶんトーンを下げる名古屋弁は優しく聞こえる。

さらに名古屋から岡崎を過ぎ浜名湖あたりになると、東京弁が次第にはばを利かす。静岡あたりの東京弁は、怒られているように感ずる。虎造の浪曲のとおり、駿河の国は茶畑が多い。

肝心の三国一の富士の山は、雲に隠れて見

えず、目も疲れて寝てしまふ。平塚あたりから通勤・通学のお客さんの乗り降りが多くなり、座席の客は度々変わる。座席と言えは当時の鈍行は、横になって寝ようにも椅子も板張り、背もたれも板で箱の上に座っているのと同じであった。

鎌倉を過ぎるころから殆ど市街地となり、外には目もくれず、友人との会話をたえて専ら読書に変わる。長い夏の日もようやく薄暗くなりかけたころ、丁度半日の旅も終わり七時東京駅に着く。

ルーブルの悪夢

富田 蘭水

定年退職以来、十数年海外へは年一度必ず出かけている。忘れもしない初めてのヨーロッパ旅行の時、私の胸に残る生涯の悲しい思い出がある。

イギリス、イタリア、スイス、フランスと愉快な長旅をして、最後にフランスのルーブル美術館を訪れた。

全教互の旅行であったので、研修の目的もあり期待と緊張をもって臨んだ。物凄い人で

ある。見物どころの騒ぎではない。美術の教科書に載っている代表的な絵画、彫刻を一目でも見んものと、心は高ぶり続けていた。

館内はカメラのフラッシュ禁止である。機械に弱い私はさすがに慌てた。その瞬間に妻を見失ってしまった。手を繋ぐことも出来ないほどの人込みであったが、悔やまれてきた。わからない。ここはパリである。周りは世界各国の人達で言葉が通じない。

慌てらうちに心細く全く暗黒の世界に突き落とされた。広すぎるルーブル美術館、日本と違う。昔はルーブル城であると後で知った。それでも歩き回って最後にやっと最愛の妻に逢えた時の喜び、地獄で仏、千天の慈雨であった。異国の美術館で命を縮めた時間であった。眼前のエッフェル塔も笑ったであろう。

以来ヨーロッパに行くたびに、ルーブルの悪夢を思い起こす。これが機縁になり反省し旅の充実、安泰をいろいろ考え出している。

迷子…いま考えるとおかしいがその時は必死であった。この日本語の意味も十分に体得できた。迷子対策を考えながら美術館に入ろうとは、夢にも思わなかった。いい大人が…すべて経験である。経験こそ次に生きる力になる。旅の収穫の中にはいろいろとあつ

て、初めて豊かなものを作り上げる。

旅の恥はかき捨て、かき捨てならぬ大人の迷子の恥ずかしい秘話。喜寿を迎え初めて明かす機会を得たことを感謝して止まない。

戦場に架ける橋

新家 完 司

「ドガドガドンドン、ドンドンガドン！」突然腹の底に響く巨大な音。振り向くと上流から大きなイカダ、というよりも舞台のようなもの。広さは六十畳ほどもあるうか、両端に野外コンサートで見かける大きなスピーカーボックスが二基。真ん中に十数人、どこの民族衣装か金魚のような裾をひらひらさせて踊っている。同行の友人TとKも、呆然。

ここは、バンコクの西北約百キロ、ミャンマーとの国境近くのカンチャナブリ。映画「戦場に架ける橋」で有名な鉄橋の上。川の名は映画では「クワイ川」となっていたが、実際はクウェー川。想像以上に大きな川で、列車が来ない時は鉄橋上を観光客がぞろぞろ。

Tは私が会社勤めをしていた時の同僚、現在、タイとの合弁会社の社長としてバンコク

郊外の工場に赴任中。Kも元同僚で大坂勤務。「俺がいる間に遊びに来ないか」というTからの誘いに、Kと閑空で落ち合いバンコクへ。運転手付き社長専用車で、珍道中しているところ。

にぎやかな舞台は、観光客の注目を浴びながら鉄橋の下を抜け、下流へ去っていった。鉄橋には数箇所、半畳ほどの待避所が突き出ていて、中ほどの一個所で青年が土産物を並べている。気に入った物を見つけたのか、TとKは立ち止まった。カタコトのタイ語と英語で交渉に入った二人を置いてぶらぶら。ほとんどの観光客は途中からUターンするが、鉄橋を渡って下の河原へ。ここにも土産物を売るテントが並んでいるが、客はばらばら。放し飼いのニワトリが餌をついばんでいる。適当に冷やかして、また鉄橋へ。

「値引き成功！」と二人が大満悦で抱えていたのは、蔓と籐を巧妙に編んで作ったオートバイの飾り物。タイには詳しいはずのTまで「これは珍品。ちょうど二個しかなかった。孫の土産や！」と、ニコニコしていたが、帰りに立ち寄った店先のダンボール箱に山と積まれていて、しかも、彼等が値引きした値段よりはるかに安かった。

誹風柳多留二四篇研究 69

粕谷長生・小栗清吾
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・橋本秀信

清 博美・佐藤要人

535 にくらしいものハ女のこんのたび 紀原

粕谷 直接の句意は、憎らしいほど紺足袋のよく似合う女だ、となるが……。一般に女は紺足袋を履かなかつたらしい。あえて女が履くと、「変なもの」と受け止められていた。それを紺足袋の似合う女としているのだから、特殊階級の女ではないか。根拠はないが、踊り子、三味線の女師匠などではないかという気がする。

山田 「(江戸)後期に至っては……ことに女性には白に限られた。そして男性も一般は礼装には白、旅行や歩行などには紺を使った」(江戸服飾史)とあるように、紺の足袋は主として男が用いた。その紺の足袋を女が履

いているとはどんな場面か。「憎らしいもの」の解釈にもよるが、私は男まさりの女で、それを文字通り憎たらしい奴めと非難している図ではないかと思うが……。あるいは次の例句のような女房でもあるか。

小栗 男が専らしくはくものを女がはいているのは氣にいらぬ。女らしくない、という解でよいように思うが。

女の時哥よりどふかにくらしい 四18
橋本 同右。女だてらに……という暗示がある。

清・佐藤 同。

536 生れたとつれるさ中カへよひに来ル

鉄炮

粕谷 無事に赤子が誕生したが、赤子の親父殿はのんびりと釣りをしている。その親父殿へ「生まれた」と使いが走るのである。

山田 そうではあるが、体系本『川柳狂歌』の頭注「差し潮の時の魚はよく釣れる。また、子どもが生れるのも、その時という」を利かさないと本句の面白味は半減する。

さし汐ハ一人引汐みんななき 七一33

小栗 山田説贊。さし潮Ⅱ出産の類句多数。

橋本 同。蛇足を加えれば、出産のときに男は不要と、ていよく追い出されたのかもしれない。

清 同。

佐藤 山田説贊。

537 出来たての顔でおひるを嫁ハくひ 豊好

粕谷 一般に女性の化粧は長いが、嫁は念入りに化粧するので特に長い。化粧が終わると昼近くなる。従って、出来立ての顔で昼食をとることになる。

清・佐藤 贊。

538 大当り口上首をふるばかり 文集

粕谷 大当たりで超満員の芝居。こうなると

観客の話し声などが非常に喧しい。客同士の喧嘩も起こるであろう。芝居の口上も何を言っているか分からないが、頭を上げ下げしているから何か喋っているなとわかる。

小栗 賛。口上も聞かえないほどの超満員。

橋本 同。「考証江戸歌舞伎」では主題句のほかに、

大当り口上唾のことく也

五四八

大人で口上首を振て居る

一〇七三

をあげて「次幕への期待にとよめく客の喧嘩に、口上言いの言葉がまるで聞かえない。首を振って何か言っていることだけがわかるほどののである」と。

清・佐藤 同。

539 むこいやつじやのほねをかす俄雨 如雀

粕谷 「じや」は「蛇の目傘」の下略だが、ここでは蛇の目傘にこだわらず一般的な傘の代名詞とする。骨だけの傘に、元は蛇の目得有ろうが無かろうが、ぐしょ濡れになるのはおなじ。

急な雨に遭い、知り合いに借りにいけば傘とは名のみ、骨はつきりで、何の足にもならない。これじゃ孤をかぶった方がまし。

にわか雨内義しやこつを出してかし

にわか雨はねをさしてくむこひ事 天三礼5
天六童3

清 佐藤 賛。

540 またもとのさやへおさめるばかり主

芹文

粕谷 女房が間男を作った。普通ならば、二つに重ねて斬る。でなければ、七両二分取って離縁する。そのどちらもしないで元の鞘に納める。江戸っ子の立場からすると、軟弱な亭主と映り、我慢がならないだろう。

もふいごハさせやるなよとばかりいしゆ
きつとしたせうこもないとばかりいしゆ
天五高2

橋本 賛。なれど主題句(寛政三年)の頃はもう五両となっていた。「柳多留」の五両初出は、

いけて置やつてハ無いと五両とり 一〇16
—安元仁5である。

清 佐藤 同。

541 ただもろふばあを遣り手とハいかにか

紀鳥

粕谷 「遣る」と「貰う」の反語。

遣り手に祝儀を渡しても、別に何をしてく

れる訳でもない。金をただ取られるようなものだ。なのに、こちらへ呉れそうな名前が付いているのはどういふことなんだ、と、客の気持ち。

遣り人ハ客でもらひ手ハば、あなり

天三三2

遣り人とハ仮りの名実ハ貰てへ 九六10

山田 遣り手と言ったってただ貰うばかりなのだから、貰い手とでも称すべきものでないか。本句、単に遣と貰の言葉遊びだけ。

橋本 同。「とはいかに」は、今でも使われる謎かけ遊びの常套句。それを援用した句である。

清 同。山田氏の簡略な説明で十分。
佐藤 礎稿賛。山田説も同じである。

542 人にほれべきをべらぼううぬにほれ

孤声

粕谷 本来「惚れる」というのは、他人に向って言う言葉であって、自分に対して言う言葉ではない。それをヌケヌケと言うものだから、あいつはとんでもない奴なのである。

うぬ惚の外にほれ手のない男 二三三3
小栗 句意の後半は不要。特定の個人をいっているのではない。

清・佐藤 同。

尚香のむ

藤田 泰子選

皺の手にまだ掴みたい欲があり
誠実な男の斬聞いている

パソコンがペンを離せとやかましい
ずっとおそばにガス台は点火中

ぬむの花こを過ぎればもう逢えぬ
面倒な事もあります生きるって

遅れてもいいから咲こうかと思う
ときめいて今日は真つ赤になる翼

寝転がるわたしにもある熱い肌
人肌の爛を手酌で飲んでます

晴雨兼用女ころをもてあそぶ
あの日から幾度も見つめている名刺

控えめな人が一番光っている
相槌を打って下さい仏さま

一ぬけを考えている葦である
前向きに行く他はないシユレッター

深呼吸ひとつで変わる風の色
加齢とは疎ましきこと靴選ぶ

火傷せぬよう離れているのです

倉敷市 小野 克枝
八王子市 播本 充子
樺原市 安土 理恵
羽曳野市 徳山みつこ
倉吉市 淡路ゆり子
藤井寺市 高田美代子
藤井寺市 太田扶美代
富田林市 中井 アキ
松江市 川本 晔
和歌山市 古久保和子
大和高田市 鍛原 千里
橿原市 居谷真理子
鳥取県 岩崎みさ江
大阪府 神夏磯典子
寝屋川市 籠島 恵子
尼崎市 長浜 美籠
鳥取市 永原 昌鼓
堺市 山本 半銭
大阪府 川久保睦子

いつもどこかであなたの鈴が鳴っている
恋捨てて正気になった水の色
老木の花は一人心打つ
胸に棲む螢へ梅雨の甘い水
いつからか泣かぬ女になって老い
手の届くところに遠いひとが住む
平凡に暮れて洗濯物たたむ
それぞれの眼鏡があつて泣き笑い
米を研ぐおんな一人の反戦歌
ふわふわに抱かれ欲深が眠る
家事全般やっております空気です
補助輪を外し七十の冒険
ノラになりたくて出たままそのままに
まだわたし空にはなれずに困つてる
缶ビールほどの手軽さマニフェスト
大きな子供守りして暮らす友が居て
皇太子菊のカーテン開きませ
口紅をかえて明日へ一歩二歩
臆病な犬で何時でも吠えている
染まったら駄目よ駄目よと言いつ聞かせ
一歩ずつ信じた方に歩が進む
化粧ボーチ女のいくさ詰めてある
膿の出るところには触れずお付き合ひ
流れても日にち薬が効いて来ぬ
飛び乗って次の駅まで弾む息

西宮市 門谷たず子
藤井寺市 鴨谷留美子
西宮市 緒方美津子
吹田市 大谷 篤子
尼崎市 春城 年代
鳥取県 石谷美恵子
三田市 久保田千代
芦屋市 黒田 能子
和歌山市 西山 幸
出雲市 伊藤 玲子
東大阪市 北村 賢子
和歌山市 榎原 公子
シドニー 坂上のり子
香芝市 大内 朝子
兵庫県 中上千代子
大阪市 本間満津子
河内長野市 水谷 正子
鳥取県 山岡 紀子
愛媛県 花岡 順子
大阪市 町田 達子
東京都 清原 悦子
今治市 塩路よしみ
和歌山市 桜井 千秀
鳥取県 西原 艶子
大阪府 大川 桃花

一匹の蠅追ういたずらっ子のように
 いつよりを余生となるか茄子漬ける
 雨の音人を許せばあたたかな
 急流の中で汚れを知らぬ石
 神様のジョーク紅白一枝に
 仏壇へあんたが悪いと言つてやる
 地下街で遊び地下鉄で帰つた
 直線に添えば息切れしてしまふ
 怖そうな人にはノックしたくなり
 どくどくに他人の荷まで担がされ
 父の日に妻も娘も無い老父
 恋という妙薬飲んで若返る
 逃げ腰の彼にべたつく家の猫
 銀婚も昨日と同じ今日が過ぎ
 地図のない街のカフェーの戸を開く
 真っ白な皿にふたりの夢を描く
 怒るより笑う方向く羅針盤
 てふてふと書いて夫は浪漫派
 舌の上転がし言葉まるくする
 群を出て群の温みがよくわかる
 東京ラブソニーを歌う恋の街
 ポロ隠ししてます脳も教養も
 報道に命をかけて散り急ぎ
 雨あがるまぶしい人とすれ違ふ
 アマリリス一本で足る備前焼

岡山市 山本 玉恵
 八尾市 中島 春江
 鳥取県 佐伯 やえ
 池田市 栗田 久子
 堺市 矢倉 五月
 豊中市 安藤寿美子
 堺市 志田 千代
 西宮市 西口いわゑ
 鳥取県 徳田ひろこ
 倉吉市 野口 節子
 大阪市 板東 倫子
 三田市 石原 蔵子
 岸和田市 雪本 珠子
 箕面市 出口セツ子
 東京都 やまぐち珠美
 和歌山市 松原 寿子
 大阪府 米澤 俣子
 羽曳野市 吉川 寿美
 出雲市 園山多賀子
 米子市 澤田 千春
 米子市 林 瑞枝
 高知市 小川てるみ
 米子市 足立由美子
 奈良県 渡辺 富子
 倉敷市 撰 喜子

吹いてきた風に多彩な花しようぶ
 しのびよる突然蕃地など忘れ
 照る日曇る日悔いは鏡の裏におく
 リストラが脂の乗った頃に来る
 父母逝つて里への距離の遠いこと
 人間から欲を消したら働かぬ
 折鶴がとんだ私の目の迷い
 切り盛りを任せて僕の椅子が無い
 幾山河 万の約束して越えた
 つい本音吐いてしまったEメール
 淋しくて誰かに電話したくなる
 窓拭いて明日の彩を確かめる
 ふりだしに戻ろう青い空だから
 ふくよかな風が流れる花の寺
 私を丸洗いする梅雨晴れ間
 未来への扉はずっと開けてある

東京都 後藤 早智
 米子市 白根 ふみ
 富田林市 片岡智恵子
 倉吉市 米田 幸子
 神戸市 山田婦美子
 和歌山市 柏原 夕胡
 米子市 青戸 田鶴
 藤井寺市 若松 雅枝
 米子市 木村富美子
 海南市 堂上 泰女
 今治市 野村 清美
 和歌山市 武本 碧
 東大阪市 中岡 妙
 倉敷市 井上 富子
 和歌山市 楠見 章子
 八尾市 村上ミツ子

克枝さんの句―欲、夢、幾つになっても夢みていたい女ころ。
 還暦には還暦の夢、古稀には古稀の夢がある。皺の手を見ながらの
 感慨をうまく表現されました。充子さんの句―眠っている男の顔は
 ど可愛いものはない。軒がうるさいと思う時もあるけれど安心して
 眠っている軒を子守唄がわりに聞いて、その内に自分も眠つてしま
 う信頼しあっている夫婦愛、作者のおおらかな母性を感じさせます。
 理恵さんの句―時流に流されず自分を貫く、パソコン至上主義の味
 気ない世の中に対する批判が窺えます。みつこさんの句―ほつてお
 こうと思つてもほつておけない点火中のガス台、「ずつとおそそばに」
 が皮肉ばくユーモラスで笑ってしまいました。

微 風

竹治ちかし選



運動会微風に万国旗のエール
 微風にもそつと秘めてる自尊心
 微風と遊んでいいますシャボン玉
 そよ風が山の緑を連れて来る
 一服へ微風が心和ませる
 植え終えた青田微風のいい匂い
 微風より私のリズム狂い出す
 そよ風に青田は夢をふくらます
 微風に聞きたいことがひとつある
 スーパーの微風さんに会いにゆく
 菜の花とそよ風が待つUターン
 そよ風にすんなり飛んだ竹とんぼ
 クローバーの微風青春つれてくる
 微風に何かありそな期待感
 いい報せ郵便受けに吹く微風
 そよ風に乘つて故郷から来た便り
 力むなどそよ風軽く背を押す
 元氣出せとそよ風肩をなでて行く
 そよと吹く風に思いが右左
 そよ風に乘つてたんぼ旅立つた
 明日の夢語れば風はそよと吹く
 そよ風に乘つて来そうな青い鳥

権 悟 碧 充 子 清 江 滿 史 泰 女 志 華 子 蝋 螢 (伊)玲 子 (志)千 代 章 久 美也子 婦美子 尚 士 一 風 彩 子 章 子 茂 代 重 枝 雅 枝

城跡のそよ風歴史語りかけ
 微風が誘うちひろの絵の中に
 心地よい微風しあわせ彩である
 そよ風に乘つてあなたがやってくる
 微風にコスモス揺れて人を恋う
 微風を待つタンポポの熱い胸
 そよ風に心の中を覗かれる
 公園の微風恋は進行形
 微風のいたずら恋の灯がともる
 そよ風が恋のあと押ししてくれる
 笑顔が素敵そよ風のような人
 そよかせと会話をしたい夏の宵
 夕風を乱して赤い微風吹く
 ニコニコといつも微風のような人
 微風のようにやさしい親友がいる

高 明 美 明 保 州 時 雄 ますみ 一 花 岳 水 正 雄 喜 子 不 二 強 一 公 誠 愛 論 次 男 ミツ子 たもつ セツ子 霜 石 淳 司 像 山 扶美代 文 子 鍛原千里

うたた寝の本を微風に盗まれる
 近く日まで恋の微風を抱き続け
 そよ風に吹かれたわしを取り戻す
 幼い日母が扇いでくれた風
 温室の花は微風も知らず咲き

佳
 目が合った時から感じていた微風
 角を曲ると微風豹変したくなる
 天
 残像を抱いて微風の中にいる
 そよ風の優しさ知ってから大人

親の居るうちは実家へ泊りがけ
 泊まりがけ親の介護の予定詰め
 泊まってほし帰つてもほし里の母
 連泊をしてみたくなる山の宿
 妹ができてお泊まりうまくなり
 酔っぱらい泊まって帰る置置場
 一泊の旅で病後を確かめる
 外泊の許可を待つてる闘病記
 宿題と寝巻き揃えて母の里
 卒業の記念に残る枕投げ
 若かった往きも帰りも車中泊
 草枕地酒の匂い鄙の宿
 ホテルよりやはり我が家の青畳
 ふる里で一泊延ばす祭り笛
 格安のツアー今夜も機中泊
 一泊の検査お腹の大掃除
 喜んだ外泊最後たと知らず
 三泊四日じぶんで家事がしたくなり
 司馬遼の泊まった街で遇う歴史
 客泊めの部屋が息子の家になし
 友人を見舞い付き添う恩がえし
 風の盆いつしよに踊る泊まり客

武 史 早 智 美 也 子 四 郎 鐘 造 昌 鼓 志 華 子 高 明 五 月 哲 男 郁 子 志 洋 一 風 尚 士 勝 巳 德 三 美 ね 宏 明 照 章 輝 夫 (徳)



泊

春城 年代選

路 集

泊まらせて朝の雲海自慢する
傷心を母の港へ泊めに行く

(伊) 玲子

一夜妻帰る櫓の音もやの中

勝 碧

子も孫も泊まりに来るぞ祭り笛

重 人

一泊へ携帯ゆつくり眠らせず

典 子

一泊じゃとても美人の湯の効能

柳 弘

帝国ホテルに昔泊まったことがある

棲 世

外泊の娘へ父の胸裂ける

ミツ子

三泊三様女性はそれぞれお召し替え

俊 子

外泊の許可をいただく日本晴

朝 子

老夫婦たらい回しの上帰る

實 實

民宿にペンツ来ましたお世話さま

孝 一

小山舎のラッシュ右向け右で寝る

淳 司

二泊より三泊にして喜寿の旅

螢 子

一泊の旅へも心深くする

千 里

佳

一晚中わが子の家で寝つかれず

時 雄

一泊の旅にも持っていきりんご

嘉 子

泊まらない子等が母には物足らず

妻 子

首輪はずし二泊三日の旅たのし

雄 々

一泊のつもりが居着く里帰り

美代子

人

漂泊の木偶も詩人になつてゐる

充 子

地

一泊二日妻はちいさな家出する

霜 石

天

いつまでを胸に泊まるか亡天の影

門谷たす子

軸

宿坊に罪滅ぼしを置いて来る

軸

吠える

近藤 春恵選



総会へ毎年吠えにくる一人

議長から頼まれていた吠える役

弱虫が吠えてもきいてもらえない

正当防衛犬が近づくなと吠える

群がればすぐ吠えたがる握り飯

じいちゃんも吠えなくなったパンパス

遠吠えに老眼鏡がずり落ちる

吠えたのは妻にかまれた僕だった

会議では黙り酒席で吠え続け

寄り添うて暮らすたがい吠えながら

情熱にまかせて吠える青りんご

風が泣く耐える男の遠吠えか

遠吠えの意見誰にも聞こえない

国会に吠えたいことが山とある

逃げておこそろそろ妻が吠える頃

これだけは譲れないから吠えている

吠えるのを忘れて犬も美容院

税務署へ一声吠えに行つてくる

弱虫が神の死角で吠えている

したたかに吠える女の離婚劇

堂々と吠えたのだから悔いはない

母として吠えた証を残しとこ

神様が振り向くまでは吠えつづけ

来客に申し訳ない犬が吠え

久仁雄

正和

ゆきの

開子

蕉子

宏章

英旺

照彦

こずえ

棲世

四郎

ミツ子

螢

妻

清史

あずま

朝子

充子

千里

一風

たもつ

美代子

慕情

みつこ

茂代

鐘造

愛論

ヒサ子

孔美子

太田扶美代

初歩の教室

題 — 冷蔵庫

三宅 保州

『川柳塔』を読もう 川柳の上達法の基本は「多読・多作」だと言うことは耳にたがえるほど聞かれますが、それだけ大切なことだと言うことです。今月はそのうちの多読についての具体策として『川柳塔』誌をしっかり読みましょう、ということを変更してお勧めします。皆様は当誌を毎月どの程度読まれていますか。先ず自分の句を探して、次に知人の句を探し、三才・五客の句を読みそれで終わりということではないでしょうね。こういう人も多いと聞きますが残念なことです。当誌には、句だけでも毎月約五千句も載っているそうです。それを前述のような読み方ではまさに宝の持ち腐れですね。麻生路郎祖師の言われた主旨の「名吟と思う句を抜き書きた句帳を作り、精読する」ということを心したいものです。

当誌や各柳誌などを常に手元に置き、多読する習慣を身につけることにより、川柳を楽しむ

しみ学び上達することになること必定です。
【課題が分かり難い句】

課題の「冷蔵庫」が自分では分かっているのですが、読者には分かり難い句があります。「冷蔵庫」を詠み込まなくてもよいのですが、題が冷蔵庫と分らない人にも冷蔵庫という題の句だなと分かる句にしたいものです。

ただ今と言うより早くドア開ける 信子
何も無い冷凍うどん出番だよ 玲

閉め忘れ怒ったように熱くなる ポン吉
冷えた水夜半に一口飲む習慣 こずえ

腹の中冷やし背中は熱地獄 孝明
安売りで開けてびっくり無計画 かずみ

原 キッチンへ俺が主だとかい顔 はじむ
添 キッチンに我がもの顔の冷蔵庫

【同想句】
「冷蔵庫にへそくり」を詠んだ同想句
へそくりを冷蔵庫にて凍結す 弘子
へそくりの隠し場所です冷蔵庫 智加恵

臍線よりもよく冷えてます冷蔵庫 雅明
冷蔵庫中にへそくり居候 きぬ子

「給料前の冷蔵庫」
空き増える給料前の冷蔵庫 弘子
腹ペコになる月末の冷蔵庫 夕胡

「不休の冷蔵庫」
公休も代休もない冷蔵庫 武

撫でてやる不眠不休の冷蔵庫 夕胡
「メモのある冷蔵庫」 武

冷蔵庫のドアに娘の走り書き 英旺
冷蔵庫ドアにおかずのメッセージ 正和
冷蔵庫メモ貼つてある妻の留守 賢治

「冷蔵庫の買い換え」
冷蔵庫買い換えたたび成長し 賢治
買い換えるたびでかくなる冷蔵庫 正和
冷蔵庫買い換える度場所を取り 喜子

「熱帯夜と冷蔵庫」
扉開け首を突つ込む熱帯夜 淳司
冷蔵庫抱いて寝ようか熱帯夜 水昇

「閉め忘れた冷蔵庫」
原 お節介な冷蔵庫にも立ち入られ 節子
原 冷蔵庫閉めた積もりが開いたまま 円女

添 冷蔵庫に叱られました閉め忘れ
「冷蔵庫の詰めすぎ、賞味期限切れ」
冷蔵庫が悲鳴あげてる特売日 満子
満員で悲鳴あげてる冷蔵庫 政子

冷蔵庫余分な物を買ひすぎる 忠子
詰め込まれ過ぎて苦しむ冷蔵庫 きよし
冷蔵庫何でも入れて期限切れ きよし

冷蔵庫安心し切つてカビが生え りり子
冷蔵庫賞味期限はあつて無し 昇
冷蔵庫奥につめこみ賞味きれ みね代
放り込めば安心くれる冷蔵庫 像山

原 冷蔵庫思わぬカビに論されて 美恵子

添 冷蔵庫のカビに期限を論される

【添削・批評句】

原 冷蔵庫眠れぬ夜のBGM 益子

添 結語が六音字でリズムが悪い

添 不眠症へ拍車をかける冷蔵庫

原 冷蔵庫とレンジで事足る一人もの満子

中八音字は避け「事足る」を「足りる」に、

原 先祖さまびつくりするだろ冷蔵庫 こそえ

添 ご先祖に見せてあげたい冷蔵庫

原 冷蔵庫形は古いがよろしくね みね代

添 冷蔵庫型は古いが未練あり

原 食べ盛り冷やす間なしの冷蔵庫 実千代

添 冷蔵庫冷やす間なしの食べ盛り

原 冷蔵庫寿命延長後二年 開子

一年が動く(二年の必然性がわからない)

添 冷蔵庫も寿命延長さす不況

原 ひとり者冷蔵庫だけ大型ね 綾乃

添 冷蔵庫だけ大型のひとり者

原 冷蔵庫水も作る楽になり タカ子

添 氷まで作ってくれる冷蔵庫

原 夏日には我が家ではばる冷蔵庫 稔

添 夏日でも涼しい顔の冷蔵庫

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 思ひ出す井戸に吊したビール壺 政子

添 ビール瓶吊した井戸がなつかしい

原 冷蔵庫最前列は缶ビール 英旺

添 冷蔵庫主要ポストは缶ビール

原 単身者冷蔵庫にはビールだけ 章司

添 単身赴任冷蔵庫にはビールだけ

原 週末は冷蔵庫整理ブチデイナー 侑子

添 週末は冷蔵庫整理ブチデイナー

原 こんなんにも多機能誇る冷蔵庫 れんげ

添 こんなんにも多機能誇るのか冷蔵庫

原 母のインシユリン命の綱を冷蔵庫 利子

添 冷蔵庫に命の綱のインシユリン

原 開けんでも母は見えてる冷蔵庫 清

添 冷蔵庫の中味を熟知してる母

原 デバ地下を冷蔵庫で待機さす 道子

添 デバ地下という我が家の冷蔵庫

原 冷蔵庫開けた瞬間なんだっけ 典子

添 なぜ開けたか思い出せない冷蔵庫

原 益過ぎて二人つきの冷蔵庫 春代

添 益過ぎて元の二人の冷蔵庫

原 料理下手何度も開ける冷蔵庫 隆

添 冷蔵庫何度も開ける料理下手

原 特売日やつと満杯冷蔵庫 玲

添 おふくろの味も詰めてる冷蔵庫

原 冷蔵庫亦文三日眠らせる 信翁

添 飲みもせぬビールが並ぶ冷蔵庫

原 ダイエット白い目で見る冷蔵庫 敬之介

添 冷蔵庫みたいに食べて瘦せたがる

原 冷蔵庫の掃除で作る新メニュー イセ

添 冷蔵庫勝手に開ける居候

原 冷蔵庫マンガーひとつ自己顕示 千華

添 売れるかも金庫のついた冷蔵庫

原 冷蔵庫母という字が消えている 映子

添 生き様をじつと見てきた冷蔵庫

原 冷蔵庫の中味がわかる暮らし向き 俊子

【佳句】

原 冷蔵庫にかなわぬ恋を仕舞い込み つよし

添 冷蔵庫冷えたビールがあればよい

原 冷蔵庫腐敗防止機には非ず 信子

添 停電で整理が出来た冷蔵庫

原 お隣はまた冷蔵庫買い換えたい 武

添 手切れ金取って出て行く冷蔵庫

原 冷蔵庫僕の懐知ってる 秋星

添 冷蔵庫奥のバックは何だっけ 千代子

原 モロッコの蛸も入った冷蔵庫 昇

添 冷蔵庫見ながらメニュー考える 時雄

原 冷蔵庫たんとお菓冷えてます 洋子

【今月の推せん句】

原 老いらくへ生姜の乾く冷蔵庫 桜岡美弥子

添 「生姜の乾く」に語り尽くされています。

原 この家に三階建ての冷蔵庫 木村 青生

添 「三階建」が抜群「この家」にあと二工夫。

原 他人様にお見せできない冷蔵庫

添 他人様にお見せできない冷蔵庫

秀句鑑賞

同人吟松原寿子

—7月号から

精一杯やればチャンスは訪れる

春木圭一郎

ついこの間、秀句鑑賞をさせて頂いたような気がしますが、歳月の流れは早いもので四年余りの事らしい。一度するともうご依頼はないものと、お断りする姿勢を取ってしまった私ではありましたが、改めて自分自身を開拓するためにもよい機会であったと思ひ直し、出来る限り多くの作品に触れたくで、チェックを重ねたものの、数句発表出来なかつた事をお救し頂きたい。

素材、表現、把握、さまざまな言葉の韻律等、要因が加味され一句としての作品が生まれていると思う。それだけで評価する事は出来ませんが、「人を魅了する何かがある」そんな個性豊かな作品を取り上げて見たい。

前向きに真剣に詠まれた句へ、私なりに焦点を絞り、スポットを当て、思いきり楽しんで勉強させて頂きたい。

一句におさまる切れないほどの質量を、どう受け止めて、どう鑑賞するかが、問われているのではないのでしょうか。少しでもそのお役に立てば、嬉しい限りです。

花の前でウソやでたらめ言えませぬ

佐伯やえ

綺麗な句です。私はこの句に対して、ふた通りの見方をしました。やえさんは、きつとお花の大好きな方とお見受けします。

種、球根、苗、苗木、挿し木などしながら優しく見守って育んでおられるのだらう。四季折々の季節を感じます。花に気を配りながら、女性らしい素直な表現をされている。

さてもう一つの見方として、花と人間を対比させた、現代世相を突いた句ともいえる。

例えば、贈収賄から詐称、詐欺、汚職等、不正が相変わらず続く今日、神も呆れ果て愛想をつかしそうな世の中なればこそ、そのあたりをしっかりと伝えたかったのではなからうかと思えます。着眼点に感服。

どう化粧しようか笑顔には勝てぬ

小泉ひさ乃

社会に出ると場合によっては、心にもない仮面をつけなければならない時があるのではないのでしょうか。各メーカーには、美容部員が配置された化粧品や化粧技術もずいぶん進んでいると聴いている。化粧ひとつで、何処のどなたか判らないくらい変身することが出来るほどです。本来の素顔のなかに見える笑顔には、とうてい勝てないというのである。

一読してまず明るく、楽しくなってくる。日々の積み重ねを、きわめて感慨深く何に増しても充実をするひとときなのでしょう。夢の夢であつてはならないと信じている。

五、七、五のリズム感が句に組み込まれた時、心のどこかでわだかまるものを吐き出し心境を詠めたということは、自分自身を論し励ましている。私もそう信じたいものです。

旅の空ゆつくり動く腕時計

高瀬霜石

この句を見る限り、費用など問題ではないでしょう。旅にも色々あるようですが、電池切れにならない限り寸秒の狂いもない秒針も容赦なく刻を消している。

腕時計との行動に、心ゆくまで旅を楽しんでいる様子を窺うことができるなかにも、一行のドラマが目の前に浮かんでくるようだ。久しぶりに職場から離れた作者は、心の豊かさを存分に養われた事でしょう。

寂しがりいつも手元に万華鏡

福本英子

人生には、人間本来の部分と劇的部分があると言われていますが、自分の感動をゆがめず素直に表現することも大切だと思ふ。

「ヤンチャ」な一面を覗かせる反面、どうやら寂しがりやさんでもあるらしい。

今日は、どんな思い出が飛び出してくるのであろう。色彩と感覚が前面に押し出され、寂しさを多面的に刺激しながら「万華鏡」と響きあっている。現実と向き合い、心の声をもたらし佳句と言えましよう。

永らえた命医療がもてあそぶ

籠島恵子

大切な命をもてあそばされては、たまつたものではない。叫びにも似た虚しさ、伝わってくる。逆に川柳という趣味を持つて、生きる恵子さんの精神的な健康さを、この句から読み取ることができる。もしかして、川柳は良薬なのかも知れません。

奔放に生きてあしたはどんな夢

宮西弥生

いつも夢を追い、夢を見ている時は、一番美しい時だろう。一人の女性として、自由気侷に一步一步階段を昇つて生きてきた。大いに夢を炎やして生き甲斐のある日々を。

抱きしめてあげる両手はあいている

栗田久子

女心とは微妙なものです。作者は女性です。受け止め方も男性とは違つてくる。人それぞれ傍目には、窺い知ることの出来ない運命があり、逆らえないさまざまな事が起きる。嬉しいことや、辛いことがあつた時、傍にいて優しく包んでもらえるなら、心強く感じるだろう。たとえ同性であつても、両手の感触から伝わる思い遣りは温かいはずです。

風向きを変えるカードを持つている

太田扶美代

人はみな反逆精神は、大なり小なり持つているだろう。表面には出さないが、心の風を押さえじつと成り行きを見守っている。そもそも詠む側には、原因は掴みにくいが句意の深さは、想像力を与える手法が新鮮で「風向きを変えるカード」に鍵があり、充分に手応えがありそう。

うれしさを包み切れずについ喋る

酒井一壺

頷いて理解の出来る句です。私もつい口をすべらせてしまつてしまう。あの人へこの人にも、幸せを結びつけずにはいられない。うれしさを分けてあげたくなる気持が、泉のように湧き出ている。

意気込みをひびかせて行く朝の靴

堀江光子

川柳は遊びでもなければ、社交の道具でもない。振り返れば、心がずしりと重くなるような日々があつた。しかし今日は違う。

前向きな姿勢が見られ、自己の感動を素早く切り取つて一句が成されている。「ひびかせて行く朝の靴」へ、成功を祈りたい。

火も風も巻き込み恋はむらさきに

山本玉恵

「火も風も巻き込み」というほどの恋とは、相当情熱的な恋といえましよう。年齢など意識することはない。胸の血潮がどんどん満ちてゆく過程でもある。句裏を探れば、たとえこわれ易いものであつても、ひたすらに賭ける一途さに美しさを感じる。「恋はむらさきに」に、ほほずりをしたいおもしろい。女性特有で共感度は高いでしょう。

お下がりランドセルにも愛がある

野下之男

少子化が叫ばれるようになってから、何年になるだろう。両親父母が、両親が、子供のために目を細めながら、お祝いに贈つてもらえる時代、物質文明の豊富な現代にこそ、庶民的なあなたかさが滲み出ている。大切に使用されたランドセルに愛が宿つている。

二賞選考規定（要約）

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
 - ② 第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
 - ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
 - ④ 第二次選者
本社関係 名誉主幹・主幹・理事長
地方関係 ⅠⅡブロック（一）選者数
【北海道・東北 関東 北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】【兵庫（3）】
【和歌山（2）】【鳥取（4）】【島根（3）】
【岡山・広島・山口（2）】【四国・九州（2）】
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。
- （備考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

平成十六年度二賞選考委員

第一次選者（十名）

橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人・奥田みつ子
仁部 四郎・波多野五楽庵・小島 蘭幸・西出 楓楽
前 たもつ・木本 朱夏

第二次選者（二十八名）

本社関係 橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人
地方関係（二十五名）（内は人数 プロック内五十音順）
〔北海道・東北 関東 北陸プロック（2）〕
齊藤 荔・島 ひかる

〔京都・奈良プロック（1）〕 大内 朝子

〔大阪プロック（6）〕

海老池 洋・川端 一步・津守 柳伸
鶴田 遠野・宮崎シマ子・山本希久子

〔兵庫プロック（3）〕

田辺 鹿太・西口いわゑ・松下比ろ志

〔和歌山プロック（2）〕 榎原 公子・福本 英子

〔鳥取プロック（4）〕

植田 一京・谷口 次男・西原 艶子・森山 盛桜

〔島根プロック（3）〕

岸 桂子・竹治ちかし・吉岡きみえ

〔岡山・広島・山口プロック（2）〕

井上 富子・藤解 静風

〔四国・九州（2）〕 赤川 菊野・中居 善信

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いのないようにお願いします。

平成十六年度各賞選者

愛染帖賞 波多野五楽庵

茴香の花賞 藤田 泰子

一路賞 富士 慕情 古久保和子

各地柳壇賞 山本 義子 吉村 一風

路郎忌

本社七月句会

七月七日(水) 午後五時半

アウイーナ大坂

もう梅雨明けかと思わせる炎天下、番傘その他から多数のご参加を頂き、百二十名の出席で路郎忌本社句会が開催された。

お話は、路郎師のお孫さんの西村哲夫さん。平家物語の祇園精舎を引きながら、仏教の無常について語り、無常とは「この世に於いてずっと続くものはない」の意と定義する。

祖父路郎の無常感について「形あるものは壊れ忘れられる。形なきものは人に多くを与える事が出来る。」と母から聞いた事がある。

無常とや猫も錦魚も死んで見せが端的な句である。路郎の川柳を読み、歳月を越えて路郎が生きているとつくづく思う。

お互ひがみな病院にゐるとも知らずてにをはのあはぬ悔みとなりけり死は強しも女中ではありませぬ子を死なし学校に子の多いこと

などと、無常感の強く表われた句を紹介し、雲の峯という手もありさらばさらばですの辞世の句で締め括った。

初出席は田村あき子さん柏原夕胡さん(和

歌山市)を迎える。

月間賞は西口いわゑさん(西宮市)に輝く。

(司会)玄也(記名)恵子・真理子

(受付)泰子・恵子(清記)義

席題「眼」

本田 智彦選

眼科医も白内障になつてい
才女だな胸も眼鏡もすばらしい
そんな眼で見ると口をつぐんどく
翔べそうな気がして眼鏡かけ替える
いいとこに眼を付けました絆とは
近眼のふりで素通りしています
エプロンの下の眼力冴えている
親の愛重荷に思う千里眼
正眼の構えで妻は斬りかかる
眼中になかった人に惚れられる
失敗を許してくれる眼が欲しい
わたくしの心を見抜く仏の眼
無心にはなれず無心に眼をとじる
立ち直る少年の眼は澄んでいる
上手とは言えぬお世辞に眼が笑う
傍観の眼はらんんと好奇心
眼の底で悪女が胡坐かいている
山頭火の眼が平成の世に欠ける
検眼のたびに縮まる父の視野
サングラスとてもやさしい眼を隠す
みんなみな五百羅漢の優しい眼
眼力に狂いなかつた一目惚れ
娘の暮らし読みとる母は千里眼

美代子 惠美子 翠公 楓楽 孝一 夕胡 富美子 美籠 尚士 天笑 みつ子 朝子 能もつ たもつ 公誠 朝子 完次 元紀 たつお 森子 幸生 天笑 俣子

白内障おして皺がワツと見え
眼の高さ同じになつた子に注意
度の合わぬ眼鏡で見ると美人です
眼と眼手と手ゆつくり心満ちてくる
沈黙考自分探しの千里眼
ソーマンはつるつると眼で食べる
眼があつて君のサインを胸に抱く

佳
眼力が冴えて仲間と遠くいる
眼中にない男から言い寄られ
人間の裏を覗いている義眼
女を見抜く審美眼には自信あり
お金持ちしか眼中にないらしい

人
近鉄に眼をつけてる奴がいる
記者の眼が政官財の闇を斬る

地
天
九条の眼から涙が枯れている
審美眼だけは誰より持っている

軸

兼題「出る」 海老池 洋選

こんこんと湧き出る愛は海になる
鏡の中を男の汽車が出て行つた
生きている証ゴミ出る愚痴も出る
人肌に触れると溢れ出る涙
彼岸までひよいと出かけてそのまんま
ケータイに母がすぐ出る枕もと

見清 シマ子 公誠 希久子 柳弘 千代 寿子 富美子 夕胡 新一 弘一 正明 惠美子 雅文 元紀 夕胡 度 俣子 雅文 和夫 たつお

いつか振り返るだろうと門を出る
 家を出る別に用事もないけれど
 人形も箱から出たい夢を持つ
 玄關を出ると世間の顔になる
 他人ともなれば答はすぐに出る
 プラスアルファというから判を押す
 えーという人も出ている選挙戦
 金を出す話になると居なくなり
 家出したとは言っていないから帰る
 出て行くと妻に言われたことがある
 出口調査の結果を先に言いつける
 陳情に来たのに寿司と酒が出る
 手品の鳩出番狂わす自己主張
 今頃になつて出て来た隠し金
 しやしやり出る女にバトンタッチする
 毎日を出たとこ勝負たのしまん
 鬼か邪か出たとこ勝負おもしろ
 中締めの場合にきつと出る十八番
 会議では出ずに屋台で出る本音
 相槌を打っているのに出る欠伸
 打たれても打たれても出る杭の意地
 ほとばしる母乳うれしい優良児
 白昼夢蛇口から出る生ビール
 コインでこすると浮き出してくる微罪

あき子
 三喜夫
 メ女
 能子
 度
 咲二
 五月
 玄也
 義
 たもつ
 保州
 正雄
 ばつは
 舞夢
 智彦
 天笑
 水昇
 直樹
 祥昭
 則彦
 鐘造
 雅文
 恩
 扶美代
 新一
 希久子
 昭
 智彦

くす玉を割つて出て来たセレモニ
 愛情を疑つた日は風が出る
 迷路出てまぶしい街があるばかり
 出るところに出ると乳房は負けてない
 地球脱出そんな悪夢も熱帯夜
 大らかに生きて縫い目は荒いまま
 極楽の入口縫つたの誰ですか
 人波を縫つて私の道探す
 箱口令口にチャックを縫いつける
 返し縫いあなたを独り占めにする
 ふる里で堪忍袋縫い直す
 綻びることは知らないお針箱
 少年の自我縫い糸が軋み出す
 てのひらの風は哀しい母を縫う
 つぎ当てたとこ気に入っているずはん
 仮縫いのままいつまでも待たされる
 生きてきた足跡に似る返し縫い
 縫いたい口蹴りたい背中浮世かな
 縫いたくはない傷口もあるのです
 夢つめるポッケの底は二重縫い
 祭り笛二十歳の夏を縫う浴衣
 縫つた胃に青信号は酒五勺
 母の手の温もり消えぬ小きん刺し

美代子
 つづや
 新一
 恵美子
 希久子
 千里
 ダン吉
 寿美
 あき子
 昭子
 森子
 潤子
 元紀
 天笑
 智彦
 いわゑ
 楓楽
 咲二
 千里
 富美子
 一步
 美籠

ほころびを時々縫っている絆
 肩書に縫いつけてある無責任
 青蔭縫うように行く九十九折れ
 縫い方のうまい医者だと聞いている
 仮縫いのままの娘でよろしいか
 縫うように探す闇路の亡母の声
 がんばれと母はゼッケン縫いつける
 ほころびを何度も縫つた跡がある
 急ぐのに縫つてあげると脱がされる
 苦も楽もふたりで縫うた泣き笑い
 針山を作り直して針供養
 禅寺へ破れかぶれを縫いにくい
 産着縫う女の権利見せつける
 縫い返し仕立直しもしておんな
 人込みを縫うてチャンスを追いかける
 縫い合わせしても欠点浮き上がる
 もう何も言うなと口を口で縫う
 きずな縫う針一本を買いにゆく
 ハンカチの縫い目に溜めてある涙
 上糸がいつも絡んでくる絆
 神さまに任せ縫つた胃のあたり
 針仕事母のはなしになつてくる
 しつかりと口縫うておく秘密主義

能子
 螢
 萬的
 義
 たず子
 一風
 俣子
 房子
 哲夫
 昭子
 春蘭
 弘一
 洋
 扶美代
 修
 智彦
 尚士
 瑠美子
 鐘造
 恵子
 恵美子
 恵美子
 軸

兼題「炎」

板尾 岳人選

路郎師の炎は消えることがない
炎となり小走りに行くほつれ髪
だんじりも見物客もみな炎
とうめいな炎できみと語り合つ
炎上げ線香花火が燃えて夏
悪友が残して行つた炎です
ばくを焼くときは炎が立つだろう
ある時炎ある日氷となる女
魂を全部炎にして女
後輩と飲めばいつもの怪気炎
老いの炎美しくもまた寂しくも
ジェラシーの炎は冷めた目で燃やす
真夜中のベンが炎を抱いている
席を蹴る背中炎が吹きあげる
炎天に過去を背負つて生きている
一丸の炎となった日の悪夢
生きてゆくための炎を掌で囲う
修羅の愛炎となつて子を庇う
中心の炎は亡母か大文字
男一匹炎を抱いて鬼になる
炎の男近鉄を買うという
水にも炎にもなる父でした
カラフルな胸の炎と夏を翔ぶ
産声を待つ炎天の作業服
赤い気炎やけどしそで近寄らぬ
野心などないと炎の目で言われ
真つ向から炎のように来る直球

保州 正明 美代子
あき子 れんげ
智彦 咲二 希久子
美代子 直樹
潤子 朱夏 かりん
富美 富美子
たず子 雅文 求芽
洋 惠美子
見清 楓楽 美籠
修 セツ子
シマ子

炎の橋狂わなくては渡れない
目の中に炎が見えるやる気だな
女です愛の炎は絶やさない
古くなった炎に誰も気がつかぬ
地下鉄を出て炎天に掴まれる
住
今少し炎が欲しい束ね髪
どこまでの未練か炎から炎
手紙焼く炎はけむいだけでした
母だから水にも炎にもなれた
雑草の炎に誰も気づかない
人
火柱が走る男の預金帳
地
美しい炎をくれた青い薔薇
天
ささの葉にちいさな炎吊る女
恋炎上カレライスを食べに行く
兼題「とろり」 森中惠美子選

民 克己 セツ子 扶美代 直樹
ひさ乃 森子 耕治 五月 元紀 新一
森子 水昇 昭子 たつお 朱夏 あき子 照子 真理子 富美

梅とろり煮つめて母の誕生日
母さんの煮凝り天下第一品だ
追伸の一行とろり身に沁みる
頼られて嫁とつくつた母ジャム
とろりとろりそして透明になった
一合でとろり一合で鬼になる
ミツビシで走りとろりと脂汗
マジシャンの指にとろり吸い込まれ
味のある女とろりと酔つている
母の煮る豆はとろりと出上来る
蠟燭がとろり怪談は佳境
梅ジュースとろり間もなく夏休み
冷やっことろりと喉を悦ばす
母の愛とろり重湯が喉を越す
野仏をやんわり包む風とろり
強火からとろり火男を炊き上げる
一人ならとろりとなれるワンカップ
ヨン様にとけるチーズもわたくしも
クリームシチューとろり妻の座したかなり
男と女とろりとろりと嘘をつき
愛とろり女は嘘をつきませぬ
毒薬はとろりとろりと煮つめます
男とは淋しきもよ夢とろり
八月の風と夾竹桃とろり
住

たず子 明子 富美 アキ 美代子 保州 富美子 潤子 智彦 咲二 富美子 千代 美代子 欣子 千里 完次 哲男 一志 楓楽 義人 岳人 あやめ 千里 森子 一志 月子 保州 扶美代

とろりとろりとあの世へ落ちてゆくしづく
森子

とろりとろりまじろんでちははに会おう
正明

地
男のことも夕日もとろり胃に落ちる
咲二

天
綿菓子がとろりととけている昔
新一

軸
独り寝て食べてとろりと生きている
新一

兼題「恋」 河内 天笑選

噂にもならずには恋はシャボン玉
朱夏

ひと夏の恋を遊んでいる女
智彦

炎天に恋しい人の影ゆらく
和香

恋人でなかった人とウエディング
千代

恋人の内は素敵な人だった
修

夫には内緒にしているラブレッター
昭子

純愛を求め続けてまだ一人
深雪

鉛筆を削ってあげただけの恋
さらり

メル友に熱くなつておばあちゃん
たつお

恋人のあたりへ飛ばす竹トンボ
森子

夫とは昔の恋を笑い合い
文

恋人に逢いに行きます杖ついで
楓楽

恋人のでかいおいどが頼もしい
咲二

ポストまで来て持ち帰るラブレッター
和夫

一本の薔薇で思いのありつたけ
明子

火のような恋でもするかお洒落して
月子

年金の粹なごやかな恋もする
萬的

携帯が光る危険な恋の罫
瑠姜子

飛び乗って恋の行方は恋に聞け
真理子

テントからテントへ通う恋もある
たつお

奥様がいらつしやるけど好きな人
泰子

ひとつだけ頑固な恋を抱いている
ダン吉

妻よりもやさしい人に恋をする
千里

振り向かぬ夏限定の若い恋
遠野

恋してららしいこの頃うわの空
美代子

残照のかがやきホームの恋結ぶ
倫子

子育ても終えていいひと探してる
求芽

神様が失恋したか降り止まぬ
つづや

嫉妬して恋していると気づかされ
はじめ

片恋の男励ます揚げ花火
洋

ベッカムの次はヨンスさま妻の恋
保州

情念が理性に勝つてプロポーズ
和夫

カラオケで愛した恋だと唄う老い
三郎

佳
恋文のとつてもうまい人でした
千代

絵入歯それでも恋をしています
寿美子

盗まれたあの唇は甘かった
高栄

大切な恋です両の手で隠す
森子

気付かれてないまま進むしのぶ恋
ルイ子

人
恋人はいるかとおばあさんが聞く
義

地
ひそやかにためらうだけの老いの恋
淑子

天
恋しさが入道雲の如く湧く
西口いわゑ

軸
恋をしてから筆まめになった父

第8回 川柳展望全国大会

— 第2回現代川柳大賞発表 —

日時 9月18日(土) 10時30分開場

場所 ホテルアウイーナ大阪

TEL (06) 6772-1441

参加費 2000円

司会/門脇かずお

話 「川柳展望現状」 天根 夢草

題と選者 (各題2句) 出句締切12時

席題 「高」 久嶋 征子

宿題 「置」 吉崎 柳歩

「たまご」 赤松 ますみ

「正」 高瀬 霜石

「立」 なかはられいこ

「中」 笹田 かなえ

「続」 津田 暹

「自由吟」 新家完司・番野多賀子

金築雨学・河内天笑・天根夢草

*自由吟は各選者に違う句を出して下さい。

*各選者秀吟2句呈賞

講評 …………… 坂根 寛 哉氏

質疑応答 …………… 進行/天根 夢草

*大会終了後懇親パーティーを行います

主催 川柳展望社

事務局 〒560003

茨木市山手台4-6-3-101

TEL (072) 649-5226

FAX (072) 649-2334

秀句鑑賞

—7月号から

高野 宵草

挟まれた琴が本の吐息聞くと

乾 春雄

本棚に葉を挟んだまま置かれていた本は、嫌がるでしょうね、私にもチクリと来ました。

ゲーム機の手では飛ばない竹トンプ

升成 好

少子化時代の子供達が塾と家庭に籠もりがちの世情へ警句、国の将来が思いやられます。

ない袖も振って年金ピンチです

山之内 八重美

ない袖も振らずにはおれない親心、こんな善意にも「オレオレ」が狙っているとは嫌な世の中になったものです。

七人の敵も野心が消えて友

吉村 久仁雄

欲だして競走するから敵もできる。無欲ついでに肩書も一緒に捨てると、お酒も一段と美味しくなることでしょう。

春つらら笑いの種も目を覚ます

加藤 スズコ

春つらら、同名の馬も有名ですがいい言葉です。語感にも緊張が溶けてくるようです。殊に厳しく長い冬を越された方々には尚更でしょう。中七の表現に引かれました。

OB会料理並べてスズメの輪

岩本 雅代

久しぶりの懐かしさで、つもる話に食べる口よりお喋りの口が忙しい。田舎暮らしで、スズメのお宿の賑やかさがよく解ります。ユ—モラスな句です。

兎に還る老母へ笑顔の仮面見せ

坂本 兵八郎

尊敬する母の姿への苦笑なれど、その無邪気さに怒りもならぬ無理な作り笑いで、悲しませまいと務める配慮を温かく感じます。

花が咲く嵐に耐えた日は言わず

百田 幸

当たり前のように咲いた、いじらしい今年の花、過ぎし日の嵐で懸命に生き残った姿が忘れられない。作者の優しい眼差しを感じる句。人生への比喩として読みました。

意味知らぬ名のマンシオンに住んでいる

長島 亜希子

カタカナ語侵食時代のユーモアです。

露天風呂お国訛りが飛び交って

寺井 弘子

露天風呂という裸の場所で、大空までの解放感を味わうと、どうしても生の自分が出てしまふ、まして団体旅行となると、周りへの身構えが一举に飛び去って方言の場となる。読んでいて肩の力が抜けます。

麻酔さめ視野いっぱいに妻の顔

奥 時雄

麻酔からゆつくり覚めた目に、妻の顔だと解った時の安堵感はずいぶん息が抜けた。私にも経験があります。奥様の御心配と愛情を中七から載きました。

無料バス買った日から良く歩き

田中 賢治

皮肉な句ですが、人の心とはこんなものではないでしょうか。何時でも無料で乗られるから、安心して「二十歩いて見ようか」で、歩く楽しみを知ってしまったのでしょうか。

ゴミ出しの役はその家の粗大ゴミ

中井 虎尾

一読で思わず笑ってしまいました。言われて見れば、何処のお宅でもそんなものかと、安心して「：わが家の：」と読みました。

てんこ盛りして故郷のしじみ汁

原 慎悟児

水府忌 番傘川柳本社句会

日時 8月6日(金)
18時開場・18時50分締切

会場 三井アーバンホテル
☎06-6577-1111
(地下鉄・JR弁天町駅すぐ)
大阪市港区弁天1-2-1

題と選者 各題2句
「強 氣」 小林すみえ 選
「人 材」 青木 勇三 選
「 神 」 柏原幻四郎 選
「たっぷり」 高田美代子 選
「転 ぶ」 森中恵美子 選
ほかに席題1題当日発表

会費 1000円

第18回堺市民芸術祭川柳大会

とき 9月12日(日)13時開場
ところ 堺市立梅文化会館 ☎072-296-0015
(泉北高速鉄道・とが美木多駅3分)

おはなし「川柳から見た山頭火」
久保田元紀

宿題 「困 む」 岩崎千佐子 選
「 零 」 笠嶋恵美子 選
「ぴったり」 河内 天笑 選
「 森 」 木本 朱夏 選
「ばらばら」 壺内 半酔 選
「粘 る」 平井 遊草 選
「コメント」 藤原 一志 選
(50音順)

席題 なし 各題2句 締め切り14時

出句料 1,000円(作品集、参加賞呈)

賞 各題秀句に呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会
後援 堺市・堺市文化振興財団
連絡先 堺川柳協会 梶川雄次郎方
TEL 072-222-5298

第35回奈良県芸術祭参加 第76回 奈良県川柳大会

日時 9月26日(日) 11時開場

場所 りーべる王寺東館5F ☎0745-33-3000
地域交流センター リーベルホール

お話し「だるまさんと達磨寺」
臨済宗南禅寺派 達磨寺 日野周圭師

宿題と選者 13時締切 各題2句 席題なし
「ふところ」 植野美津江 選
「無 駄」 吉田 益子 選
「変 わる」 渡辺 富子 選
「我 慢」 藤田 麗子 選
「押 す」 牧浦 完次 選
「 裏 」 西川 國治 選
「 客 」 稲葉 長生 選

参加費 1500円(大会発表誌呈)

欠席投句 9月10日締切(定額小為替1000円同封)
〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之宛

お問い合わせ ☎0745-73-1166 稲葉長生
○昼食各自(会場階に食堂街あり)

主催 奈良県川柳連盟
後援 奈良県・日川協・王寺町・王寺町教育委員会

川柳黎明5年の集い

とき 10月10日(日) 11時30分開場
開会13時・閉会16時30分

ところ ホテル・ルビノ京都堀川2F
☎075-414-9800

会費 1000円(昼食は各自済ませて下さい)

わたしの主張
天根 夢草・大西 泰世・久保田元紀

兼題 「タブー」 池 森子 選
「ゆとり」 大森 一甲 選
「 泡 」 岡田 俊介 選
「巻 く」 佐藤 純一 選
「暗 示」 前田美巳代 選
「豊 か」 森中恵美子 選
「 鳩 」 森本夷一郎 選

出句しめきり13時・各題2句・席題なし
各題特選句準特選句呈賞・欠席投句拝辞

交歓ばあてい 6000円

ホテル・ルビノ京都堀川2F 16時45分から
当日13時までに会場受付で申し込んで下さい

主催 川柳黎明会

春風陶器

毎月24日締切・30句以内厳守 編集部

川柳塔打吹 大森 孝恵報

意志表示のらりくらりと逃げている
 表面はピンクで裏はどぶねすみ
 表面は菩薩心の中は夜叉
 表向き女嫌いで押し通す
 裏表はつきりしない北の国
 座布団に裏や表はありませぬ
 春風陶器を割って逃げてった
 座禪するたつた三日でけつを割る
 高砂や今日から苦業半分こ
 割れそうな亀裂も愛が埋めている
 ホームラン打ってガラスを割った孫
 句会が二つ体二つに割りたいよ
 割引いて聞こう話がうますぎる
 腹割って話すつもり酒一升
 むらむらと青筋立てる恋敵
 むらむらと恋の炎に身を焦す
 むらむらと野心の花も咲いて春
 むらむらとはえ一匹を追いかける
 むらむらとその気にさせる春の宵

京子 克枝 公恵 季芳 龍枝 石花菜 久芽代 友楽 節子 和子 重忠 完司 よしえ 玲子 富恵 清 勝見 善江 義人

むらむらと情念の燠かきたてる
 むらむらと親にたてつく反抗期
 松茸の生えるところは教えない
 七十年内緒のまだまだあの世まで
 藪椿内緒話をして落ちる
 ここの話強になつて飛ぶ
 離婚した父が内緒で逢いにくる
 内緒声聞えぬ耳が枯れ始め
 セクハラと言わず内緒にしてあげる
 もう一つ内緒の穴を掘つている
 皿一枚割つてストレス吹つてばし

ローズ川柳会 山崎 君子報

身ざれいに老い爽やかに終りたい
 マイウェイ無くしたものに気がつかず
 いい湯だな身も心もリフレッシュ
 いたましい子等へ言葉も失くす記事
 豊かさの中で失う処世術
 身についたモツタイナイを追い出せぬ
 略文字でメール夢中の失語症
 限られた時間隔まで生きてやる
 身辺整理やり過ぎあとが住みにくい
 百合香るそこはかとなき風の向き
 葉桜は失つたもの追わず碧
 頑張つてねわたしもひとり佐渡の月

玲坊 美美子 禎元 貴恵 芳光 照彦 幸丈 博文 三津子 孝恵 哲子 藍 貴代子 トミエ 孝一 美籠 武庫坊 年代 義子 君子 小西 雄々報 久子 公美枝

日本は戦こりこり決めたはず
 喜びは米寿を祝う母の笑み
 喜びを知る親切へ再起した
 欣喜雀躍走者一掃ホームラン
 思い出へもうこりこりという地震
 喜びは素直に胸も癒される
 合格に弾んだ声の電話口
 喜びがキラリと光る金メダル
 九回の裏のドラマを待つファン

高槻川柳サークル卯の花 田中千莨子報

閻魔さんまだまだ俺は逝かないぞ
 女には涙で迫る武器がある
 ライバルの迫る気配を風で読む
 発表会迫つてピアノも疲れたか
 切迫の空気を肌で感じとる
 駆け足で手形が迫る日が昏れる
 崖っ縁に立つまで慌てない血筋
 新宗教迷信入れて壺を売る
 迷信を変えた相手と暮らしてる
 左巻きをからかわれてからぐれる
 迷信を届かぬ棚に上げておく
 蜜柑箱の上で生まれた放浪記
 古机叩いて落語一くさり
 十年間机上の五冊置いたまま
 ピカピカの机上にバソコランドセル
 計画が机の上で欠伸する
 いたわりの台詞が置いてある机
 不機嫌な訳はパチンコ台に聞け

豊枝 千代美 鈴枝 信翁 静江 和代 正光 弘子 雄々 義一 宏章 庸佑 (井)照子 泰雄 宵草 美籠 握夢 孝一 昭 千莨子 紫香 治三郎 きよし 活恵 砂輝守 石舟

阪神が負けてる父に近寄るな
神様がやる気なくしたお賽銭
不機嫌な証拠だんだんでかい声
不機嫌だよっぱり布団が敷いてない
不機嫌な雲が頭を抑えつけ
涙腺のゆるみはつまり年齢のせい
あの笑顔見たさに選ぶブレゼント
陰日向なし神様はお見通し
手を握るだけで帰ってきた見舞
別れても風の噂を気にかけろ
夕焼けに抱かれて遊ぶ三輪車
風みどり心の傷は閉じたまま

東大阪市川柳同好会 森下

愛論報

背を向けてこっそり舌を出す女
金を出す話になると消える影
コーヒーを出すときゆたかになる話
花冷えにわたしの芽ぶきおくれそう
若い芽を踏んで鍛える燻し銀
遅い芽を待つても光るのも愛である
私の絵いつも夫を光らせる
朝露にキラリお茶目なブチトマト
雑巾をしぼる素足の僧光る
リハビリの一步かすかに風光る
柔らかな陽ざし手漉きの水ぬるむ
テープから亡父が笑った七回忌
どんじりの子にもテープを用意する
ガムテープ剥がすと里の香が匂う
ジーパンの汚れ落として叱られる

(補)典子 尚士 萬的 晴美 求芽 あやめ 稲子 武史 スミ子 メ女 (山)典子 諷云児
萬的 章久 太郎 葉 美弥子 ダン吉 柳弘 湖風 三重子 雅文 あや子 シマ子 克己 緑

根回しの済んだ会議にある汚れ
昭和史に汚れを残す八月忌
宿命が秘書は黙って泥かぶる

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

コンクリが嫌いで歩く草の道
もろもろの重荷を背負う鯉のぼり
浅学を支えて辞書も草臥れる
年金に試されている余命表
花曇り本音で話せた友が逝く
誘われて嫌と言えず嘘生かす
人は皆他人に言えぬ秘密持つ
言訳の傘もんと乾かない
万緑に心の栄養補給する
山彦も私の音痴直せない
食べ放題欲がからんで胃腸薬
砂煙り上げて砂丘の春ウララ
種袋絵と似ぬ花が咲いてくる
一本の古木に集う里の春
外堀を埋めてそろそろ攻めて来る
秀才も阿呆になりたい阿波踊り
腕白を叱っていたら孫も居た

竹原川柳会

時広 一路報

信治 愛論 良子 初恵 吟笑 勝 ひかり 輝夫 治延 かおり 八重子 放任 よしみ あきら 文仙 寿々女 いさむ 坊太郎 貞月 蘭幸 輝恵 淑子 節生 節夫

子に少し甘えを見せて生きてみる
少しだけ刃を甘くして子を叱る
子育てとやりくりママとパンの耳
アンパンの匂いいつでも亡母が浮く
ほんわかとどこかでパンのいい匂い
パン一枚減らせぬ私ダイエツト
菓子パンでなければ食べぬ子に育ち
二人で笑いふたりで泣いたパンの耳
弾よりもパンを運んであげましよう
パン一枚くわえて孫の走る朝
八十路なお老後のために節約を
米を研ぐ音の中なる女かな
午前二時あなたの声が聞きたくて
おめでとう新米ママにエールする
大胆に生きていたらと西の空

佳句地十選 (7月号から)

板山 まみ子

目薬をさすだけなのに口もあく
あいづちを打てば満足してる愚痴
古傷に触れてくれる年青い風
道を訊く英語へ母は河内弁
DNA兄弟みんな酒が好き
若い二人うんざりするまい
若いとは胸に炎のバラを抱く
わたくしも吠えたいのですお月様
本物は多分わたしの手に合わぬ
夫婦にも駆け引きがあり黙っとく

慶子 幸美 汎恵 榮子 房子 敬子 青居 静風 万年 正宏 孝枝 不朽 千枝 史子 力

大胆な笹が返る山の恋
 警察に車を駐めてきたわたし
 ケータイも車もなくて生きてい
 真っ赤な水着十七歳の光る海
 大胆な蚊だね私の手に止まる

城北川柳会

神夏機典子選

旅の話を知った振りしてメイン街
 名コンビ顔合っただけで芸になる
 御近所を大事にせよが母のくせ
 家の事近所が先に知っている
 紹介の握手にライバルまた一人
 叱つてもDNAだと躲かわされる
 川幅を知り自分を知りました
 生々しい教訓こそ近所の被害
 大根もお米も洗う里の川
 弁解は拳の中にしまいこむ
 清流を躍る姿の稚魚の群れ
 コンビ組む相手はあなたのお金です
 腹立ちもすんなり川に流せたら
 暗闇で鬼とも知らず手を握る
 軍隊を持たない国が兵を出す
 天国か地獄か閻魔鍵握る
 軽い気で握手した手が眠らせぬ
 一本の川を流れてきた夫婦
 グツと息止めて抱きつくレントゲン
 幸せはほどほどでよい丸い背な
 切り札を握り風向き待っている
 事あると近所の情け寄ってくる

笑子
 白狐
 半覚
 厚子
 一路

達子
 容子
 あい子
 東雲
 とし子
 昭子
 典子
 求芽
 一枝
 重人
 柳一
 順三
 順三
 修子
 正子
 倫子
 はじめ
 ひさ乃
 柳弘
 志華子
 さとし
 千里

点滴の雫を祈るように受け
 祖母の手の皺に浮き世の知恵の数
 葛蒲湯にひたつて願う子の育ち
 いやな奴やっぱり袖の下握る
 川埋めて八百八橋も消えて行く
 川下り小泉丸に身を託し
 下積み石もどつかい夢を見る
 人間の業よ支配という欲望

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

我がままに負かされました塩加減
 今日も雨雨雨女の腕まくり
 塩加減上手な母で平和な灯
 父の顔まだまだ辛い塩加減
 五十年合つて来まだ塩加減
 長年を共に歩んだ塩加減
 お世辞でも嬉しい言葉外は晴
 お世辞ではないがカラオケあの元氣
 笑顔でも鬼がチラホラするお世辞
 蜜月の旅にも終着駅がある

岸和田川柳会

原さよ子報

出好きでも膝がブレイキかけている
 膝ボンとたたきなつと川柳欄
 肥満体膝が泣いても瘦せられず
 子育ても膝にまつわる頃はよい
 厚化粧膝から覗くサロンプラス
 夫婦でも宝くじ買う時は別
 姑を看取り深まる夫婦仲

集一
 あやめ
 久留美
 春蘭
 政子
 静枝
 高栄
 公一

好栄
 民子
 伸子
 はるみ
 かつ子
 聖子
 惠美子
 博利
 清泉
 白汀

夫婦仲見せつけられるペアルック
 子が病んで夫婦の絆強くなる
 夫婦けんか阪神勝つて仲直り
 ままごとの夫婦気取りに当てられる
 おーいお茶夫婦の歩み幾山河
 夫婦愛打算がちらり見えかくれ
 別れたい時もあつたと老妻ホッリ
 へたばつているのにいまだ口はたつ
 へたばりそう共にかんがる長介護
 へたばらぬように息抜く長丁場
 負け惜しみへたばるものかこれ位
 具体策無方針が得意技
 お受験の方針決める母強し
 方針を固持糠床をかきませる
 口だけで施政方針楽な事
 方針が玉虫色にされ決まる
 雑魚なりのポリシーを持つ人間味
 方針を朝な夕なとなえさす
 巻紙のみくじ小さい吉と出る
 右向け右恐れ方針出そうな世
 慰謝料が無いばかりにまだ夫婦
 百年の不作と云うて五十年
 巻紙の文字が読めない父の筆

尼崎尾浜川柳会

田辺 鹿太郎

旅先の水が怖くて正露丸
 心配の絶えぬ子育て生き甲斐に
 百均についほだされて買わされる
 何処までもついてくる犬拾いあげ

ゆい
 基一
 穰一
 蛙城
 みよ子
 ふみよ
 一脩
 力子
 路子
 甚一
 寿海
 東吉
 和美
 みつ江
 珠子
 ダン吉
 俣子
 鍊太
 照代
 洋時
 文時
 呂万
 狸村

鹿太
 その
 江美
 まさ

ハイテクの世に銘水を買う不思議
われ鍋にとじ蓋だから共白髪
駅長が吸殻拾う民営化

心配事ある日ない日のあみだくじ
片想い内ポケットはまだ若い
年金が夫婦をつなぐ絆とは

気まぐれに拾った犬に癒される
やと来た手紙泣き言縷々とおる
一円で泣くのはいそいで拾います

グーチョキバ！そろそろ見えた僕の運
お茶漬にもつたいなくもコシヒカリ
百円貨拾う悪事をした気分

好きな色だから紫陽花また迷う
彩りが欲し高輪の夢だから
台風一過ゆつくり美味いお茶を飲む

富柳会

池

森子報

可能性天使の羽根に託す夢
新緑のバッチワークでめかす山
モザイクの砂が飛び交うバグゲッド
切り捨てた翼がいつか振る反旗
天と地の間で戦鳴りやまず
私のカドに残ってる初心
一言一句洩らさぬ下戸の地獄耳
行間に無言の愛がつまってる
花に風に触れて少女はむらさきに
今日明日間に少々塩をふる
同行二人間は広からず狭からず

義芳 折杭 勝己 よし子 カズ子 信子 美代子 秋子 亀与子 伊サミ 耕治 昭三 孝一 正治 美籠 諷云児 浩子 淳司 政義 和子 和代 扶美代 奏子 順子 紅紫朗 奈保美 美代子

河内路にジャックの豆もボクも伸び
丸い膳間を詰める子の帰省
わたくしを丸くしていく世間の目
まんじゅうの丸さに愛がしみている
埋れ火が赫くて女捨てられず
一匹の甘露煮男の皿に盛る
思惑は人それぞれに散る桜
鞭打ったあとは砂糖で機嫌とる
車間距離保つ夫婦のプライバシー

シナリオになかった風が吹きまくる
良心の欠片黙秘と向かい合う
若い樹のやがてを思う水加減
傷ついた父の翼をつぎあわす
石ころのほやきが川を泡立てる
手加減が過ぎて手綱の狂う音
晩学の机あくびが多すぎる
九条の働哭砂糖きびざわわ

ミスひとつ許して一つ知恵が湧く
虚と実の間で踊る日のピエロ

雨漏りの補修気付かぬ妻と住む
山積みの仕事迎えて五連休
団体の抗議に弱い首長どのお
老いの目のわが指を刺す針仕事
本番で電池が入る生き上手
政治家は自己責任も知らぬ顔
不手際と手抜きが同居仲がいい
外国でとれても饜同じ味

川柳塔唐津

仁部 四郎報

夕子 亮幹 深雪 巳代一 アキ キミエ 鐘造 高鷲 春蘭 初太郎 ひろこ 鬼焼 鹿太 信子 宏至 欣之 哲史 森子 兵八郎 高実 高明 水笑 晴翠 輝夫 勝視 虹

イラクまで井戸掘りに行く自衛隊
手枕のうたたね夢で歳がふえ

川柳塔なら 坊農 柳弘報

採算に気をとられたか味落ちる
採算の合わぬ女が好きになる
最後に来てごめんごめんとへりくだり
ごめんねと言えて靴底軽くなる
妻にまだごめんと言うたことがない
散髪へごめんと言うてるはげ頭
ごめんねごめん年金払うの忘れてた
ごめんねのひと言ほぐれだす心
さりげない飾りに滲むお人柄
甘く見たい山に登って還らない
新高山登れで狂った真珠湾
土俵には女登れぬ国際化
梅干しをふくみゆつくり登り坂
ごめんねと小さく媚びて羨無し
父の喝欲しくて父の樹に登る
美しく老いる採算して女
着飾った言葉がひとり歩きする
たこの足小さいめにして蛸焼屋
あと十年添えば採算合うだろう
三合目あたりで気合入れる靴
鏡台に飾るころを見透かされ
登りつめ味方のいない孤独感
生涯を野良着で飾る父の汗
飾りものにされてたまるか辞表書く
採算はきつちり浪速のと根性

博一 カズ子 春蘭 茂雄 千梢 まつお 洋子 登美子 春雄 章久 弘風 芙佐女 真理子 富子 孝子 太一 富子 良一 美千子 弥生 道夫 秋雄

さわやかな緑の風におしゃれする

従容と飾る男の第二章

登り詰め妻と余白の色を塗る

勲章と内助の功も飾られる

泣けるだけ泣いた女が採る収支

川柳大阪

高木

信じ合い支え合つての五十年

寒くても春を忘れず蓄つく

見えずとも頬に零れる甘い嘘

邪魔になる傘と知りつつ春の雪

百花咲くみな吟行にある笑顔

忍耐の人が築いた穏やかさ

季が二つ地球の裏に逆の四季

余生なお気力で回る土手築く

陽の匂い五体に余る母の日よ

老人会外出司令の回覧板

ホテル内畳の廊下足軽く

中高年逆巻く波も糧のうち

アメリカの哲学僕に馴染まない

四月馬鹿年金減らし笑えない

勲章のない父の背を見てしまふ

ライバルへ石垣築き濠を掘る

雨上りつつし坊やが春を呼ぶ

静寂をひとり占めして昼の月

ピリオドの先で拗ねてる春帽子

ありがたやはるはる釘煮送る友

四六時中一緒に妻が横に居る

ほこらしげ夫婦茶碗にある色気

芳香 國治 隆盛 笛生 直子

新築に夢と希望の花開く
城築く希望大きく四畳半
子と妻でしあわせ築く家庭です
いやいやと言つて男を離れない
外出の予定いつばい惚けずいる
イメージは何より恐いうしろ指
逆説の忠臣蔵を読んでいる
七人の敵をのみこむ顔となり

かよこ 川童 須賀夫 笑風 美花 照月 まつお 信醉

トツプギヤローに落して老いの坂
川柳塔鹿野みか月 土橋
寡黙くせ歳に応じた知恵かなあ
老いながら琴線だけはよく響く
自己暗示かけてあなたに応じてる
応じるもやはり掟が重すぎる
この人に一生応じざる暮らし
あの頭誰に似たかと噂する
要望に応じて染まる再生紙
掬われる金魚素直に応じている
練習の数にボールはついてくる
老いでは家族も温かかっぺえ
デパートで迷子放送鳴りひびく
その時の場合に應じ手旗振る
にぶいですねとパソコンに笑われる
パソコンの中へ本音を吐いている
パソコンが職人芸の邪魔をする
パソコンが凶器となった十二歳
パソコンに慣れて漢字が浮いてこぬ
剛腕をめめと解いて去る頃
年齢に應じる皺の愛しさよ
はいはいと應じすつかり老いました
表面向きに應じている平和
苦労かけた分だけ母をよるこぼす
苦腕に感謝しながら鉄をふる
面腕に感謝しながら鉄をふる
呼び出しの声に應じて立つ力士
ちちはの夢に應える細い肩
母の日に応じる花の花ことば

立亥 永子 八重 みどり かわる 武子 彩子 弘子 八重子 幸枝 かつ乃 くに子 睦子 陸子 茶子 孔美子 公子 和子 節子 実満 久枝 汲香 富久江

信醉報 民 ひろゑ 隆司 春蘭 ダン吉 章久 タカ子 翠谷 司 久

願い事統つてこいと神の声
手加減をする力なら残つてる
しぼられた応募者の顔そつと見る
脳みそを絞つても出ぬ知恵の端
ない知恵を絞る根気も絞りかね
梅雨の入り雲を絞るの誰ですか
絞るたび藍が色増す糸の舞
遠足へてるてる坊主力貸し
洗濯と掃除は定年ありません
洗濯は布と水との円舞曲
洗濯機家事の時間は生み出さぬ
ペアルック仲良く竿に並んでる
まつ白に干して母さんみち足りる
働ける喜び作業服洗つ
トツプにとストレス溜めて生きたはる
目標は遠くに置いてるトツプ
力量が問われる総理G8
トツプには遠いところにいる気楽
トツプの座妻にまかせて平和です

黒兎報 見清 桂子 雪子 緑骨 勇治 長一 春代 禮子 黒兎 信男 直次 メ女 螢柳 契子 久子 柳童 セツ子 昭子

ほたる川柳同好会 水野 黒兎報

螢報 よしろう

ひと呼吸して軸足が承知する
一言の嘘に応じてから寒い
天命に依じて白寿山のぼる
花菖蒲ある朝紫いろの雨

川柳塔きやらほく

福代

天雀報

雑草の中にあやめが二三本
母の日は一人楽しくビール飲む
背のちびた分だけ拭けぬ窓ガラス
日が暮れて塔はますます凜とする
明日から今日の涙を糧にする
約束の日には蜜の窓あけて
雨後の庭命に満ちて動き出す
朝の陽に雑草の花笑みかける
僧兵の駆け抜けた道今昔
肩と肩触れ合う街で湧く若さ
今が花ひと日ひと日を大切に
百均のカーネーションに香りつけ
雨の音母の背中の子守唄
新緑がまぶしく光る句がひかる
友の顔そろう新緑かけめぐり
大空に雨をあずけてさつき晴れ
大波小波越えたドラマのカレンダー
青い樹をこころに植えているロマン
子供の日子供の声がしない街
欲はないのに約束だけは多くする
約束とわたしの時差がずれてくる
響くもの探しに今日も図書館へ
限りなき愛手作りのわらび餅

諷人
きみ子
喜与志
登

雪江
杏
千繪
千春
富美子
なみ
恵子
春枝
天雀
瑞枝
玲子
田鶴
八重子
ふみ
亜弥
晶子
すみえ
てい子
蘭
日枝子
千代
弘子
やえ

風の夜桜はわたし置いて逝き

京都塔の会

都倉

求芽報

ゆき

まむしに注意向うも注意してららし
観鳥楼熟女こわくて来ぬ小鳥
春名残り白うお淡竹じゅんさいと
望遠鏡左右上下木の葉だけ
おいでませ迎えのない野鳥達
池の面さなみ悩めるらしい
久々の会に溶けこむ桜餅
仮処分された屋敷の板囲い
仮死のふりしたら徳医者がうろたえた
仮りに仮りに話に熱が入ってる
仮縫いから完成までにまた肥える
仮の世と雖も悪いことできぬ
お互いに仮面で笑う披露宴
腰かけの職場今では社の顔に
あじさいの雨に仮説がそは濡れる
肩書が付いて仮面がはずせない
美しい月が私を歩かせる
風薫る目線を少し高くする
より高く心を磨きたい老後
高い鼻折られて好きになったひと
ハイハイと自信ある手の参観日
胸はつて試験にのぞむ子ら誇り
役どころ自信は捨てぬカスミ草
スケジュール自信ないから再度見る
たじろぐと君なら出来るを訝する
あの人の自信の裏にあるお金

恭昌
寿美子
栄
春
孝一
美龍
紫香
千莞子
美穂
益子
シマ子
則彦
輝美
扶美代
正坊
メ女
楓楽
宏子
啓子
満子
久美子
求芽
ふりこ
葉子
信哉

自信たつぷり少し離れて風を読む
自信という自縛の中の白いばら
自信はないが庭いっぱいこの種を蒔く

川柳ささやま

遠山 可住報

巣立ちゆく後ろ姿に区切りつけ
愛着の品再生へ工夫する
危険でない限り介護に手は出さず
朝市の魚へきつい女の目
ご近所は深い情けの風に逢う
子を思うきつい言葉に愛がある
腹割って話す近所のある悩み
追い風に乘ってかすかな火の臭い
玄関に靴があふれる大家族
牛に鶏次の危険が水面下
家族の輪戦後忘れた日本人
それぞれの危険知ってる老いの皺
太刀打ちが出来ぬ危険な肌ざわり
踏絵かも知れぬ美味しい皿並ぶ
にこやかな監視カメラがある近所
すったもんだけれど結局家族です
家族いで最後みとられ旅に出る
家族待つ弾む心も皿に盛り
のら猫の目がにんげんに近よらぬ

かわはら川柳会

上田 俊路報

恵美
純子
美緒子
美智子
文子
美紗子
靖子
芳郎
多美子
開子
かほる
つや子
八重子
富美
哲男
君代
康子
朝子
可住
登生
悦子
かず恵

咲く花の夢を根気に織りませる
根気よく正座する足組みかえる
根気という根つ子信じて立つ大樹
根気よく待てない拉致の家族たち
高い空根気で出来た逆上がり
百年の梨を支えた根気よき
新緑に染まり根気を取り戻す

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

愛というエキスも詰めるお弁当
生涯を学ぶ姿勢のいい笑顔
一生に一度の今日へ弾む毬
満天の星に囲まれ明日を読む
ひたむきに生きた今日です悔いはない
今日一日笑って過ごす誕生日
今日こそと腹を括ったプロポーズ
何もせぬ今日一日を労わられ
花束を抱いて今日から姑となる
今日の風読む玄関の白い杖
有難い今日を満足して生きる
囲まれていると気付かぬ影法師
旅させた子が独学という誇り
学校が安全だったのは昔
生涯を学ぶ人人生さわやかに
囲まれて明日は待つたに指定席
賑やか为好きで何かと囲む膳
拉致家族囲む食卓母の味
列島をぐるりと囲む波が吠え
老いてなお学びたい事多すぎる

寿子 好道 泰良 余吏子 雅子 静子 俊路

良一 克子 和子 寿子 富美子 三男 准一 太茂津 さち子 裕美 豊太 夕胡 輝子 順子 和香 美子 文代 利治 三喜夫

数学が得意で下手な金儲け
先人の知恵を棚田に見る美学
喉仏は男のエキスだと思っ
乳房からエキスころへ含ませる
エキス一杯詰められ子等は疲れ気味
一滴のエキス貰つてマイベース
百葉のエキスで今日も終電車
最高のエキスは妻のいい笑顔
百寿までエキスを杖に未だ逝けぬ
喜怒哀楽囲む仲間が居てくれる

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

髪染めぬ母が一番母らしい
ジレンマも髪もはつきり切る決意
髪切つて仕切り直しへ風清か
つややかに波うるわしく総白髪
どうしても真似の出来ない品の良さ
昼一人モノナリザの笑み真似てみる
父の道とおれば父に叱られる
ことごとと蓋が動いて嘘はれる

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

なんとなくいつしよに居たいいい仲間
どたん場で仲間裏切る風見鶏
仲間には内緒で恋がスタートす
同病の仲間命の重さ知る
流れたのは仲間外れになった星
ざらざらの母の手にある応援歌
アテネまで応援したい糸電話

正博 和代 保州 あき子 泰女 英子 和重 稚代 佐良 緑良

慶子 欣史子 加津子 香住 能子 喜美子 シマ子 あずき 一壺 章司 吐来 悦子 美代子 専平 りつえ

この夏はZONEが歌う応援歌
松井には英語のヤジも応援歌
母さんの応援あれば恐くない
紫陽花を応援してる雨蛙
リコールの声に静かな町が揺れ
リコールが遅れて屋台骨軋まし
リコールが怖くて墓穴掘りました
回転ドアリコールを穴の目を覚悟
化粧品増えますますます深い皺
褒められて薔薇はますます美しい
正論を通しますますます増える敵
ますますの混迷増えるイラク戦
年金がますます減っていく政治
嬉しくてますます好きになるお人
会う度にますます好きになるお人
不精髭ますます貧相な顔になり
疎まれてますます好きになる不思議
待たされてますますつのる恋心
母が詰め父が縛つた箱が着く
バンドラの箱こじ開けたのはブッシュ
走り梅雨台風までも連れてくる
孫のため護憲の党を応援す

南大阪川柳会

吉川 寿美報

ことさらにとんちんかんのねんきんほう
頓珍漢夫婦ふたりでわかりあう
種棒は母の財産手打ちそば
妻の愚痴うどんつるつる聞きながら
めしよりもパンより麺がいつち好き

かつみ 耕策 ヨシ枝 泰子 庸佑 ダン吉 重人 扶美代 久仁子 みつこ 久仁雄 昭平 フジ 喜久子 たけし 遠野 いさお 志洋 一知 六一点 真一 敏

初太郎 叡子 シマ子 章久 千梢

屋台からそば屋目慢のたたき上げ
 女装してみても隠せぬのど仏
 変装が映えぬ真冬の雪おんな
 年号がどう変ろうと不戦国
 年号が変れど明日は変らな
 年号変り男また弱くなり
 平成元禄どっぷり浸っている平和
 平成に明治女の意地を見る
 年号の違う夫婦は食い違う
 年号順に並ぶ遺影に亡母の笑み
 年号を静かにまたぐ除夜の鐘
 年号の修羅場に耐えた古時計
 行くよりも安上がりだと長電話
 ずる休み告げて電話を撫でている
 母と子をそなぐメールで塾梯子
 留守電に老母丁寧他人めく
 欲しがらぬ老母へ電話で喜ばす
 持ち変えた電話真面目な顔になる
 ありがとすぐ来てくれた一九九
 巨神戦の夫無視して長電話
 素うんととつかい声で言うてみる

西宮北口川柳会

黒田 能子報

憲太郎 弘泰 雅文 三男 宏 遠野 寿美 直子 タカ子 柳伸 朝子 千里 柳弘 たもつ なぎさ 志華子 ひさ乃 重人 萬的 ダン吉 求芽 哲男 紀乃 萬的 嘉彦 いわゑ

欲出して貰った米に虫がつく
 どしや降りる屋台爪先から湿る
 湿らぬよう封印をした恋の味
 肩先の濡れにタオルのいい匂い
 一言の優しさ湿る老いの身に
 歩く時少し傾く癖がある
 呑み足らぬ顔して鈍子傾ける
 レコードに耳傾ける古い歌
 右傾でも左傾でもない平和主義
 逆もまた真なり耳を傾ける
 紙を食う虫かも知れぬシュレツダー
 署名捺印急に重さをます紙片
 張り替えた障子に孫の指のぞく
 推敲へちらしの裏で句が生まれ
 紙の鶴あなたを視野の中に置く
 障子穴紙花びらに切つて張る
 寄せ書きの色紙に過去が生きている
 紙切れの重さを知った異動の日
 割り切ろう失敗成功紙一重
 子の真似る親の背中が軽すぎる
 保険証がフル回転になる余生
 忘れ物あわてて脱いだ靴の向き
 老化には逆らうまいと白髪梳く
 付加価値を付けてロボット今日もゆく

川柳さんだ

北野 哲男報

トミエ 石舟 哲子 てる 絹 歳子 静子 昭 貴代子 庸佑 鹿太 嘉代子 涼子 曙蝶 美籠 奮水 比ろ志 光久 江美 能子 五月 光子 良恵 孝一 順子 歳子 開子 順子

ひとしづくそれから母は強かった
 言うたもん勝ちやと思うかたつむり
 初夏の旅カナダの山脈は雪化粧
 失敗のケースに僕を取り上げる
 ライスシャワー雀も祝う新夫婦
 年金を下げる通知が梅雨に来る
 女帝の世きつと来ますよ雅子さま
 古本の中から火の鳥よみがえり
 居直つて逆に読まれていた誤算
 周五郎手に旅先の雨を聞く

三幸川柳教室

古久保和子報

義男 当代 清史 准一 碧 光男 次根 さち子 公子 かずみ 純子 靖子 千秀 美子 かず子 幸 ね

惶めいた吾が青春の詩の跡

煌めいている子供は怖いもの知らず

ライバルが煌めいている孤独感

煌めいて人の痛みがわからない

煌めく夢一杯積んで始発駅

とっさには変えられそうもない空気

突然の指名スピーチ本音吐く

ある日とっさに貼り紙に遭う不況風

ブレキをとっさに利かす脳と足

薔薇の刺とっさに浮かぶ三人

キスをさせようたくしやみをしてやろう

募金箱とっさに下を向いて行く

落ちたとはとっさに気付かない椿

川柳塔まつえ吟社

三島 淞丘報

時どきは覗いて見たい玉手箱

時どきはカモメと風の歌を聞く

とどきは善人の振りをしてみよう

時どきは針千本を飲まされる

時どきは雷落とす父である

公約を忘れ時どきボロを出す

巧妙な仮面の糊を練っている

肩拍を張った仮面がはずせない

剣が峰面かながら捨てるとき

花形と言われ仮面が外せない

仮面脱ぎ本音で語る人に会う

極楽へ行ける仮面をつけている

この指はいろいろ秘密知っている

信子 登美代 三千子 朱夏 イセ 嘉平 智三 昇 章子 保州 起世子 和子 昭二 知恵子 すみこ 節子 茂美 たけし 多喜 房 蘭 政子 蛭 注 湖 治代

指先がきれいで人に見せられぬ

ひたすらに女でいたいくすり指

指の先一途なものを吸うて吐く

幸せが指の先までいい笑顔

オーダーに迷う聞きなれない料理

糸口を見つけて迷い解けない

迷うこと何にもないか砂時計

鉛筆の芯が迷ってばかりいる

どの色に迷う自画像まだ未完

俄か雨ひらひら蝶が迷い飛ぶ

ポケットにいつも握っている元氣

八十路坂まだ登れそう骨の音

空元氣大きな声でケセラセラ

母元氣笑い葉を持っている

口八丁手も八丁でまだ元氣

夕方になると元氣な腹の虫

倉吉川柳会

竹信 照彦報

とんでもない裁判員が出て来そう

紫陽花が俺の季節と賑やかだ

農業が陽炎になるゴルフ場

宝クジ全部を買ったと当るのに

運命の電池が切れるまで生きる

紫陽花が夕べの雨で若がえり

紫陽花の道の向こうに寺がある

八十路まで一途に生きた振り向かぬ

あじさいの咲く頃孫がひとり増え

紫陽花のような女と褒め言葉

あじさいのお色直しも目の保養

邦代

多賀子

章峰

ちえこ

芳山

玲子

きみ子

昌枝

澄子

幸子

桂子

義良

静恵

紫見

浜丘

叮紅

玲坊

季芳

完司

重忠

石花菜

日出子

蛭

ゆり子

和枝

よしえ

秋草

推薦したらとんでもないと辞退され

がれきの下でヒイフウミイと生きていた

ゴルフツアー看護師さんもついて行く

どう生きて一人ぼっちの丸裸

とんでもない空想をしてウフフフ

山中に紫陽花があり人が住む

紫陽花の心変り人が人を呼ぶ

むしやくしゃがホールインワンかつ飛ばす

ゴルフ場の芝が加勢を入れてくれた

生きていての喜怒哀楽を入りませて

拉致して金を出せとはとんでもねえ

生きたとは結局一人夢芝居

ゴルフ場狭い日本が広く見え

太っ腹とんでもないサ見栄ですよ

とんでもない大金星の北勝力

御破算の出来ない人生味が出る

老いてなお手綱ゆるめて生きていく

農繁期ランドゴルフしておれぬ

明日も目を開ける保証は誰もせぬ

高知川柳社

川竹 松風報

靖国の参拜批判ナンデタロ

ひたすらに批判に耐えているトップ

批判する口もやっばり批判され

眉ひそめじつと黙っている批判

結び目を解きた時もあり夫婦

文句など言わず自分でやってみる

ご苦労さんその一言で軽い肩

肩貸した男も同じ千鳥足

京子

園喜美子

睦子

肩書きが取れて本当の味が出る
肩ポンと友がいつでも来てくれる
汗かいてるうち治る五十肩
肩の荷を降ろすと老いが忍び寄る
なで肩の男を甘く見てしまふ
東京が見えるかと聞く肩車
親と子の絆と思う肩車
肩少し揉まれて怖い話聞く
肩の荷が下りて寂しい桜観る

川柳クラブわたの花 吉村

時どきに本音そのまましゃべりたい
あつさり白状されて拍子抜け
立ち直るチャンスをつくれたいい笑顔
いそいそと女房が先に事はこぶ
いい調子今日は信号青ばかり
盛大に終えて褒め合う幹事たち
生き生きと働く母の背に学ぶ
天才の運トネルにまだ寝てる
またとないチャンスだったと今思う
歳月は人を持たずに過ぎていく
激励も逆に大きなプレッシャー
野暮天と言われ人生一直線
忘れ上手生きて余生の酒うまし
宝くじ並ぶあいだの戎顔
歳月の重さに堪えた鬼瓦
悪口は消化よろしく胃にやさし
若い日の夢がだんだん干からびる
巡り合う千に一つのチャンス待つ

和江 悦子 圭風 てるみ 佳風 美々 松風 京子 まさ子
一風報

抱いた子が整形前の妻の顔
幸運がそれと気付かず通り過ぎ
化ける術明かしてみせる電車内
父さんの一家支えた太い指
宝くじ運だめしから癖になり
うちで一番艶っぽいのはアマリリス
白寿の寡小さくなつて座る母
糸通し孫にまかせた釘つけ
余白には書けぬ想いが込めてある
煩惱の鬼と仏の心抱く
年忘れ夢追いながら生きている
まだ五欲抱いて仏を速く置く

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

雨傘が無事帰るとき恥をかき
雨を待つくちなしの花まだ咲かず
雨の音聞きつつ眠る早一時
本山のゆつくり崩す雨籠り
朝市に寝なき鶏の逆さ吊る
まな板に寝たい鮫鱈吊るされる
吊り替えて四季を楽しむ画を掛ける
父の日に父は居場所に落ち着かず
茶柱が明日の命を温める
あの人の声全身が耳になる
雨は音楽風は伴奏眠りつく
さざ波が怒濤となりし少女の殺意
逢える日はいつあじさいの雨が降る
年金を減らし貧乏神奇越す
城山をただよう日にも碧いおだまき

恭一 浩三 正純 一道理 (本)たえこ (赤)妙子 ますみ 敏男 まさと いつふみ 多賀子 義明 昭三 正子 千恵 年代 純 勝巳 幸子 久子 寛之 紀乃 武庫坊 光穂 和子 東園 薫

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

濃紫陽花みずに流せぬことひとつ
流れ矢のうしろにいのちきざむ音
父の日にじんわりもらう子の意見
吊り橋にゆらね絆が太くなる
影だけが私の運についてくる
見えすいたお世辞あつさり聞き流す
悔いのない喜劇演じていく命
ささやきに乗ってシマツタ落し穴
酒酌めばほんにうららかな春日和
五尺の身にいつぱいつまってる辛抱
それなりに耐えて仲間の和を保つ
辛抱は他人にさせているほんほん
ライバルと並ぶと家に帰りたい
極楽の方へ並びたがるヒト科
並びたてた不平等が小さくなる
北のこけし並べて日本海荒れる
女形隠しおせぬ喉仏
喉もとに返せぬ恩がひつかかる
喉元を過ぎて忘れたいがい恋
喉元を過ぎれば悩み軽くなり
辛抱を重ねるたびに細る夢
まだ未練傘のしずくが振り切れぬ
雨がえるあじさいの上ハイポーズ
雨の中あじさいの寺は傘の花
雨の雫かぞえて眠れないふたり
雨あがる駅に届いた傘の山
紫陽花へ身仕度せかず雨近し

芳子 弥生 一風 とみを 宏至 欣之 頂留子 弘直 シマ子 柳伸 幸生 芳香 美代子 ダン吉 アキラ 千里 欣子 菜月 更紗 加津子 巳代一 あかり ますみ 秋雄 まつお さらり

雨ばかり濡れる相談杖にする

川柳塔みちのく

小寺

花菱報

博仁

名も知らぬあなたの背中母と似る

逝く日のケルン積むため初登頂

若い友の尻尾が取れぬままに老い

気を若くまつ赤な薔薇を買って来る

十三夜隣の屋根に登りゆく

岩木山よくぞ登ったその昔

百歳のファンと滑走する若さ

山小屋に登山を誘う謎がある

朔日山かけた父つちやは誇らしげ

おねだりをははの背中に書いた指

充電の済んだ背骨を見せたがる

泣き言は言わぬが背中耐えている

子に残す寡黙な背中未完成

浮気する夫に食わず背負い投げ

何枚も翼を持っている若さ

少年の欲望ギターかき鳴らす

川柳ふうもん吟社

杉本

孝男報

洋々

益子

一瑤

博仁

洋子

あすなろ

きよし

ヒサ子

てる

隼人

順風

銀波

花匠

雅城

黙人

慕情

花峯

一花

五楽庵

孝男報

洋々

金祥

節子

裕子

三津子

益子

一瑤

気の毒ねいいえ自分で蒔いた種

悪口を言われてるのか背が痒い

二度とないチャンスいいえと言わせない

年金のくらしに馴じむ小銭入れ

自家用車まで若い若く奮起する

鏡見ていいえ若いと奮起する

悪人マリアの胸で眠りたい

二代目にリースの椅子が大きく過ぎ

リースでもそれと見せないこの容姿

家中にリースばかりの機器を置き

いいえ私は自分の道を歩みたい

悪代官未納の金で酒を呑む

ひとりぼっちいいえお酒と月がある

善悪を転がしながら生きている

いいえなど言うから後でやこしい

時代ですリースで田植いい響き

いいえもう明日の事しか考えぬ

悪運に強く私は今もいる

三面が悪事で埋まる世の乱れ

空梅雨たいいえこれからきつと降る

悪い癖やっぱり出たよ言い逃れ

川柳工スボ

山本

三郎報

昌鼓

一京

茂登子

善夫

志緒

義徳

由美子

無限

諏訪男

宗務

宗明

暢夫

きみ

一粋

秀夫

初江

千代

雅女

圭一郎

毅

行男

孝男

三郎報

山本

雨音に起きる気もなし日曜日

鯉職バタバタはねて初夏泳ぐ

足元に音もなく散る花の道

真夜中にサイレンの音胸さわぐ

春の音どじよつこふなつこ起き出した

経を読む声も時には騒音に

東京に快音響く大リーグ

神の名で軍靴の響きあおり立て

静かさに鳥の声のみやし風呂

朝刊は単車の音で投げ込まれ

風の音花をよがせて美しい

篝火の猛て水面を焦がす音

音楽は心を癒す私流

ジョンガラの音色はきびし北の海

酒飲めば人の本音が見えて来る

岩美川柳会

石谷美恵子報

サミットは粒揃いでも来ぬ平和

朝市の粒の揃わぬのがうまい

それぞれの味で集めた粒揃い

歳月が上下をつけた粒揃い

よるこびのかけらで盛り分ち合う

カステラのかげらで誘う池の鯉

これが指これが大事な喉仏

政雄

団地

れい子

ゆき子

さとし

さち子

一炊

文好

とよ子

星花

鈍甲

みさと

一幸

昭一朗

忠良

一京

一瑤

一粋

重忠

芳光

重忠

重忠

重忠

重忠

まだ息をします子供の狂喜
 再婚か深呼吸して考える
 眠れない夜繰返す深呼吸
 針に糸呼吸止めても通らない
 人混みの中で酸欠気味になる
 呼吸器は正常ですが音痴です
 緑なす庭で満喫深呼吸
 五十年呼吸合わせてよく来たな
 産れ出て天上天下指した彼
 どの服もみんな彼氏に見せる服
 かたつむり彼には彼の夢がある
 夕闇の彼方に消えた恋虫
 気まぐれに年金持つて旅に出る
 気まぐれな天気か船が落ちつかぬ
 気まぐれか愛が一瞬考える
 人脈のかけらが欲しいノンキャリア

むらくも川柳会

毛利

和歌子 幸報 安男 定子 宣雄 克子 彰子 秀子 幸夫 信夫 英男 美保 明朗

春の音じつと聞いてたこはれ種
 また逮捕議員のニュース派手になる
 ふくらんだ蕾に無情の雨が降る
 友情は最後の杖と決めている
 風の道里が元気をくれました
 廃屋を次々整理街変わる
 陽春に伸びた庭草取り除く
 眼に見える孫の成長頼もしい

岬川柳会

八十田洞庵報

恵美子 ます美 八重子 ふさえ 喜美 寿 美喜子 昭子

胸のうち先に読まれて助言され
 舅への返事に夫が助け舟
 損な役長男の嫁なり手なく
 助け舟出し過ぎ子供駄目にする
 葛藤をたつぷり包み義母を見る
 たつぷりの愛も届かず歪む子ら
 梅雨空に麦とろ食べて髪を結う
 まだゆとりたつぷり食べてダイエツト
 こだわりも消えて損得ない仲間
 たつぷりも遊んで平和だと思ふ
 汗拭い薫風受けてにぎり飯
 ふり向けは転覆してた助け船
 年金の損の世代にいる子供
 政治家の自信たつぷり崖つぷち
 損と得ちゃんと知つてた尻のにくさ
 土壇場のあわやに賛成くれた人

翠洋会(吟行)

六吹 尚士報

カラフルな葉に潜む副作用
 コーラスで声をはり上げ良き薬
 薬膳へ長生きしましょ少しでも
 薬膳へ血がさらさらと流れ出す
 印籠にどんな秘薬が水戸黄門
 合掌の祈り薬として生きる
 解毒剤のんであなたの妻でいる
 飲んだこと忘れまますので仕分けする
 ノラリクラリ劇薬たまに処方する
 古いなアだけど気になるいい歌だ
 今日中に食べておかねば古くなる
 じいちゃんの自慢話が止まらない
 昨日は過去に古新聞が溜まる
 シヤワー全開古い頭を洗つてる
 母はまだ古い字引きが捨てられぬ
 横車押す古顔がいて困る
 室生寺を賑やかにして翠洋会
 階段を見上げて拝む奥の院
 暁に一度は見たしきさぎの院
 どくだみ草にがみかくして白く咲く
 室生寺の苔むす樹々に癒される
 華やかに薬師如来のおわす膳
 薬草の賄い所宇陀の町

長柳会

加島 由一報

正雄 れんげ 会美 富子 富子 千梢 理恵 舞夢 蕉子 みつ子 日の出 義 志華子 楓楽 石舟 笛生 桃花 春 水昇 良一 尚士 恭昌

明信 武男 正一 輝子

特売の薬効き目を割り引かれ

昭

女の子球を蹴り蹴りアテネ行き
 パンフ見て夢は膨らむ旅プラン
 蹴とばされ空き缶もって腹すべし
 夫にはもらつたものだと言つておく

蹴とはして猫にうつぶし晴らす妻
 夫婦喧嘩も寂しいものとなつていく
 蹴とはして見たいと思う自分の背
 好奇心弾んだ足で老いを蹴る
 肩の荷を下ろした夫婦の日向ぼこ
 風雪に耐えて生れた夫婦愛
 旅立つた友へ初盆天野酒
 苛立つた友へ小石が泣いている
 親をみて明日の我が身を想う日々
 旅先の小さなロマン軽い罪
 足腰の丈夫なうちに遍路旅
 話す事なくて退屈夫婦旅
 金婚を祝う写メール花菖蒲
 職退いて妻に傾くやじろべえ
 同じ物食べて顔まで似た夫婦
 二人旅歩く行末がずれて行く
 何時見ても繋がれている夫婦岩
 やんわりと蹴る口実にも花も添え
 旅終り今朝は我が家のお味噌汁
 胎児に蹴られ至福の中に母となる
 危険水位越えた日もあり共白髪

川柳塔おとり

岸本

宏章報

マサ 由一 一慧 芳野 和代 たくし 正子 潤子 靖博 幸雄 ひろし けい子 直樹 富美子 正美 史 淳司 三和子 良男 敬二 和子

以和方津 舍人

うぶ湯から末期の水で幕閉じる
 水ゴクリよどんだ命よみがえる
 泥水を飲んで鍛えたど根性
 蟠りに流して仲なおり
 もう一杯不老長寿の水をのむ
 故里の湖水に浮いている童話
 水はねるトマトの肌にしつとする
 涼しさを水に浮かべる冷奴
 自衛隊イラクにつらい水あたえ
 標準語紡ぎ都会の風となる
 リズムよくトントンカラリ機つむぐ
 二人して紡いだ月日悔いはない
 日記帳思い出紡ぐ糸くるま
 計算のながてな婆が機を織る
 戦争は紡いだ心切れ切れに
 古い二人紡ぐ月日の早いこと
 歩く道一人肩くみ愛紡ぐ
 紡ぐ手のシワに自信があふれ出る
 ひたむきな汗が明日の夢紡ぐ

川柳ねやがわ

森

老いてなお青春ごっこしています
 アルバムの中で青春語り出す
 青春を詰めた私の玉手箱
 青春の芽に母さんは翼くれ
 青春の思い出よぎる熱戦譜
 午前さま拔足さし足急ぎ足
 遠近両用恋のチャンス盗まれる
 私を盗んでくれと迫られる

由多香 艶子 黙光 庸二 登 彩子 ヒロ子 登美 小生 和子 知恵 孝子 一弘 富貴子 道子 清子 松枝 真一 宏章 茜報 忠央 栄二 高栄 一風 庸佑 一笑 柳弘 修

唇を盗まれてからのち燃ゆ
 新情報今か今かの社長室
 儲けてるうちは気楽な社長業
 腹心の野心を社長見抜いてる
 大家族しきる社長は僕の妻
 合理化へ泣いて馬鹿を斬る社長
 草団子里のやさしい香りする
 草団子亡母を越せないなと思っ
 団子汁草話を孫にする
 一塊の団子になってきたチーム
 寅さんが居るかも知れぬ団子屋に
 団子汁困むひろりにあつた幸
 団子食う美人の鼻が丸うなる
 仲のよい夫婦と人に見られてる
 ひと粒の種といのちの話する
 訪朝に期待と不安拉致家族
 歩いて歩いてパイオリズムをとり戻す
 取り敢えず寿司でも取るか不意の客
 学卒も情け無用の青テント
 反抗期などはなかった飢えていた
 無いなどと言っから牛丼食べたがる
 連休は家でと年金指図する

いずも川柳会

佐藤

治代報

蒸し暑い梅雨のはしりの空模様
 揚巻雀計つてみたい高い空
 寿命延ぶ新茶のはしり吞める幸
 現代人はしりなどには無頓着
 初物に生きる元気を貰います

弘一 頂留子 博泉 亜成 勇太朗 仁清 一炊 恵子 日出国 とし子 さち子 寿子 朝子 たもつ 三郎 利昭 勲 かすみ 弘風

暮れかかる店ではしりのブドウ買う
 多輝子 啓三
 ふかし羊売りの秋を手に触れる
 治代
 触れないで下さい桃が傷みます
 幸
 父の壁余り高くて登れない
 高位の高い仮面が笑わない
 高いとばかり狙って蹴つまずく
 本音吐く汗をきれいに拭いてから
 歌子
 はしり梅雨紫陽花やつと綻びる
 キミエ
 市場籠はしりが顔を出したがる
 蘭水
 触れるたび好きな桃から叱られる
 玲子
 おんころころほらね次第に眠くなる
 美佐子
 また一つ越えねばならぬ高い壁
 満江
 軍手には汗の匂いと穴がある
 桂子
 汗のあと今日一日を振り返る
 多喜
 触れないで下さい今は静電気
 久子
 ふるりの敷居が高い頼み事
 房枝
 初ものを食べて継ぎ足す余命表
 昌枝
 目の高さ揃えて子等の話聞く
 まこと
 時という薬次第に効いてくる
 寿美
 いい汗をかいてわたしの生ビール
 茂美
 哲学書目に触れてから偏頭痛
 多賀子
 吟味してひと箸ずつのはしり食う
 きみえ
 黙って生きて黙って流す父の汗
 文子
 わたくしの汗に尻尾を振ってくれ
 章峰
 汗かかぬ人が大きなりボン付け
 ちかし

ローズ川柳会

山崎

君子報

母川回帰の蛙に似て来た母の顔
 正直者を素直じゃないと今は言う

てくる
 キク子

川育ち鮎は高値の華となり
 意地張つてこめんなきいねお亡父さん
 立葵几帳面に咲く庭の隅
 素直な子仮面の下を誰か知る
 海へ来た川は役目を終えて消え
 自立する気構え見せている歩幅
 星見えぬ都会の空に夢がない
 五百円玉貯めて密かにもくろみぬ
 ふるさとの海素直になれとザンブザブ
 台風一過花の寝息をそつときく

川柳藤井寺

高田美代子報

借金を断りたいが借りに来ず
 お断りするよりされる方が楽
 断りを言いに来たのに呑まされる
 父さんの授業参観お断り
 断れと妻が横から目で合図
 断つてしまえと胸の鬼が言う
 極楽も一見さんは断られ
 母と娘の会話が弾む父の留守
 傘一本梅雨のおしやれを考える
 九十歳禁酒禁煙するという
 今になって年金未納の鉄面皮
 好きだったと言われましてももう六十路
 今更と言うけどエステ夢が湧く
 煩惱はもう捨てる気の余命表
 泣き笑い今更人間やめられぬ
 覆水进行更掬う苦い汁
 賢沢に慣れて我慢のできぬ舌

藍
 哲子
 トミエ
 貴代子
 孝一
 美籠
 武庫坊
 年代
 義子
 君子
 喜代子
 登志子
 かつみ
 栄一
 志洋
 扶美代
 一筒
 雅枝
 悦子
 婦美枝
 耕策
 桂子
 アヤ子
 重人
 弥生
 龍一
 六点

花筏もう済んだことすんだこと
 わがままに気付いた時は四面楚歌
 外れても夢ありがとうハルウララ
 あの頃は小百合のように見えたのに
 雑踏はずれてふたり夢の中
 メンバーが揃うと僕がはずされる
 音程がはずれてもいい老母の唄
 約束をいくつはずした白い指
 疑いはずれて踊りだすカルテ
 常識を外すと見えてくる本音
 お世辞だとわかっていてもいい気分
 先頭を視野に離れず持つ自信
 回り道打たれ強さを身に添える

サークル檸檬

西出

楓葉報

手の届く所にあつて気づかない
 すれ違ふ他人悩みはなさそうだ
 長生きの秘訣時々休むこと
 夕西いのちの果てもこのように
 ここからは来たらあかんと線を引く
 真っ直ぐにひたすら生きた父の靴
 雑草のプライド手入れなどいらぬ
 直線が好きな男の正義感
 直線のひとつに泣いたあみだくじ
 刑法に市中引き回しをつくれ
 届け先誰も知らない街にいる
 手のぬくみ直線そつと曲げてやる
 今が旬心はいつも春である
 歳とともにどつぶり嵌まる天の邪鬼

みつこ
 美代子
 恵勇
 淳司
 瑠美子
 昭子
 絹歌
 鐘造
 欣之
 アキ
 いさお
 庸佑
 一知
 たもつ
 希久子
 千代
 楓葉
 節子
 美籠
 いわゑ
 みつ子
 遠野
 棲世
 哲夫
 あずき
 光久
 義子

封印にひっかき傷が出来ている
父の檄 直線で落ちてくる

堺川柳会

河内 月子報

房 子
扶美代

美しい八重歯ぞくつとする笑顔
ハンサムな医師で痛い自我慢する
歯も顎も美容整形した娘

半 銭
小 雪

白い歯を出して本音で勝負する
梅干し歯もし喋るなら亡母の声
ふと思う宇宙のゴミとなる地球

な ぎ さ
梓

貯えがなくても今をたのしもう
なんやかやまめな人です子沢山
梅桜さつきと妻は留守ばかり

日 の 出
舞 夢
冬 虹
五 月

何事も真面目に受けてこうるさい
なんまいだまだお迎えに来ないでネ
羽根生えてきたら宇宙は広い庭

か り ん
泰 子
さ くら

川柳塔のぞみ

日 時 8月25日(水) 13時から
会 場 人形町区民館TEL03-3668-5537

課題と選者 (各題2句・自由吟のみ1句)
「腰」 江畑 哲男 選
「ちゃらんぼらん」 未 定 選
「アップ」 奥田みつ子 選
「自由吟」

投句方法 句箋または便箋(清記します)
8月23日(月)締切・80円切手3枚

投句先・連絡先 TEL・FAX 0426-65-3172
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3
播 本 充 子 宛

呑気そうなお方にもある深い皺
もし過去が喋り出したらどうしよう
ほけたのか呑気なのかと考える
何辺も回り道してここに来た

俵 子
扶美代

生意気な孫になったところぼして
夫婦してもしも呆けたらどうしよう
ナイスイマイトガイ今孤老です
疼く歯は生きてる証握り難くない

朋 月
玄 也
忠 敬

爺ちゃん呑気でいい難くない
笑う日もある呑気な風を待つ
なにしても眩しく見える紅一点
涙から真つ赤な嘘が軋げ出る

鐘 造
好 山

難儀やなあ魔女がそろそろ更年期
もしなんて考えているヒマがない
噂だかもしほんとなら許せない
歯が元気なのでなかなか痩せられぬ

つ づ や
恵 勇
公 誠
天 笑

呑気そに見えているけどいらちな
月 子

天 笑
月 子

第46回和歌山市文芸まつり作品募集

募集内容(一般の部)

川柳3句(未発表作品)
〒六四〇一八二六八

送り先 和歌山市広道20 第2田中ビル1階
和歌山文化協会内「文芸まつり係」宛

締切 9月10日(金) 必着
文芸まつり次第

日 時 10月31日(日)
場 所 和歌山市発明館6F 多目的ホール
午後1時から合評会及び当日課
当日会費 五〇〇円

第12回 和歌山県川柳大会

と き 9月5日(日) 11時開場

と ころ 和歌山J.A会館(JR和歌山駅前)

参加費 一、五〇〇円(軽食・発表誌呈)

事前投句 ハガキに二句(欠席投句も可)
(締切・8月15日必着)

当日出句 出句締切 12時30分
「古」 谷平こころ選

「脈」 崎山 千代選

「配」 高木みのり選

「野菜」 桑原 道夫選

「熟」 大炭 暁星選

「歴史」 三宅 保州選

出 句 各題二句以内(未発表作品に限ります)
出句料 一、〇〇〇円(当日欠席の方は「古」
のみの投句可)発表誌・送料を含む。
現金書留・定額小為替

郵便切手は代用出来ません。
その他 事前投句は専用の投句用紙、または
官製はがきに縦書きで二句連記

住所、氏名(雅号)、電話番号、当
日参加、欠席の有無、懇親宴の出
欠の有無をご記入下さい。

投句先・お問い合わせ先
〒六四〇一八四八二

和歌山県川柳協会
川上 大輪宛

主 催 和歌山県川柳協会
〒六四〇一八四八二

和歌山県川柳協会
川上 大輪宛

和歌山県川柳協会
川上 大輪宛

柳界展望

☆奈良新聞川柳欄03年選考
会受賞者は次のとおり。

〈課題吟佳吟賞〉

ラーメンをすすする素顔に

なっている 大内 朝子

〈自由吟佳吟賞〉

柔らかに柔らかに押す車

椅子 出口セツ子

受賞者は7月25日の奈良新聞川柳大会で表彰された。

▽人事動向△

□いずも川柳会は前会長死去のため、竹治ちかし氏が

会長就任。

□南大阪川柳会は寺井東雲

氏にかわり、前たもつ氏が

会長に就任。

□天笑主幹は6月12・13日

第28回全日本川柳埼玉大会

に出席のため、さいたま市

川柳塔創刊八十周年記念合同句集
『川柳塔』の残部が少々あります。
ご希望の方は事務所まで申し出て
下さい。

頒価五、〇〇〇円（送料共）

B6判上製本1034頁

行。

□薫風名誉主幹は、第5回

文学ルート川柳の二次選の

ため、6月25日尾道市行。

▽御厚志拝受△

□宮園射月芳氏（参与・貝

塚市）より、亡夫人供養と

して金一封を拝受。

▽計 報△

□生嶋嘉蔵氏（同人生嶋ま

すみさん夫君）、7月7日

逝去、85歳。

▽削除並びに訂正△

7月号ⅡP98中段12行目、

思い上がった…… P117下

段11行目、身に余るおほほめ

言葉…… 以上2句を本人申

し出により削除 P143左

常任理事会Ⅱ7月7日(木)出

席16名 ①合同句集発刊作

業終了及び發送日報告 ②

80周年・10回まつりについ

て一選者変更、各担当者決

定 ③二賞選考日程 ④16

年新役員選出 ⑤来期予算

請求（会計）、新同人承認

5名（同人部） ⑥その他

高野山合祀の件 大阪川柳

大会の件 ほか

次回常任理事会Ⅱ8月5日

13時アウィーナ大阪

新同人紹介

亀井円女

—天笑・紫香・みつ子・充子推薦

坂本蜂朗

—岳人・四郎・正剣推薦

執行稲子

—諷云児・美籠推薦

福西茶子

—由多香・諷人・螢・盛桜推薦

吉田弘子

—由多香・諷人・螢・盛桜推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 開ける・それとなく 沈黙・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締切り 船・少年・条件・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から プラス・裸足・やがて・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から 叫ぶ・写真・命・遠花火 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
城北 川柳会	21日(土)午後1時締切り 泡・温度・ふらふら・自由吟	神徳会館 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏燾典子
岸和田 川柳会	21日(土)午後1時半から 老ける・べたつく・方法 交わる	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘7808-307 長谷川昌万
八尾市民 川柳会	22日(日)正午から 第51回 八尾市民川柳大会	7月号 (P.59参照) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳 ふうもん 吟社	22日(日)午後1時から 罰・ヒロシマ・どんと来い	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
はびきの 市民会 川柳会	22日(日)午後1時から 靴・けらけら・ユネスコ 「低い」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳塔 みぞくち	23日(月)午後8時から 踊る・影・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	25日(水)午後6時から 汚点・古典・存命・鈍才	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から 星・粘る・背中・溢れる	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	28日(土)午後6時から 両手・雲・嫌い・袋	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
京都 塔の会	30日(日)午後1時から 俗・怖い・帽子	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	7月31日(土) 第22回 夜市川柳大会	7月号(P.54参照) 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 な ら	4日(水)午後1時から あっさり・袋・役目	奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口徒歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	6日(金)午後1時から 踊る・光・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	7日(土)午後1時から 切る・内・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	7日(土)午後1時から ビタミン・おんぼろ・嫌う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 まつえ	7日(土)午後1時半から 握手・再会・泡・くぐる	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から ルーツ・充電・譲る 「もの(物)」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 気丈・冷たい・うろこ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
川柳塔 唐 津	9日(月)午後1時半から 副・ちゃっかり・生む	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 夜明け・謎・浮かぶ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後1時半から 毒・買う・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
川柳塔 打 吹	14日(土)午後1時から 丸太・からから・背く	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博丈
川柳塔 みちのく	14日(土)午後4時から 大胆・みがく・にやにや	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 藤 井 寺	15日(日)午後1時から 蜘蛛・さわぐ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公団1-105 高田美代子

編集後記

☆一賞応募月になりました。

106・107頁の選考規定をご覧

の上、同人・誌友の皆さん
全員応募して下さいのを、
待っています。この大きな

節目の年に栄冠を射止め、

花束を抱かれるのは誰だろ

うと、この後記を書くベン
にも何やらリキが入る。

☆「あれもこれも身体に良

いと食べ過ぎる。柳石子」
近年テレビをつければ「一

億総健康おたく化」の様相

を呈している。ちよつと視
ただけでも以下の通り。蕎

麦は血圧を下げ、北海道産

の山わさびを食べると、本

わさびより血液をサラサラ

にし、食欲も増進する。肌

のトラブルは体内免疫力が

落ちている証拠だから、胡
麻やプロコラーをお昼に
食せよ。

☆DHAを含有している魚
を摂れ、カテキンの入った
緑茶を飲もう。血が濁ると

血管が詰まるから寝る前に

たっぷり水を飲め。やれ紅
茶だ生姜だ、蛸だ、烏賊だ、
お肉だ……あーしんど。

☆食べ物だけでなく体を動

かすことも必要。ウォーキ
ングはもちろん、脳や足腰

を鍛えるために、ああせえ

こうせえと有難い指南。果

ては視力をよくする方法、

若々しい声を保つため五分
の発声を一日三回せよ等々。

☆まるで一日中食べて一日

中体操していないと、悲惨
な老後を過すことになるぞ、
と言わんばかり。片や目に

ついた本の新聞広告は、「粗

食のすすめ」「水分を摂りず
ぎるな」。読んでないから内

容は不明だがテレビとは相

反する。一体どっちが本
当？「情報の海で自分を見

失う「みつ子」

(ふ)

ひとつこと

記念句集刊行を祝う

完成したばかりのズシリと重い

「川柳塔創刊八十周年記念句集」を
手にして私は今、感慨にひたつて

いる。昭和49年発行の同人句集第

一集は、蔵書として持ってはいる
が、私が同人になって間もない同

59年発行の「川柳塔誌寿遷暦記念
句集」には初心の10句が掲載され、

担当にも名を列ねている。

次の平成6年発行の「誌寿古希

記念句集」は私が主担し、同人と

誌友一般の二部に分けて1人15句

を収録、六六八人の参加を得た。

今回は第4集にあたる訳で、不況
の折柄、一部にあやぶむ声もあつ

たが、担当した奥田みつ子さんら

の熱意と同人をはじめとする皆さ
んの協力で千人の大台を越え、千

余頁の大冊となった。おそらくこ

れが、私が参加する最後となると
思われる記念句集の刊行を心から
お祝いしたい。

(田中 正坊)

▲小学館発行「数え方の辞
典」が売れているという。

「数え方はもののとらえ方

を映しだす鏡です。なんで
も一個と数えていません
か」とは謳い文句である。

▲たとえばマグロは泳いで

いるときは一匹、商品や漁
の獲物となると一本、頭と

背骨を落とした半身は一

丁、短冊状に切り分けると

一さく、舟盛りにした刺身

は一舟、そしてスーパーで

売られるときは一バックと
数えるのが正しいらしい。

▲「世界の中心で愛をさけ

ぶ」(片山恭一作・小学館)
が国内小説初の三〇〇万部

のベストセラーと聞く。先

頃の芥川賞の「蹴りたい背
中」も「蛇にピアス」も爆

発的に売れている。

▲読書離れが指摘されて久

しいが、売れる本は売れて

いるのだ。子供のころから

中心で……も十代の芥川賞
作家の小説も読んでいな

い。読みたいとも思わない。

▲若い世代の本は噛み切れ
ないステーキのように多

分、咀嚼できず消化不良を

起すのであろう……と読まず
嫌いである。読書には体力

がいると思うが、若いころ

は手当たり次第に読みふけ
つたものだ。読書が心の飢

えも食欲も満たしてくれな

あの頃が懐かしい。(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（10月号）地名

市 県
姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



二 賞 選 考

応 募 用 紙

路 郎 賞 (川柳塔欄・同人)	川柳塔賞 (水煙抄欄・誌友)

○印を入れてください。

きりとりせん

地名

姓・雅号

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成15年9月号から平成16年8月号までの自分の入選句から8句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 106・P 107を参照して下さい。

作品募集

10月号発表(8月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	奥田みつ子選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵選
茴香の花(3句)	政岡日枝子選
吟副	田辺正三郎選
「ちやっかり」	松本文子選
「生む」	鶴田遠野選

初歩教室「孫」(3句) 三宅保州担当

11月号

課題吟「暖房」「ぬすむ」「しかし」
初歩教室「くるくる」

本社8月句会

とき 8月5日(木)午後5時半開場・6時半締切
—開催時間にご注意下さい—
ところ アイーナ大坂 4階 金剛東
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし
兼題 「きっかけ」 山本三郎選
「囲む」 長浜美籠選
「まぼろし」 山本希久子選
「鼓」 江口度選
「解く」 河内天笑選
席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 5000円

本社9月句会 7日(火)午後5時半より

兼題 「あっさり」「アングル」「風船」「かわく」「こだわる」

第23年度 夜市川柳募集

第3回「まぐれ」 板野美子選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
 - 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇四年(平成十六年)八月一日発行

編集者 河内天權 治

発行人 美研アクト

印刷所 大坂市阿倍野区三町二丁目一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)交元一六九一四番

振替〇〇九八〇一五一一三三六八番

恋も涙も、

五・七・五。

近代川柳に生涯をかけた一〇〇人を
田辺聖子が精選。もつとも
人間くさい「文芸」の愉しさを、
人と作品を通して紹介！



川柳の群像

明治・大正・昭和の川柳作家一〇〇人

東野大八 著

田辺聖子 監修・編

田辺聖子

一人一人の作家の生きざま、
運命と作品が奏でる協和感が美しい。
芳醇な川柳世界の香気に酔せかえるばかりだ。
(中略)こんなにさまざまな質が、タイプが、
ゆるされる川柳文学とは何と奔放で
大胆で自由なものだろう、と思わざるを得ない。

(「監修のことば」より)

集英社 好評発売中 定価2,625円(税込)

インターネットでも集英社の書籍、コミックスが購入できます。www.shueisha.co.jp

医療法人社団

ISO 9001 : 2000 認証取得

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00
土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)

<http://www.yukawa.or.jp>

〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分